埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第９集

一般国道17号線深谷バイパス道路関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅰ—

新ケ谷戸（しんがやと）

１９８２

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道17号は、古くは中山道とよばれ、東京日本橋を起点とし、埼玉県を南北に縦断して新潟市に至る延長約290kmにおよぶ主要幹線道路であります。

交通量の増大および車輌の大型化に伴う交通の質的変化に対処するため、建設省は、一般に上武国道と称される大規模バイパス道路の建設計画を進めています。

深谷バイパス道路はこの上武国道の一部で、熊谷市玉井を起点として現国道17号の東側をほぼ平行に北上し、大里郡岡部町にて現国道17号に取付く延長15キロメートルの道路であります。

この15キロメートルの路線にかかる埋蔵文化財包蔵地については、昭和46年から、県と建設省大宮国道工事事務所で慎重に協議が重ねられましたが、熊谷市内の玉井・上奈良地内の4遺跡の一部が路線にかかることになり、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査事業は、昭和55年度、建設省関東地方建設局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものであります。

本書は上奈良地内の新ヶ谷戸遺跡を中心とした4遺跡の報告書であります。この記録が完成するまでに、多くの御協力をいただいた建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所はもとより、熊谷市教育委員会、地元関係各位に改めて深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　長井五郎

例　言

1. 本書は一般国道17号線深谷バイパス道路にかかる、熊谷市新ヶ谷戸遺跡（昭和55年、委保第5の3685号）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県教育委員会文化財保護課の調整を経て建設省の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年10月7日から昭和56年3月10日に亘って実施し、整理・報告書作成作業は同事業団が昭和56年度に受託し、実施した。
3. 出土品の整理および図の作成は山下秀樹、利根川章彦が主にあった。
4. 発掘調査における写真は、坂野和信、宮昌之、山下、利根川が遺物写真は宮崎朝雄、細田勝、利根川が撮影した。
5. 本書の執筆はⅠ—1、埼玉県教育局文化財保護課職員、Ⅰ—2、Ⅱ～Ⅴ、利根川があたった。
6. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第4課職員があたり、横川好富が監修した。
7. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示，御助力を得た。

磯崎一、柿沼幹夫、金子正之、國平健三、小久保徹、酒井清治、笹森健一、沢出晃越、鈴木徳雄、中田英、中村倉司、坂野和信、松本富雄

目　次

序

例　言

Ⅰ　発掘調査の概要……1

1.　発掘調査に至る経過……1

2.　調査の経過……3

Ⅱ　遺跡の立地と環境……5

Ⅲ　遺跡の概観……11

1.　調査の方法……11

2.　遺跡の概要……12

Ⅳ　遺構と出土遺物……13

1.　古　墳……13

2.　住居跡……25

3.　溝　跡……48

4.　土　壙……54

5.　その他の出土遺物……55

Ⅴ　結　語……73

挿 図 目 次

第１図　遺跡分布図……6
第２図　遺跡周辺地形図……10
第３図　遺跡全測図……折り込み
第４図　１号墳平面図(1)……14
第５図　１号墳墳丘土層断面図……折り込み
第６図　１号墳平面図(2)……15
第７図　１号墳石室平面図・断面図……16
第８図　１号墳石室内遺物出土位置図……18
第９図　１号墳出土遺物(1)　土師器・須恵器……19
第10図　１号墳出土遺物(2)　須恵器甕と栓状土製品……20
第11図　１号墳出土遺物(3)　鉄製品……21
第12図　１号住居跡平面図・断面図……24
第13図　１号住居跡出土遺物……26
第14図　２・４・５・６・７号住居跡平面図および断面図……折り込み
第15図　２号住居跡出土遺物(1)……31
第16図　２号住居跡出土遺物(2)……32
第17図　３号住居跡平面図および断面図……37
第18図　３号住居跡出土遺物……38
第19図　５号住居跡出土遺物……43
第20図　２・４・５号住居跡カマド平面図…44
第21図　２・４・５号住居跡カマド断面図…45
第22図　７・８号住居跡カマド平面図および断面図……47
第23図　８号住居跡出土遺物……48
第24図　１号溝跡平面図および断面図……51
第25図　１号溝跡土層断面図……折り込み
第26図　２号溝跡および石列平面図および断面図……53
第27図　２号溝跡および石列出土遺物（平瓦）……54
第28図　１号土壙・２号土壙平面図および断面図……55
第29図　グリッド出土遺物(1)……57
第30図　グリッド出土遺物(2)……58
第31図　グリッド出土遺物(3)……59
第32図　須恵器実測図および拓影図(1)……67
第33図　須恵器実測図および拓影図(2)……68
第34図　須恵器拓影図(3)……69
第35図　土錘実測図(1)……70
第36図　土錘実測図(2)……71
第37図　ガラス玉実測図……71

図　版　目　次

図版1　　鼈と栓
2上　遺跡遠景
下　発掘調査風景
3上　1号墳全景
下　1号墳羨門閉塞状態
4上　1号墳石室全景および石室内掘り方（封土除去後）
下　1号墳石室第2次棺床面直刀出土状態
5上　1号墳須恵器出土状態（鼈）
5下　1号墳須恵器出土状態（細頸瓶）
6上　第1次棺床面直刀出土状態
下　1号墳右側壁石積み状態
7上　1号墳羨門および前庭部石積み状態
下　1号墳両側壁石積みおよび持ち送り状態
8上　住居跡群全景（北から）
下　1号住居跡全景（南東から）
9上　2・4・5・6・7号住居跡全景（北東から）
下　3号住居跡全景（北東から）
10上　2号住居跡全景（南西から）
下　5号住居跡全景（北東から）
11上　2号住居跡カマド内土器出土状態
下　5号住居跡北カマド付近土器出土状態
12上　7号住居跡カマド全景
下　1号溝跡全景
13上　2号溝跡および石列全景（南から）
下　2号溝跡および石列全景(北西から)
14上　1号土壙全景
下　2号土壙全景
15　1号墳出土遺物(1)　土師器・須恵器
16上　1号墳出土遺物(2)　鉄鏃・刀子・鞘金具など
下　1号墳出土遺物(3)　直刀
17　住居跡出土遺物　1・2号住
18　住居跡・グリッド出土遺物　2・3・5号住，G—18区など
19　2号溝跡・石列出土平瓦
20　住居跡・グリッド出土須恵器(1)　甕・蓋口縁部・坏底部
21上　グリッド出土須恵器(2)　1号墳周辺出土甕胴部片
下　グリッド出土須恵器(3)　甕胴部片
22上　住居跡・グリッド出土土錘
中　1号溝出土ガラス玉・住居跡出土モモ種子炭化物
下　グリッド出土骨片

Ⅰ　発掘調査の概要

1.　調査に至る経過

一般国道17号は、東京から新潟へ至る幹線道路であるが、増大する交通量に対処するために、建設省では昭和37年以来、大宮バイパス、新大宮バイパス、吹上バイパスを建設している。その後、国道17号ではさらにいくつかのバイパス建設が計画されている。

埼玉県教育委員会では、この事業と文化財保護との調整を図るため、昭和45年度に国庫補助を得て上武国道（上尾バイパス、熊谷バイパス、深谷バイパス、上武道路）予定路線のセンターラインを中心に幅２kmにわたって分布調査を実施した。その成果は、調整の基礎資料となるものであり、検討を重ねて台帳、地図としてまとめた。

昭和46年11月25日に、建設省大宮国道工事事務所から、一般国道17号熊谷バイパス、深谷バイパス、上武道路改良工事に伴う埋蔵文化財について照会があった。教育局文化財保護室（当時）では分布調査の結果と照合し、深谷バイパス路線上でも数ヶ所の遺跡が確認されたため、即日、教文第854号をもって回答した。

大宮国道工事事務所からは、昭和48年７月30日付け大国調第151号をもって、埋蔵文化財の調査方法並範囲・調査に要する費用負担などについての協議書が県教育長あて提出された。文化財保護課では、大宮国道工事事務所と協議を重ねたが、計更変更は不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになり、昭和50年２月27日付けで、その旨について回答した。また、調査機関、調査時期、調査経費の明細等については、改めて協議するよう記しておいた。

国道17号バイパスについては、これまで新大宮バイパス、熊谷バイパス建設に伴い県教育委員会が発掘調査を実施してきたが、増大するこれら公共事業に伴う発掘に対処するために、昭和55年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立された。これに伴い、17号バイパスの調査も事業団が実施することになり、調査実施について、大宮国道工事事務所、文化財保護課、事業団の三者で改めて協議を進めた。その結果、深谷バイパスにかかる遺跡のうち、新ヶ谷戸遺跡については、昭和55年度に調査を実施することになった。

法的手続を済ませた後、昭和55年10月から発掘調査は開始された。

文化庁からは、委保第５の3685号により文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

発掘調査の組織

1 発　掘

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	関根秋夫
		副理事長	本郷春治
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田　浩
			本庄朗人
発　掘	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第一課長	高橋一夫
			山下秀樹
			利根川章彦

2 整　理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井五郎
		副理事長	沼尻和也
		常務理事	渡辺澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤悦光
			関野栄一
			福田　浩
			本庄朗人
整　理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川好富
		調査研究第四課長	増田逸朗
			山下秀樹
			利根川章彦

3 協力者

熊谷市教育委員会、地元区長および地元住民

2. 調査の経過

深谷バイパス道路の熊谷市分の路線内には、当初、玉井地内に3ヶ所、上奈良地内に1カ所の遺跡あるいは包蔵地が確認されていた。埼玉県埋蔵文化財調査事業団では、昭和55年度、玉井地内の3遺跡を調査する発掘調査計画を立案し、現場に臨んだ。8月上旬、深谷バイパス道路起点に一番近い熊谷1号（下河原上）遺跡から重機による試掘を行なった。熊谷1号遺跡は現水田面との比高差1m内外の自然堤防上に立地する。現況は草地になっていたが、部分的に砂利を含む土を盛土されていて、ゴミ捨て場然とした状態になっていた。試掘の結果、現地表面から砂礫層まで20～30cm程しかなく、河川の氾濫、開墾や砂利採取を目的とした土取などによる攪乱を大幅に受け、遺構が確認されなかった。出土遺物は中・近世陶器小破片を2・3片検出するにとどまった。引き続き、小支谷を隔てた熊谷2号遺跡・3号遺跡を試掘した。熊谷2号遺跡は古墳3基が確認されていた。現況では現地表面よりわずか50cm程度の土の高まりが2ヶ所あっただけで、古墳に付随する土器や埴輪などの破片は採集されなかった。試掘は墳丘部分を避け、まず平垣面部分を掘り下げた。20cm程掘り下げると砂層の厚い堆積が見られ、掘り込みらしいものは確認されなかった。そこで、古墳とされた土の高まりも断ち割ってみたが、砂利と砂の互層になっており、河床堆積物を思わせる自然堆積を呈していた。ここにおいても、土取りの痕跡が散見し、出土遺物はかわらけか土師器の小破片が数点、中・近世陶器の小破片が十数点検出されたのみであった。熊谷3号遺跡は、約400m北側で、県道葛和田・新堀線を境として、北に落ち込む。ここでも約30cm程で砂まじりの褐色粘土層となりさらに30cm程で、厚さ1.5mを越える分厚い砂層に移行し、粘土層中には、ごくわずかな土師器小破片を検出したのみにとどまった。

かくて，約20,000㎡に及ぶ試掘調査の結果、当初昭和55年度分として計画された3遺跡はいずれも遺構の所在が確認されず、改めて、建設省と協議を行なった上、昭和57年度に予定されていた、熊谷4号（新ヶ谷戸）遺跡の試掘も合わせて行なうことになった。

新ヶ谷戸遺物の試掘は9月中旬に行なわれた。最初、表土の厚さは約30cm程と判断して進めたため、遺物は検出されなかった。トレンチの数ヶ所で標準土層堆積を確認するために、現地表面から約120cmの深さまで深掘りした。この試掘坑の断面あるいは底面から、ややまとまった量の土師器が検出された上、焼土を伴なう部分もあることが確認された。9月から10月初旬にかけて試掘調査が行なわれ、新ヶ谷戸遺跡の発掘調査に関する委託契約も結ばれて、10月1日から本調査が開始されることになった（財埋文第153号）。

10月1日より行なわれた本調査における主な発掘作業の経過を以下に示すことにする。

10月上旬　養蚕の作業のため、発掘作業員が集まらず、遺構確認進まず、発掘区の約$\frac{1}{2}$について終了。確認面が灰色粘土で、乾燥すると一面白くなってしまうため、落ち込みが見にくい。2mグリッドを設定し、土器のポイントを落しながら、遺構確認作業を行なう。10月3日、1号溝を確認するが、幅員や延長については不確定。10月7日発掘区南西端の壁面沿いに、カマド3ヶ所を確認。

10月中旬　作業員を2班に分け、1号墳石室の精査と住居跡・土壙・溝などの遺構確認を併行して行なう。1号墳は石がかなり散在し、側壁も大幅にくずれているようであったので、まず石の分

布状態を確認した。

10月下旬　古墳と大溝跡周辺に重点をおいて精査・遺構確認作業に入る。農繁期で作業員が激減する。1号溝は幅員の確認と土層観察のために、調査区南西端壁面沿いにトレンチを設定。

11月上旬　作業員わずか2名。10月下旬に残しておいた、遺物分布図作成・遺物取り上げ作業と、1号溝土層断面の精査を行なう。

11月中旬　1号溝に新しいトレンチを2本設定し、掘り下げて、幅員・延長方向の確認を続行。1号墳は葺石を検出したので、残存状況を確認。石室内部に崩落した側壁石材の排除を行なう。

11月下旬　1号墳前庭部を清掃し、前庭部内部の土層堆積・石による閉塞状態の断面図を作成しつつ、前庭部の石積みを露出させる。この間、前庭部の前面に散乱する土器群の分布状態を作図し、取り上げる。1号溝は幅員・深さ・延長方向が確定したので、溝内の堆積土を排除し始める。なお、発掘区の東南に前方後円墳かと思われる土の高まりがあり、路線内に一部かかるので、トレンチを設定して、土層断面を観察した。その結果砂礫と褐色粘質土の互層が上から下まで続いた。

12月上旬　「前方後円墳」のトレンチ完掘し、盛土にあたる部分も河床堆積物としての砂礫と粘土の互層と考え、古墳ではない、と判断して、発掘作業を中止した。1号墳は葺石の実測にとりかかり、石室内の精査も進めた。漸次、石室各部の写真撮影行なう。周溝の確認も行なうが、未確認。カマドを検出した発掘区南西端部分の精査も行なう。

12月中旬　1号墳石室上端部平面図、および葺石平面図作成し、前庭部・葺石部に散在する土器の出土状態を写真撮影・分布図作成。1号土壙・2号土壙を完掘し、土層断面図・平面図作成、写真撮影。住居跡分布の予想される南壁部分を拡張し、その周辺を含めて、プラン確認を続行。土器は大量に出土するが、プランは不明瞭。F—16区に出土した滑石製小玉を紛失してしまった。

12月下旬　G—17区に1号住居跡の平面プランを確定し、掘り下げ始める。1号墳は石室側壁面図を作成。石室各部写真撮影。G—16区、F—16～18区の住居跡プラン確認続行。

昭和56年1月上・中旬　利根川1月12日まで風邪に倒れ、高橋課長・坂野調査員らのご援助を仰ぐ。1・2・3・4・5号住居跡のプランを確定し、掘り下げる。1号墳前庭部・石室内清掃し、墳丘・配石状態の全体図を作成。前庭部閉塞状態を確認の上清掃し、前庭部写真撮影。1号墳全景写真撮影。閉塞石平面図・断面図作成し、取りはずす。さらに棺床面の石敷きを排除し、棺床面をたちわり、もう一枚下に当初の棺床面（第1次棺床面）を確認。同時に墳丘をたちわり始める。

1月下旬　墳丘のたちわりを終了し、土層断面図作成。石室内の掘り方を検出し、平面図・断面図作成する。住居跡群はすべて床面まで掘り下げ、床面精査、土層断面図作成。1・3号住居跡は完掘し、平面図作成・写真撮影。古墳の背後に石列が確認され、石積みの基壇を思わせるため、周囲を精査したが、建物跡は確認できず、石列に伴う溝跡（2号溝跡）を確認の上、土層断面図作成、写真撮影、平面図作成。一応作業員の作業を終了。残る住居跡群のカマド平面図・断面図作成、1号溝跡平面図・断面図作成および写真撮影、新たに検出された6・7・8号住居跡カマドに関するすべての作業を調査員のみで行なう。3月上旬に作業を終了し、遺跡の埋め戻しも行なった。この間、大塚・宮両調査員のご援助を受けた。3月10日、調査事務所の整理を行ない、発掘調査を完了した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

新ヶ谷戸遺跡は埼玉県熊谷市大字上奈良に所在し、国鉄高崎線篭原駅の東北東約1.8kmの位置に当っている。東経139°20′26″、北緯36°11′付近である。

本遺跡は、荒川旧河道の中流域に形成された、自然堤防上にあり、遺跡の周囲には荒川の乱流路の名残りである小河川が2本東流する。従来の分布調査では、本遺跡はその所在があまり明確にされていなかったが、これは、荒川旧河道（場合によっては利根川旧河道）の氾濫によって、沖積土に厚く被覆されたためであろう。このような自然堤防は、本遺跡を乗せる上奈良—中奈良に続くものを発端にして、原島—代—柿沼—小曾根—今井—上中条まで続くもの、その南の天神河原—上川上につながるもの、東の大塚—在家—宮下—中新田あたりのもの、星川の両岸に広がるものなどきれぎれの状態で残って、下流までつながっている。従来この上にはそれほど多数の遺跡が検出されているわけではないが、いくつかの遺跡の調査例から判断する限り、これらの微高地にはかなり多数の遺跡があると見てよいだろう。

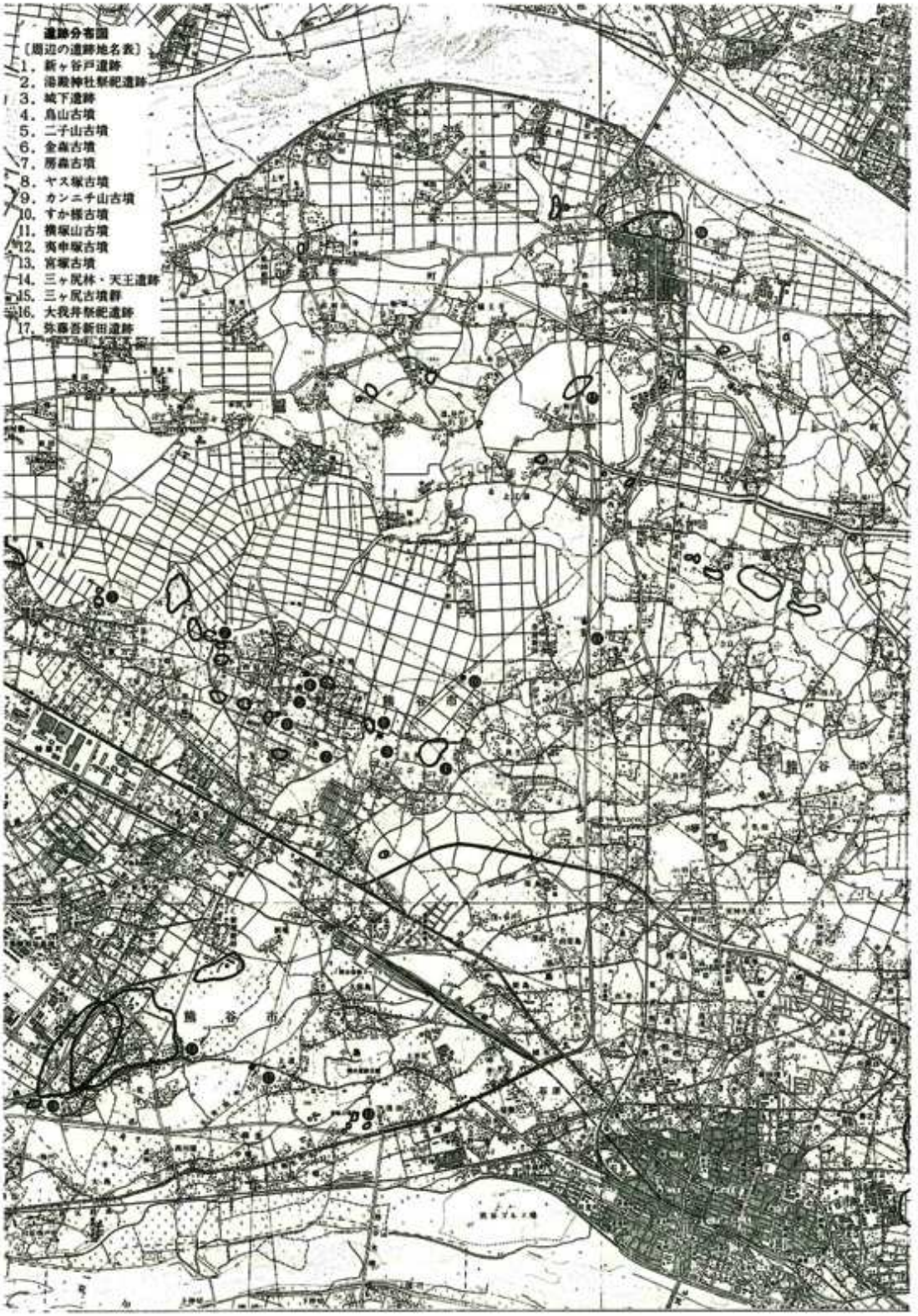
荒川中流域を遡行すると、荒川扇状地により形成された櫛挽台地（武蔵野面相当）、その南側に形成される段丘面（立川面相当）が広がり、熊谷市街周辺の低地帯に対して遺跡の密な分布が次第に明らかになりつつある。

以下、時代を追って、荒川中流域の遺跡分布について述べていきたい。

先土器時代の遺跡は明確になっているものはなく、縄文早・前期あたりまでの遺跡は数える程しかない。櫛挽台地東部の戸田川の谷筋には深谷市№23・97遺跡が早期の遺跡とされている。櫛挽台地中央部付近は縄文中期後半の遺跡が多く、東部の谷筋にもこの時期には遺跡が激増する。このうち台地中央部の西川・上唐沢川の谷筋にある出口・島之上・前畠遺跡は上越新幹線にかかって調査され、出口は加曾利EⅢ期～称名寺期の竪穴住居跡9軒・土壙7基を検出し、島之上は加曾利EⅡ・EⅢ期の住居跡4軒と加曾利EⅠ期～称名寺期の土壙14基を検出した。前畠遺跡は遺構が検出されなかったが、加曾利EⅠ期～堀之内Ⅰ期までの遺物が採集されている。また、これらより扇端部に近い小台遺跡、鼠裏遺跡も調査されていて、小台遺跡では加曾利EⅡ期～称名寺期の竪穴住居跡を12軒検出し、鼠裏遺跡では、遺構はなかったが、諸磯期、加曾利E期等の遺物を出土している（沢出晃越氏ご教示）。

縄文後期の遺跡は戸田川の谷筋に数える程しか存在せず、晩期の遺跡はほとんどなくなる。

一段下った立川面相当の段丘面では、三ヶ尻林遺跡で縄文前期黒浜期の竪穴住居跡11軒・土壙10数基が上越新幹線路線内で調査されている。これ以外にも、やや下流の上辻遺跡で縄文早期の土器が遺構に伴なわずに出土し（金子正之氏ご教示）、三ヶ尻天王遺跡においても安行系の土器片を検出した。今後、この段丘面でも、縄文時代の遺跡は各地で検出されると思われるので、櫛挽台地の縄文期の遺跡群の動態と共に、留意されるべきであろう。また、荒川扇状地扇端部東部の城下遺跡においても縄文後期堀之内期の土壙が調査され、近傍で打製石斧が採集されているので、これらの微高地にも部分的に縄文時代の遺跡が所在するようである。



第1図　遺跡分布図（縮尺1：62500）

弥生時代は全般的に遺跡が少なく、荒川扇状地扇端部を下った北方の沖積地に上敷免遺跡、立川面相当の段丘面上には三ヶ尻上古遺跡、上奈良の自然堤防より約3㎞北の自然堤防上の飯塚遺跡からそれぞれ須和田式土器が出土している。飯塚・三ヶ尻上古例は頸・胴部の三角・四角沈線区画文が確立し、やや新相に属すると思われる。上敷免遺跡は調査されていて、再葬墓2基から須和田期古相とされる壺型土器6個体が検出された。かなり下流になるが、熊谷市上之の池上遺跡では用水路乃至環濠と考えられる溝を伴なう須和田期の竪穴住居跡10数軒が調査され、遺構外であるが、銅鏃の出土も伝えられている。このほか、熊谷市街東方の平戸遺跡では信州の栗林式土器の系統に属する土器を出土している。櫛挽台地周辺は、柿沼幹夫氏の指摘されるごとく、その谷筋が、「水稲耕作を中心とする生業形態と結びついた、弥生時代以降の居住誘因を生み出す力が弱かった」ため弥生時代の遺跡をごくわずかしか見ず、沖積低地帯においても、近年いくつかの集落跡の調査例はあるものの、かなり限定された拠点的な「農村」が数えられるほどあるにすぎない状況であったようだ。櫛挽台地の扇端部中央付近にある桜ケ丘遺跡は弥生中期中葉～後葉で、寄居町用土平遺跡に近い様相をもつらしいが、詳細はわからない。弥生中期後葉～後期段階の遺跡はさらに少なく、水稲耕作の定着はさらに遅れてくるようである。

古墳時代になると、沖積低地帯にも櫛挽台地周辺にも集落跡・古墳群が形成されるようになる。五領期・和泉期の集落跡はまだそれほど多くない。妻沼低地の弥藤吾新田遺跡は五領期後半6軒、和泉期1軒の竪穴住居跡が検出されている。五領期の住居跡からはS字状口縁台付甕・複合口縁壺などの石田川式系統の土器と単口縁台付甕・壺が共伴している。和泉期の住居は初期的なカマドを有し、甕・甑・高坏・椀・坩の良好なセットを持つ。一方、下流域の中条遺跡群では、南河原村境の中条大塚条里遺跡のトレンチから五領期の土器を伴なう溝跡が確認され、さらに、五領期～和泉期の土器群と木器類を伴なう小河川跡の発見された東沢遺跡も注目される。東沢遺跡の土器は受口状口縁の外面に櫛歯状工具で刺突を施す甕の破片や、脚部上位に沈線文帯をもち、脚に穿孔する高坏など、東海西部的土器群を含み、頸部に縄文帯・網状撚糸文帯をもつ壺の破片、S字状口縁・くの字状口縁台付甕片、大きな裾広がりの高坏や長脚高坏、手捏土器などで構成される。木器はスコップ状やフォーク状を呈するもの、鍬、砧、叩台、槍状木器、角材、板などの農具、工具類が検出された。近年、木器を出土する遺跡は県内でも増加しつつあるが、弥生時代以降の遺跡の中では現在も最も豊富な内容を持っている。

また、中条遺跡群の西端にあり、大塚地区以東の微高地と区別される中島地区にも、古墳時代後期～平安時代の集落跡があるが、この中島遺跡の出土品中にも和泉期後半と考えられる高坏が含まれている。住居跡16軒、土師器窯址6基などが調査されている。出土している土器は鬼高Ⅰ式にあたるものはごく少数で、鬼高Ⅱ～国分期が集落の主体である。暗文の施された坏、把手付大型甑など注目すべき土器もある。

鬼高期以降の遺跡は数多く、規模の大きいものもある。まず上敷免遺跡であるが、鬼高期2軒・真間期2軒・時期不明1軒の計5軒の竪穴住居跡、真間期の土器焼成壙多数が調査されている。鬼高期の住居跡は鬼高Ⅰ期に属するもので、滑石製臼玉の未成品・完成品、砥石、台石、小ピットが検出され、滑石工房跡と考えられる。土器焼成壙は多量の土師器坏を出土し、多量の焼土と灰を伴

っていた。真間期の坏は正放射状暗文を伴なうものが多く、２号住の須恵器坏は底面中央に回転糸切り痕を残し、底面$^{2}/_{3}$を回転ヘラケズりで調整するもので、底径は口径の$^{1}/_{2}$より大きいものである。遺構の密度も高く、かなり定着性の強い集落であろう。

次に立川面相当の段丘面には、上流から下流に向かって、三ヶ尻天王遺跡、三尻中学校校庭遺跡、上辻遺跡、熊谷西高校校庭遺跡がある。三ヶ尻天王遺跡は鬼高Ⅱ期～Ⅲ期にかけての集落で、倉庫と考えられる掘立柱建物跡を伴なう。三尻中学校校庭遺跡は奈良・平安時代を主体とする集落跡で30軒程の住居跡を検出している。上辻遺跡は最近調査された遺跡で和泉期末～鬼高初期の良好なセットを出す住居跡１軒が確認されているほか、真間～国分期の住居跡を数多く検出している。「く」の字状口縁の甕、丸底で口縁の直立気味の稜のない坏を主体とする土器群や、灰釉陶器・高台付の須恵器坏、径の大きな須恵器蓋などの土器群が出土し、８世紀後半～10世紀代まで継続するようである。尚、三尻中学校校庭遺跡・上辻遺跡・熊谷西高校校庭遺跡は明瞭な切れ目を持たない一連の遺跡で、時間的にも補完関係にある可能性が強いという(金子正之氏ご教示)。熊谷西高校校庭遺跡も鬼高期～国分期の住居20軒以上が確認されているが、未報告のため、詳細は明らかでない。

これ以外にも、櫛挽台地の扇端部東部にある城下遺跡で鬼高Ⅰ期の土器焼成壙的土壙が検出され(沢出晃越氏ご教示)、妻沼町飯塚で鬼高Ⅱ期以降の集落跡、同じく鵜森・入胎でも真間・国分期の住居跡100軒以上が調査されている。このように、古墳時代後期以降は定着性の強い集落跡が、低地帯・段丘面・櫛挽台地の谷筋などに形成される。治水・灌漑の発達するこの時期に低地帯が広く水田化され始めるためであろう。

最後に、古墳・埴輪窯跡・祭祀遺跡であるが、上流域には黒田古墳群・小前田古墳群・見目古墳群が形成される６世紀後半以降、荒川中流域では、段丘面に三ヶ尻古墳群、広瀬古墳群が、櫛挽台地の扇端部東部の深谷市原郷には木の本古墳群が、上奈良周辺の微高地には、西から別府古墳群、五井古墳群、肥塚古墳群、中条古墳群が形成される。さらに、これらに先行して、５世紀末～６世紀初頭と考えられる前方後円墳が２基形成される。横塚山古墳と鎧塚古墳である。横塚山（中奈良）はＢ種横刷毛目整形の朝顔形円筒埴輪をもち、鎧塚古墳(中条)は大型の須恵器高坏形器台を中心とした墓前祭祀跡を伴なう帆立貝形古墳で、どちらも６世紀初頭を下らない時期の所産である。前述の中では三ヶ尻古墳群が調査にかかり、18基の古墳、古墳跡が調査され、埴輪を伴う古墳も多い。玄室プランはやや胴張りを呈する。特にやね塚古墳は２段築成の古墳で、円筒埴輪列が中段を一周する、径18mの古墳で、胴張り長方形プランの石室（長さ６ｍ）を持つ。副葬品も多く、かなりの有力者が葬られたものであろう。三ヶ尻古墳群は現状では調査にかかったものと現存するものを含めて40数基だが、100基以上が存在したことが予想されている。６世紀後半～７世紀代の築造とされている。

祭祀遺跡は妻沼低地の太我井と、上奈良微高地に近い西別府の湯殿神社が知られる。湯殿神社祭祀遺跡は鬼高期以降のもので、馬形13点、櫛形19点などを含む160点の滑石製品を出土している。これらは特定区域の水中に投下されたものらしく、水神信仰に関連すると考えられている。同じ西別府地内には、奈良・平安期の古瓦出土地も知られ、西別府廃寺と呼ばれている。さらに、付言す

るなら、条里遺跡としても、この地域は有名であり、東方の熊谷市中条、南河原、行田市池守で条里遺跡に関わる調査が行なわれているが、奈良・平安期の在地権力機構と条里水田の整備のあり方を考古資料を通じて検討することが可能になるのももはや時間の問題であろう。

新ヶ谷戸遺跡周辺の歴史的世界を概括したが、まだ、焦点の定まらない部分が多いので、いずれ別稿で検討することにしたい。

参考文献（順不同）

柿沼幹夫他『上越新幹線埋蔵文化財調査報告Ⅰ　前畠・島之上・出口・芝山』　1977年　埼玉県教育委員会

庄野靖寿・蛭間真一『上敷免遺跡』　1978年　深谷市教育委員会

蛭間真一他『小台遺跡』　1979年　小台遺跡調査会

埼玉考古学会『埼玉県土器集成』4　1976年

栗原文蔵・田部井功『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』　1976年　埼玉県遺跡調査会

並木隆・中村倉司『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』　1979年　熊谷市教育委員会

寺社下　博『昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　中条遺跡群・中島遺跡』　1980年　熊谷市教育委員会

荒川　弘他『妻沼西南部遺跡群Ⅰ』　1981年　妻沼町教育委員会

小久保　徹「三ケ尻林遺跡（上越新幹線熊谷1号）の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　1980年　埼玉考古学会

大場磐雄「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』33—8　1963年

埼玉県『新編埼玉県史　資料編2　原始・古代　弥生・古墳』　1982年

熊谷４号(新ヶ谷戸遺跡)
起点より1,560mの熊観センター位置
熊谷３号
熊谷２号
熊谷１号
深谷バイパス道路起点
0
300m

第２図　遺跡周辺地形図

Ⅲ　遺跡の概観

1.　調査の方法

新ヶ谷戸遺跡は荒川旧河道の乱流した地域の微高地に形成されているため、遺構は掘り込みの確認が困難な灰褐色粘質上に掘り込まれている。当初は1号墳以外の遺構はまったく確認できなかった。そこで、調査は遺構がなく、包含層のみの確認となることを予想して、発掘区全面に対する遺物の一点取り上げを原則にして行なった。

関越自動車道関係の発掘調査以来、埼玉県教育局文化財保護課、そして、埼玉県埋蔵文化財調査事業団で行なわれる発掘調査においては、座標北あるいは路線方向に沿った方位による10m乃至20mピッチのグリッド設定のために、基準点測量を中央航業株式会社に委託し、10m乃至20mピッチの測量杭を発掘区に打ち込んでいる。その測量杭の利用については、各個別調査担当者にゆだねられているが、最近では、2m乃至1mピッチの小グリッドを設け、遺物の一点取り上げ、出土状態の測量、遺構測量に活用する方法が普及している。

話は調査開始の半年前に遡るが、昭和55年度当初、埼玉県埋蔵文化財調査事業団発足後まもない頃、調査研究部調査研究第1課では、課内会議において発掘調査の方法の検討を行ない、各遺構別の調査法のモデル化を行なった上で、全調査員出席による会議に提起された。この時、調査法のモデルはどの遺構においても遺物一点取り上げを重視したものであったため、測量の不可能な高齢の作業員しか集められない現場ではどうすべきかなどの批判を受け、明確な解答を得られなかった。

その後、発掘調査法はあまり会議の席上で問題にならなかったため、各現場に委ねられるところとなった。幸い第1課の担当する国関係の調査事業では遺構が大変密に所在する遺跡の調査を手がけなかったこともあり、遺物原位置測量法が励行させた。

新ヶ谷戸遺跡においても、このような経緯を踏まえて調査に臨んだので、遺物原位置測量法による発掘調査になるのは当然の成り行きであったというべきかもしれない。

ところで、具体的な調査の方法についてはまだ触れていないので、以下にまとめてみよう。発掘区のグリッド設定のための基準点測量は中央航業に委託し、深谷バイパス道路の路線方向に即した方眼を組んだ。同社より提出された基準点測量成果簿を参考に記述する。グリッドの基準点は測量法に基づく公共座標（第9座標系）によって設定された。座標を引き出すために、二等多角点18752（東経 139°21′23″084、北緯 36°12′49″626、X＝＋23,822m31、Y＝－42,875m34、海抜高度 30.04m）を使用し、3つの測点を介して、BM1（X＝＋20,017m971、Y＝－42,756m601）を置き、路線方向(N－33.5°－W)に沿って10mピッチの直交座標を設定した。標高は標石 53—10（標高 29.890m）を使用し、発掘区の標高原点として、BM1（標高31.836m）、BM2（X＝＋20,076m401、Y＝－42,795m151、標高 31.762m）を設定した。調査においては主にBM1を使用することにした。BM1はD—20区、D—21区、E—20区、E—21区を画する点で、BM2はD—27区、D—28区、E—27区、E—28区を画する点でもある。

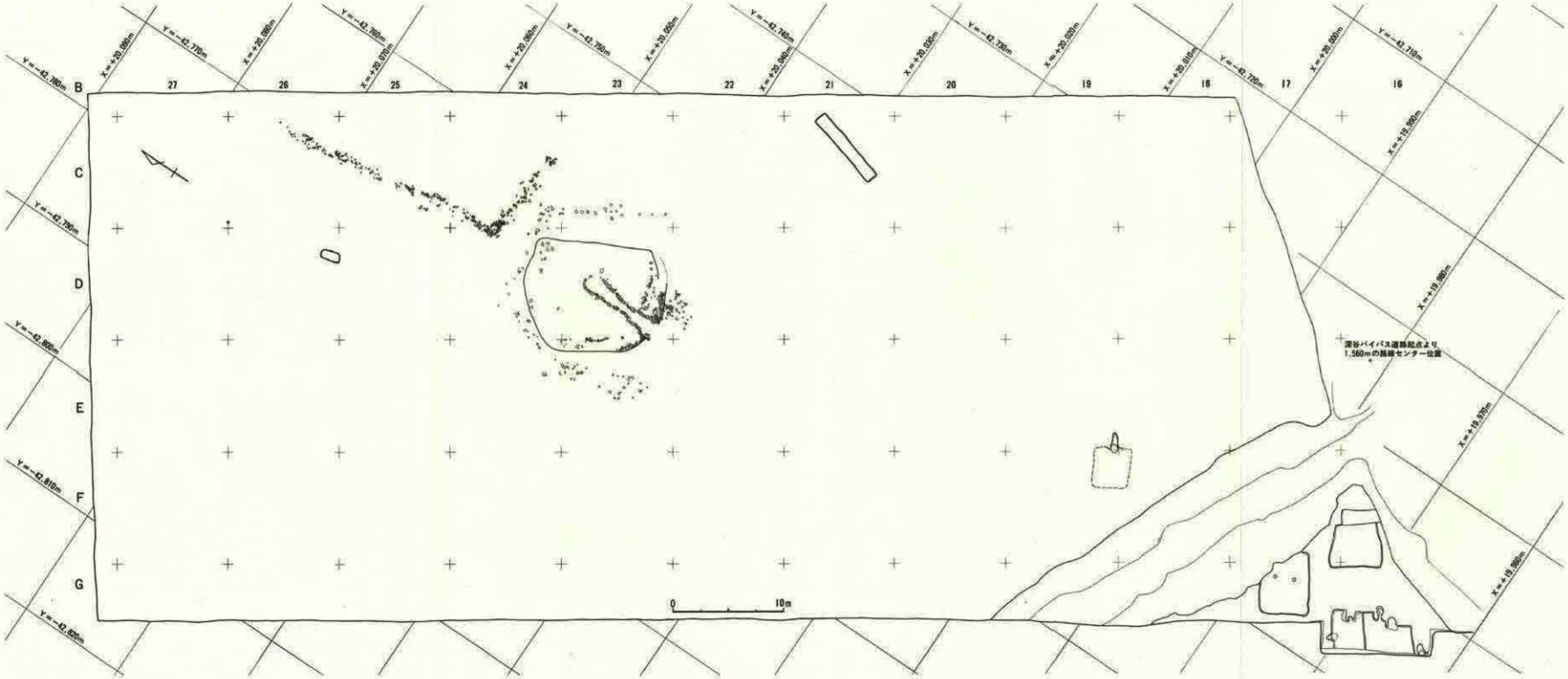
調査は、各杭間を2mに区切り、10mグリッドの中に2mグリッド25個を設定した。グリッドの名称は、大グリッドの番号・記号は北東→南西でB、C、D、E、F、G、南東→北西で16、17、18、19、20、……27、28とした。発掘区のさらに南東に「前方後円墳」の痕跡らしい土の高まりがあり、調査の必要な場合の措置として150m分の数字をとり、路線両サイドに拡張の必要な場合を考えてBから始めた。小グリッドは番号制で、南東隅を1とし、南西に向かって2、3、4、5とし、並行式で、一つ北側を6、7、8、9、10、以下25までとした。D—23—14区のように表記されることになる。便宜上、北東方向を北扱いし、小グリッド内の数値は北から50cm、東から73cmで、N＝50、E＝73のように記述し、遺物は基本的にはグリッドごとのノート（遺物台帳）に記入して取り上げた。遺構内の遺物取り上げも同様である。ただし、遺物は大半が細片になっているので、特定の遺物の廃棄を除いては、あまりはっきりした傾向を出せる資料となっていない。今にして思えば、本遺跡においては遺構検出を阻害していたきらいがないでもない。本遺跡の調査報告では、遺物の出土状態を検討するゆとりがなく、遺物の原位置とその意義については、特定のものを除いて一切捨象して記述してあることを付記しておく。

2. 遺跡の概観

遺跡は、荒川左岸の沖積地にあり、荒川旧河道または利根川旧河道の乱流の結果形成された氾濫原の中の微高地の一つに乗っている。深谷市街地周辺から西別府、東別府、玉井に達する広大な微高地が荒川扇状地の扇端部であるとするならば、本遺跡の乗る上奈良・中奈良の微高地は、そこからはずれた、断続的な自然堤防となる。本遺跡は自然堤防が北側に落ち込むあたりから、微高地中央部にかけてかなり広範囲に広がる遺跡である。深谷バイパス道路は上奈良の自然堤防の北端部に約200mかかり、約4,300㎡が調査区域となった。現地形では、標高31.80～32.30mで、水田面との比高差約1mである。調査前は古く買収済みのため、荒地になっていたが、周辺の地目は桑畑である。基本層序は、地表面から20cm程が耕作土、以下黄褐色粘質土層（厚さ40cm）、暗褐色粘質土層（厚さ20cm）、灰褐色粘土層（厚さ20cm）、砂層（厚さ20～40ｃｍ程度）、基盤礫層と移行している。遺物は暗褐色粘質土層の下部から灰褐色粘質土層にかけて認められ、この間に竪穴住居跡が掘り込まれたことは明らかである。調査の結果検出された遺構は次のとおりである。

古墳	1基	古墳時代末期～奈良時代の竪穴住居跡	8軒
奈良～平安時代の溝跡	2本	中世以降の土壙	2基

尚、これ以外に土師器片の集中する土器溜りが古墳の付近にあたるD—22区と旧地形の落ち際に近いC—17～18区、D—18区の境界付近に検出されたが、特に掘り込みを認めえなかったので、遺構扱いしなかった。また、8号住居跡の確認位置から考えると、E—17区～G—20区にかけて、数軒の竪穴住居跡が存在したことを考慮せねばならないが、ついに検出しえなかった。住居跡は調査区東南端の約200㎡に集中しているため、集落跡としての主体は発掘区の西方にあり、1号溝跡は西方へ、2号溝跡は東方に大きく延長されるであろう。


B
C
D
E
F
G
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
0
10m
深谷バイパス道路起点より
1,560mの路線センター位置

第3図　遺跡全測図

Ⅳ　遺構と出土遺物

1. 古　墳

1号墳（第4図～第11図）

1号墳は発掘区中央部北寄りに検出された。各方向とも20m近い範囲において、他の古墳あるいは古墳跡らしいものが検出されなかったので、あるいは単独に存在するものかもしれない。しかし、遺跡全体の広がりの中でとらえる限り、近傍に古墳がないと断定することはできないので、「新ヶ谷戸1号墳」と命名し、隣接地域の綿密な表面観察等の調査が行なわれることを切に望むところである。

本古墳は残存する墳丘のほとんどすべてが地表面より下に位置し、あるいは埋没古墳の一種と考えてもよいであろう。試掘調査の段階では、草深かったせいもあるが、古墳の所在を判断できず、深掘りによっても石材を動かすことはなかったため、奥壁と側壁の一部の石材が露出して、初めて古墳と認定した。

周辺の石の残存状況から考えると、当初、直径約15m程度の墳丘が築成されたようである。墳丘は地山から40～50cmの高さまでしか残存していなかったが、その高さ（標高31.80m前後）の面で一段テラスを持ち、狭い部分で幅1m、広い部分で幅1.5m程の平坦面が確認された。この内側に2段目の墳丘を構築すると、その直径約12mということになる。天井石を並べ、それを被覆するならば、1m以上の盛土を必要とすると思われるので、当時の地表面から2mあるいはそれ以上の墳丘を築いたと考えてもよいであろう。

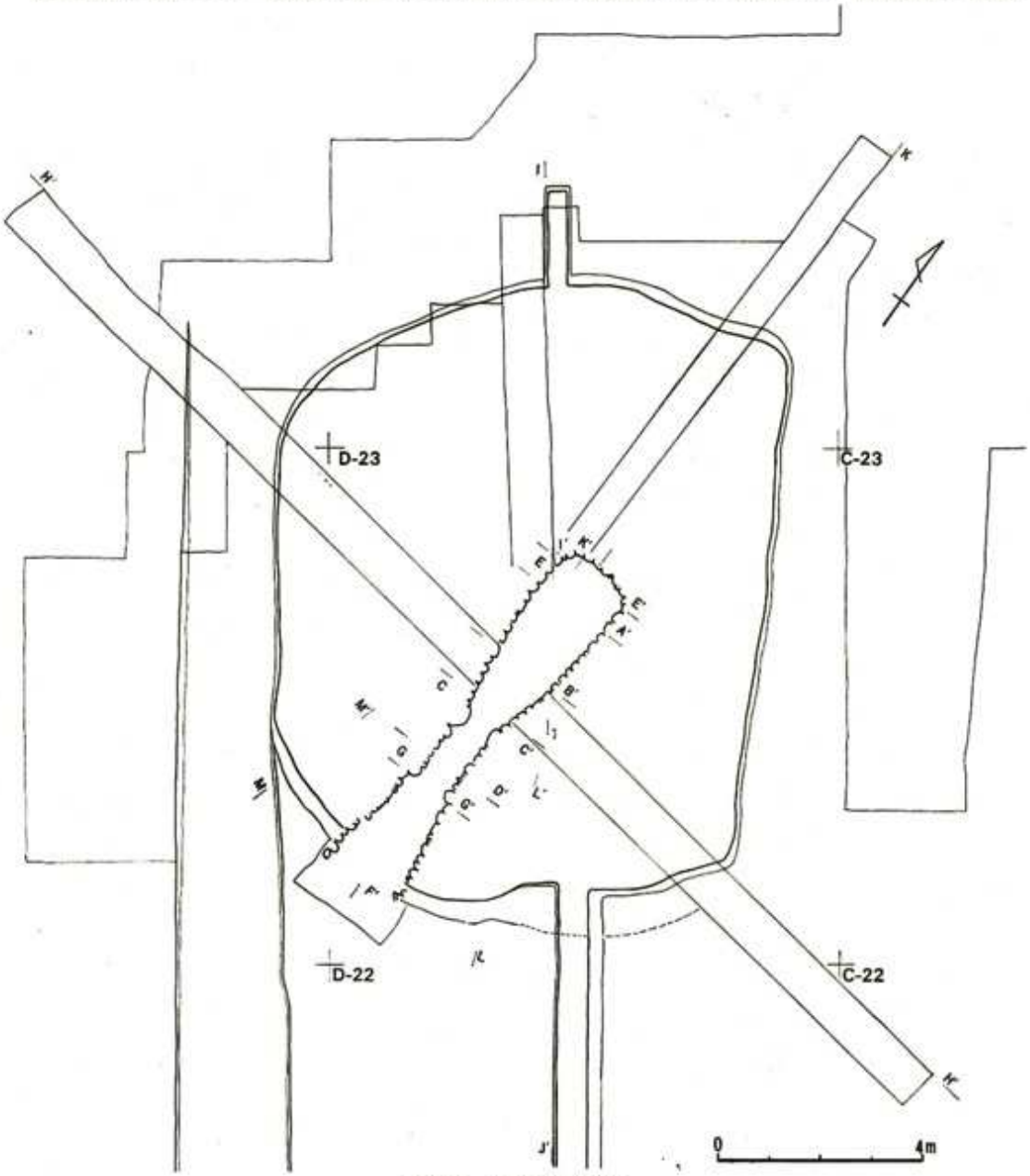
墳丘の前面にあたる部分は、葺石で固められていたが、かなり流れていて、約3m前方まで石材が確認されている。前庭部の端部から測ると、右側は約3m、左側は3m弱の範囲までしか遺存していない。テラスの内側の端部と思われる場所にも一部石列が円弧を描いて検出されたが、この中には2段以上積み重ねられた状態で検出される部分もあり、第2段も葺石で覆われていたことを予想させる。この葺石に混って、須恵器甕胴部の小破片が検出されている（第34図）。

内部主体は、横穴式石室である。前庭部まで含めた石室の全長7.70m、羨門から玄室奥壁までの長さ5.44m、玄室の長さ3.68m、羨道の長さ1.76m、玄室最大幅1.49m、奥壁幅1.40m、羨道最大幅0.69m、玄門幅0.52m、羨門幅0.60m、前庭部の長さ2.30m、前庭部前端幅1.53m、前庭部最奥部幅0.98mを測る。前庭部は両側壁ともに4～5段、高さにして60cm前後の石積みが残存する。開き方は直線的で、あまり大きくない。羨道部は狭く、一部側壁が失なわれているが、盗掘口となったためであろう。やはり5段、70cm程の石積みが残存する。羨門は玄室方向に傾斜するような形で構築されていて、石材は緑泥片岩、絹雲母片岩のような片岩系統のものが使われ、横向きに置かれ、羨道部の石積みと前庭部の石積みの間にはさみこまれるような状態になっていた。羨門の閉塞には、板状の石材を用いず、河原石をきれいに小口積みした後、前庭部に乱雑に石と粘土を詰めていったようである。玄門は基底部しか遺存していないので、よくわからないが、羨門よりも単純な

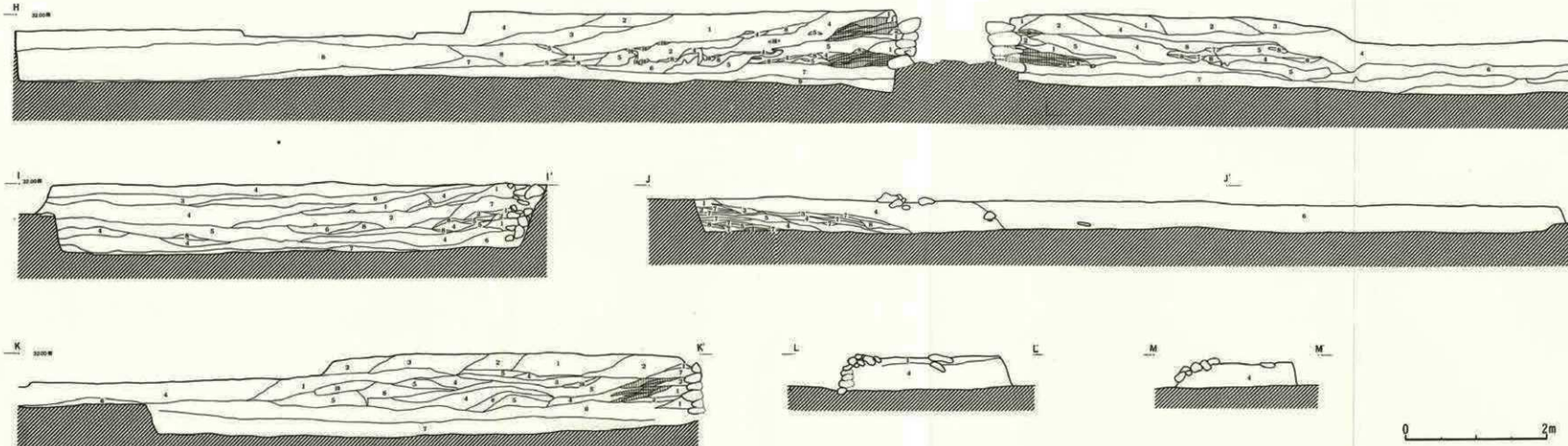
構造をしていたのではなかろうか。玄室は玄門付近でゆるくカーブし、やや直線的に奥壁部に移行し、奥壁部もゆるい曲線を描いていて、平担面が短い。奥壁は一枚石が用いられず、側壁からの延長のように石積みされている。奥壁の右半分と、右側壁の奥壁寄り約1.2m の部分の石材は大きく欠失している。盗掘口と推定することもできるであろう。石室平面プランは「徳利型」の胴張り形態で、所謂「毛野型」と称されるものに近い（註1）。右側壁は6段で約80㎝、左側壁は7～8段で約100㎝、奥壁は6段で80㎝弱の石積みが残存している。

石積みは河原石乱石積みであるが、内面はよく小口を揃え、かなり平担な感じに積まれている。

棺床面は二面あって、標高31.35m ぐらいにあたる第2次棺床面と、標高31.05m前後の第1次棺



第4図　1号墳平面図(1)



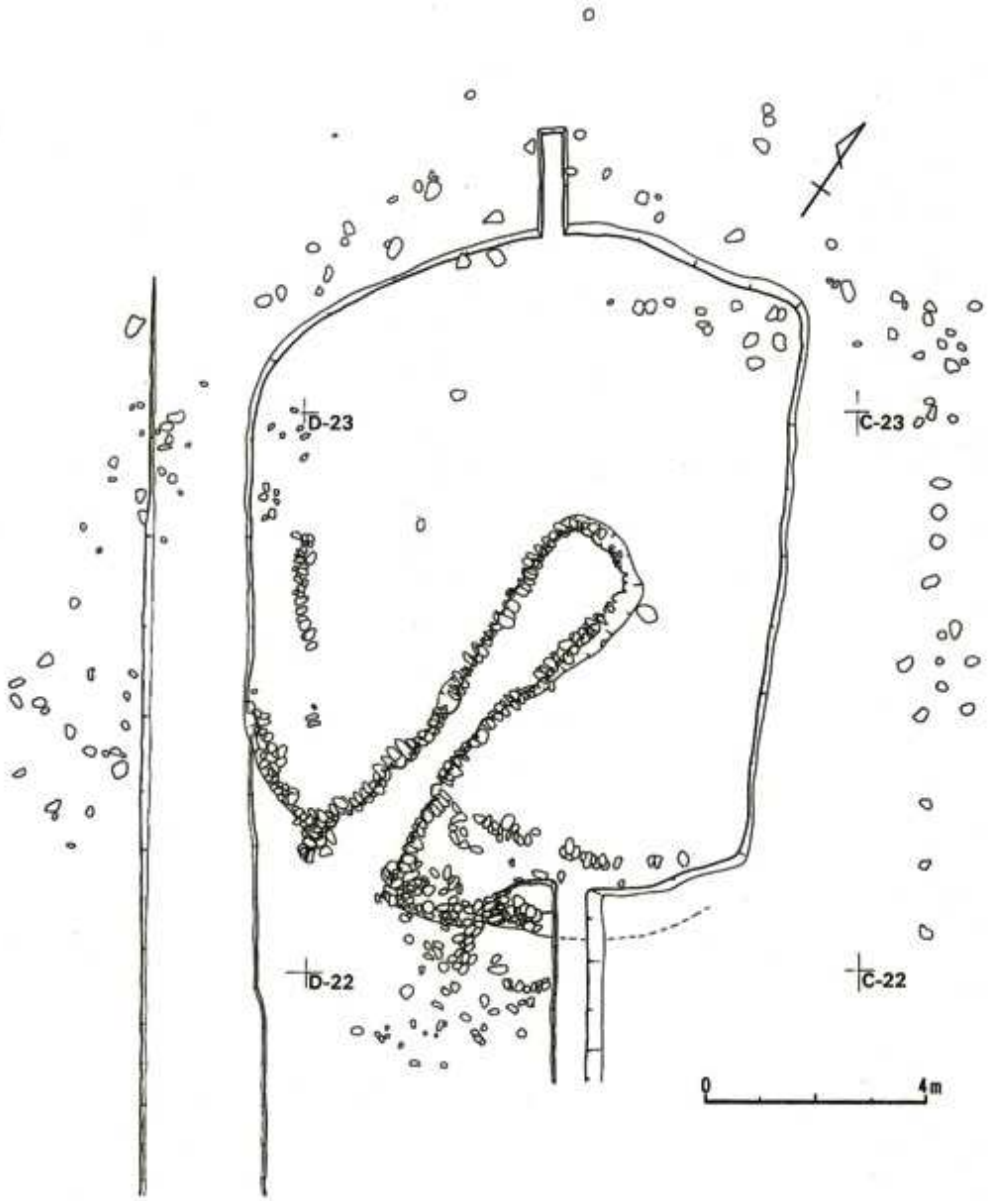
1号墳墳丘土層註

1．淡褐色土（粘性弱。小礫を多量に含む）
2．淡褐色土（粘性強。小礫を少量含む）
3．淡灰褐色粘土
4．灰褐色土（粘質。混入物少量）
5．茶褐色土（やや粘質）
6．暗褐色土（粘質）
7．茶褐色土（砂質）
8．褐色土（粘質）
9．青灰褐色土（砂質）
10．灰褐色粘土ブロック
※▭は版築様につき固められた灰褐色土

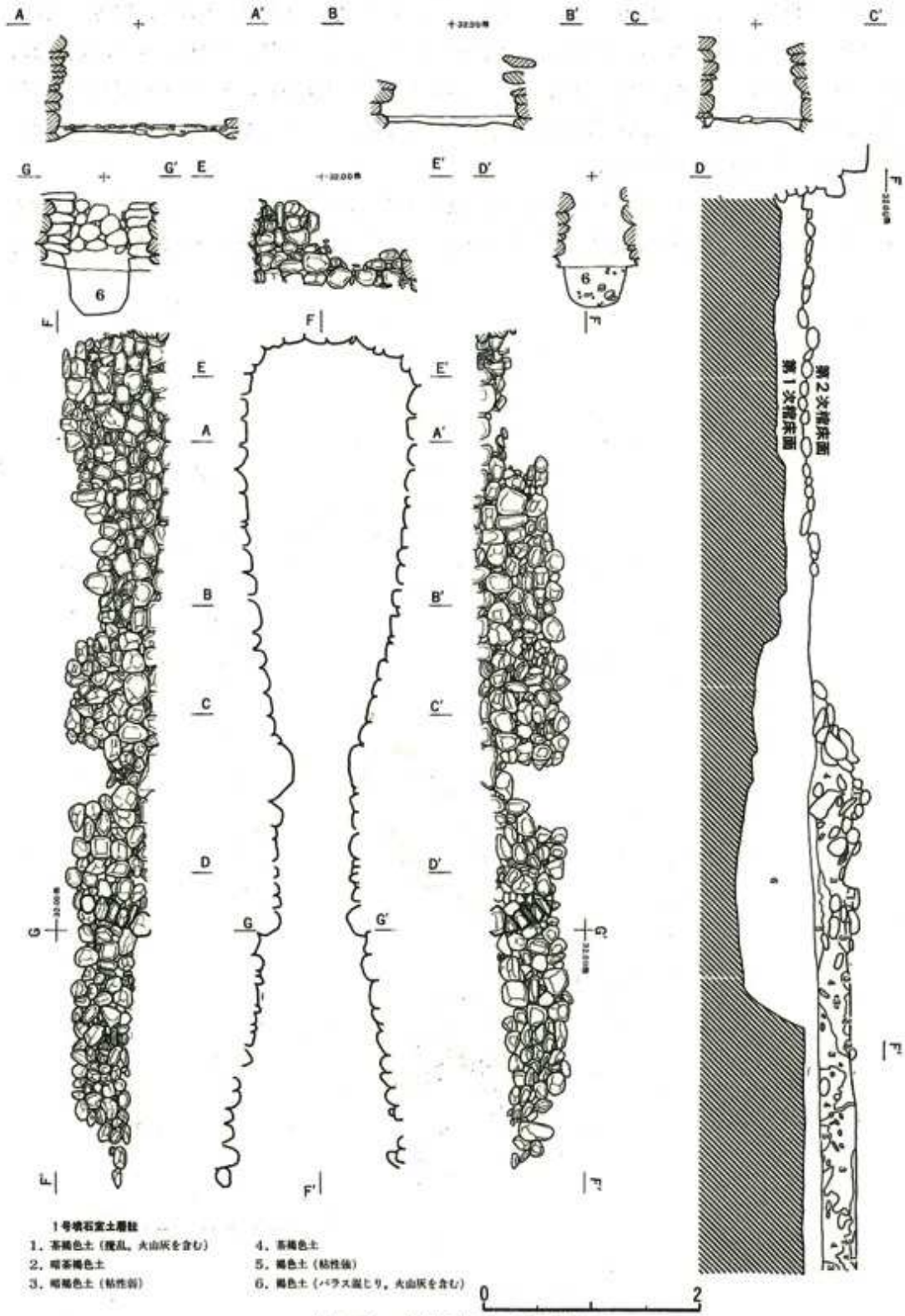
第5図　1号墳墳丘土層断面図

床面で、礫を多量に含む褐色粘質土を間層にはさんでいる。第1次棺床面は小礫ばかりで形成され、それをはがすときれいな淡褐色土の地山面となる。羨道部から前庭部にかけては掘り方があり、小礫と火山灰を多量に含む褐色粘質土で埋められていた。第2次棺床面は径10～20cm程度の割合大きい石が並べられ、羨道部の床面と10～15cm程のレベル差がある。前庭部と羨道部の床面の間にもやはり10cm以上のレベル差があり、半地下式を意識した作りになっているようである。なお、石室の主軸方向はN—3.75°—Eである。

墳丘の盛土は、灰褐色～褐色系統の粘土・粘質土を小礫と混じながら積んでいるため、見分けるのが困難であった。石積みの裏込めは、灰褐色粘土を主体とする版築状の土層と小礫を多量に含む



第6図　1号墳平面図(2)



第7図　1号墳石室平面図・断面図

褐色粘土によりなされ、墳丘を構成する盛土は、下層では茶褐色土・灰褐色粘土の互層、上層では、礫混じりの褐色土や淡灰褐色粘土などのやや乱雑な積み方によっている。版築状の盛土のあり方を見る限り、墳丘構築は2回に大きく分割することができそうである。つまり石室基底部を支える裏込め部分に一度しっかりした地固めがなされ、その上の約30cmの部分には版築部分がなく、石室の中～上段部分に重層的に版築状の盛土を行なっている。奥壁裏込め部分では、逆に版築状盛土が中段部分に集中し、その前後にないため、あるいは児玉郡児玉町長沖古墳群で確認されたように、側壁の構築が斜めに大きな単位をもってなされていたことと関連するかもしれない（註2）。そう考えれば、本古墳の左側壁が前庭部方向に傾斜をもった線で崩落している事実とも矛盾なく理解できるであろう。

最後に、遺物の出土状態について述べておきたい。遺物は第9図～第11図に示したように、土師器・須恵器が7点、鉄製品が直刀2本、鉄鏃あるいは工具の破片が7点出土している。まずフラスコ型細頸瓶であるが、第9図1は胴下半部のみが前庭部右壁の前端部に近い部分に接して出土し、残りの部分は前庭部外部の前方に流れていた。2は、前庭部右壁外部で、末端の石材に近い部分に横倒しになって出土した。3は前庭部外前方の若干距離をおいた部分に集中的に粉々に破壊されて出土した。須恵器坏・土師器坏も同じあたりに粉々になって検出された。これらとは別に聴は前庭部右脇のテラス上にあり、口縁部を前庭部前方の方向に向けて横倒しになった状態で出土し、平瓶は同じく左脇のテラス上にあり、やや羨門よりの部分で、左壁の石材に接するようにして検出され、やはり横倒しになっていて、いくつかの破片が付近に散乱していた。いずれも供献土器、あるいは祭祀的に破壊された土器である。盗掘のためか、石室内部には土器がないが、あるいはこれらと同種の土器が副葬されていたのではなかろうか。

次に、鉄製品であるが、すべて石室内から出土している。出土位置は、第8図に示した。図の番号は、鉄製品の実測図（第11図）の番号に一致する。右側壁に刺さって出土した4と、直刀7は、第2次棺床面に付随するもので、それ以外は第1次棺床面に付随するものである。かなり散在している上、第2次棺床面の遺物は盗掘にさらされているので、追葬の回数までは明確にできないが、棺床面を作り直しているため、2回以上になることは疑うべくもない。

1号墳出土鉄製品（第11図）

ここでは、1号墳に副葬された鉄製品を扱う。ただし、グリッド（D—27区）出土の鉄鏃1点、出土位置不明の鉄製品2点も都合により同じ図に掲載したので、あわせて述べておくことにする。

1は、先端が突り、メス状に刃部を作る。軸部の断面は長方形を呈し、6㎜×3.5㎜程の大きさである。この他にも錆着の顕著な断片2点を含むが全形は不明確である。あるいは何らかの工具の破片であろうか。

2は、軸部のみの断片2点で、やはり全形の推定は不可能である。断面はそれぞれ、6.5㎜×5㎜、6㎜×4.5㎜程の長方形を呈する。鉄鏃の断片であろう。

3は、先端部と軸部の末端を欠く、現存長5.25cmの破片である。軸部の断面は6㎜×4.5㎜の長方形で、端部の厚みは錆着で不明確だが、3㎜程になり、先端部まで徐々に細るようである。先端部

の幅は1㎝弱であり、軸部との境は丸くなっているように見える。一種の鉄鏃と考えておきたい。

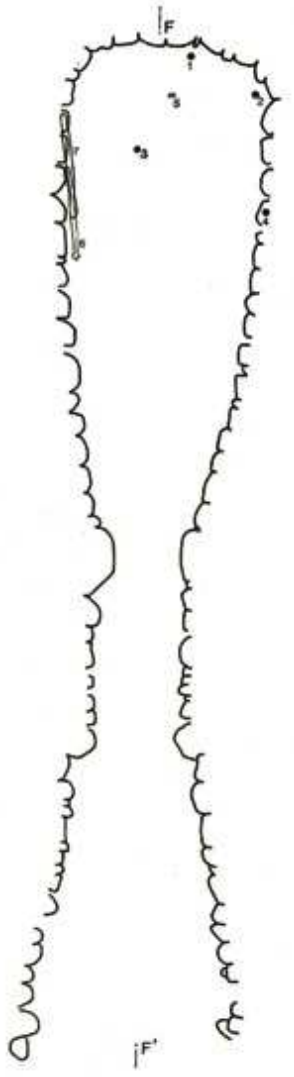
9は、刀子の刃部の破片である。身幅1.2～1.3㎝、刀幅4㎜を測り、長さ5.1㎝程残存する。

4は、残存長8.7㎝を測り、軸部の断面は円形に近く、先端部はやや曲っている上、頭部は丸い。先端部には、小さな長方形の浅い凹部があるが、あるいは、錆のためにできた傷かもしれない。いずれにしても、これは、鉄鏃と考えられないものであって、何らかの工具の一部としておきたい。

5は鞘金具乃至は鎺と考えられるものである。直刀とはかなり離れた位置に出土しているので、直刀がもう1本あったか、あるいは、まったく別の器具の一部ということになる。全形の$^{1}/_{2}$強の部分が残存する。大きさは、長さが2.3㎝、断面が3.5㎝×1.65㎝程の楕円形で、厚さは最も厚い部分で2.5㎜、薄い部分で1㎜を測る。

8・10・11は出土位置不明で、何の器具かもわからないものである。円盤状を呈する8と板状で三つ角の先端部をもつ11は、錆着のあり方が他と異なり、近・現代の製品の断片かもしれない。10は、先端の錆着が激しく、形態の推定が困難であるが、鉄鏃ではないようである。残存部の長さ2.1㎝、幅1.6㎝、厚さ3.5～2.5㎜で、茎のように突き出た部分もある。

12はD—27区出土の鉄鏃である。翼状の先端部の片側に断面の丸い茎を取り付けたもので、先端部の断面は茎の部分で鈍角に屈折している。残存部長4.9㎝、先端部幅1.85㎝、先端部（刃部）の長さ推定4.0㎝、茎径5～7㎜、刃部の厚さ2㎜を測る。

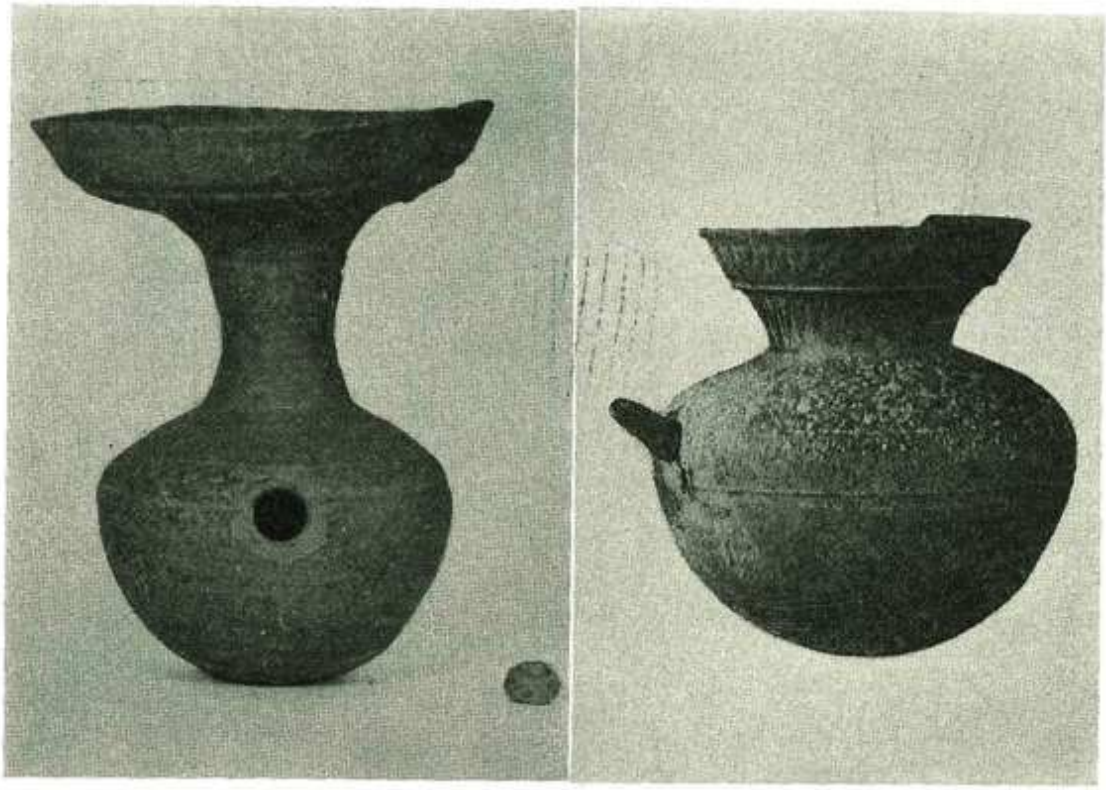


第8図　1号墳石室内遺物出土位置図

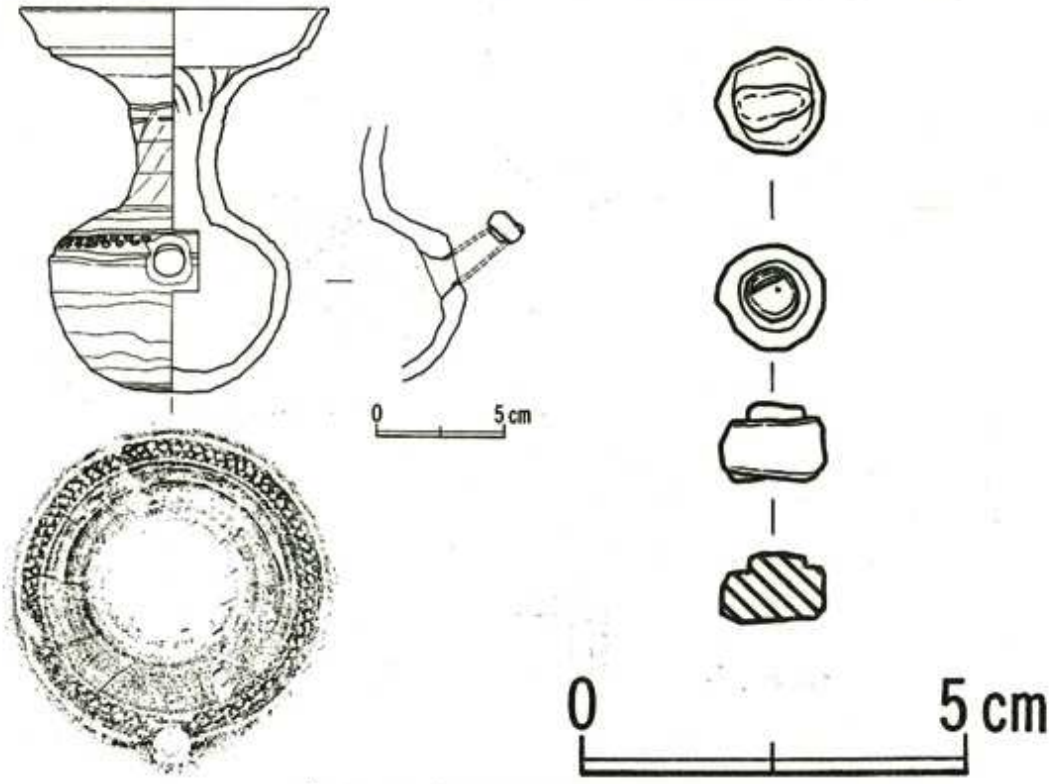
6は第1次棺床面出土の直刀である。4ヶ所で折損し、錆着著しいために、計測できない部分もあった。全長70.0㎝、刀身幅は根元で3.5㎝、刀身の中位で3.0㎝、先端付近で2.65㎝と漸次的に細る。刀身棟幅7～8㎜、刃幅3㎜、刀身長64.8㎝、茎長4.5㎝、茎幅1.8㎝、茎厚4㎜を測る。ツバ乃至鎺止金具を錆着する。長さ4.5㎝、幅2.5㎝、厚さ4～6㎜である。鞘金具状の痕跡も残るが、形態不明。平棟平造り。

7は第2次棺床面出土の直刀である。全長78.3㎝、刀身幅は根元3.6㎝、中位3.3㎝、先端2.95㎝で先細りである。刀身棟幅9～7㎜、刃幅2～3㎜、刀身長70.3㎝、茎身最大幅2.45㎝、茎厚6㎜、茎長8.0㎝を測る。やはり4ヶ所で切損し、先端部は落石等により、横に屈折している。付随する金具はない。刀身は先細り気味。平棟平造り。

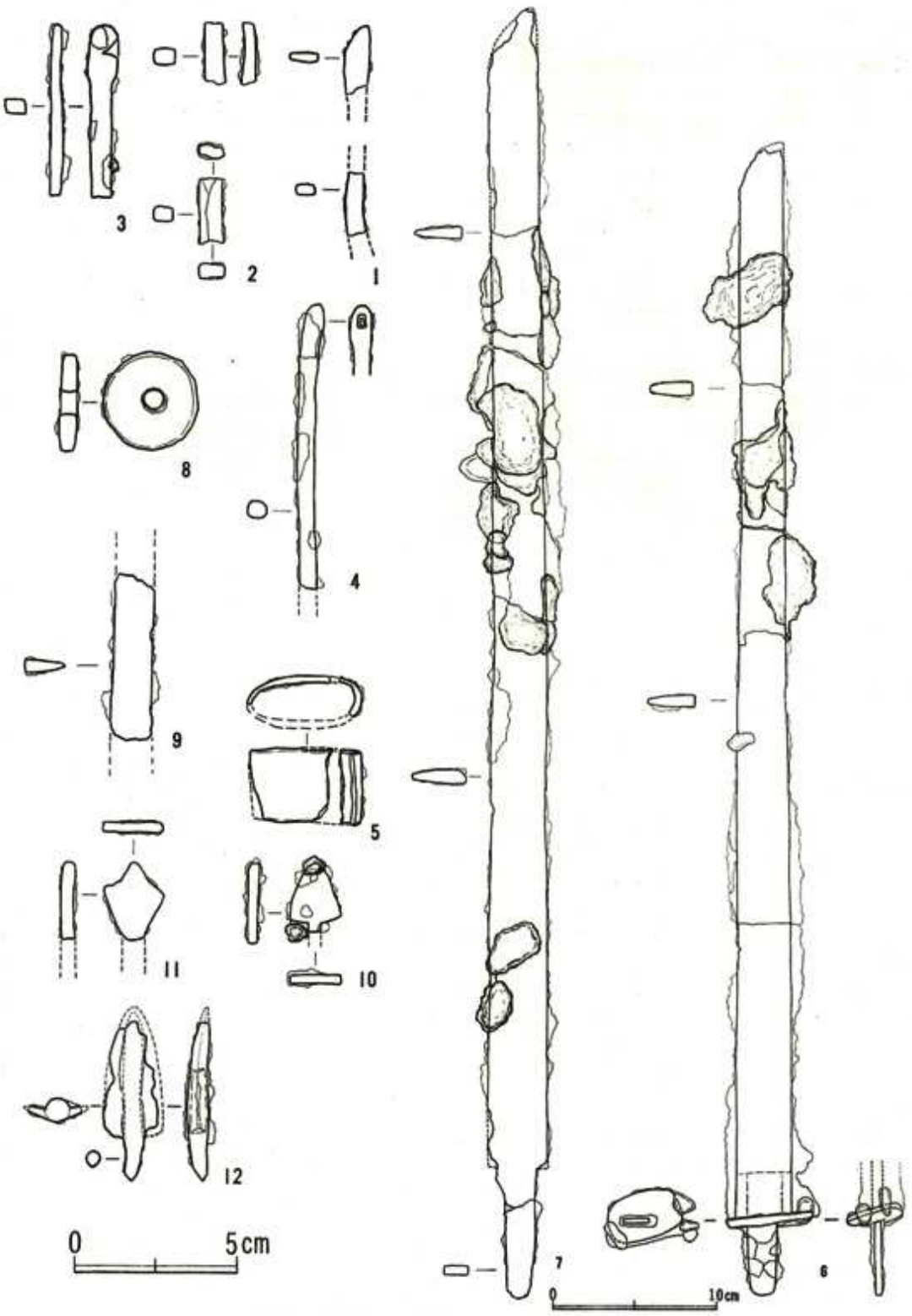
第9図　1号墳出土遺物(1)（土師器・須恵器）



図版1　瓶と栓　(左)新ケ谷戸1号墳(縮尺1/2)　(右)堺市四ツ池遺跡(高さ15.4cm)



第10図　1号墳出土遺物(2)　須恵器と栓状土製品

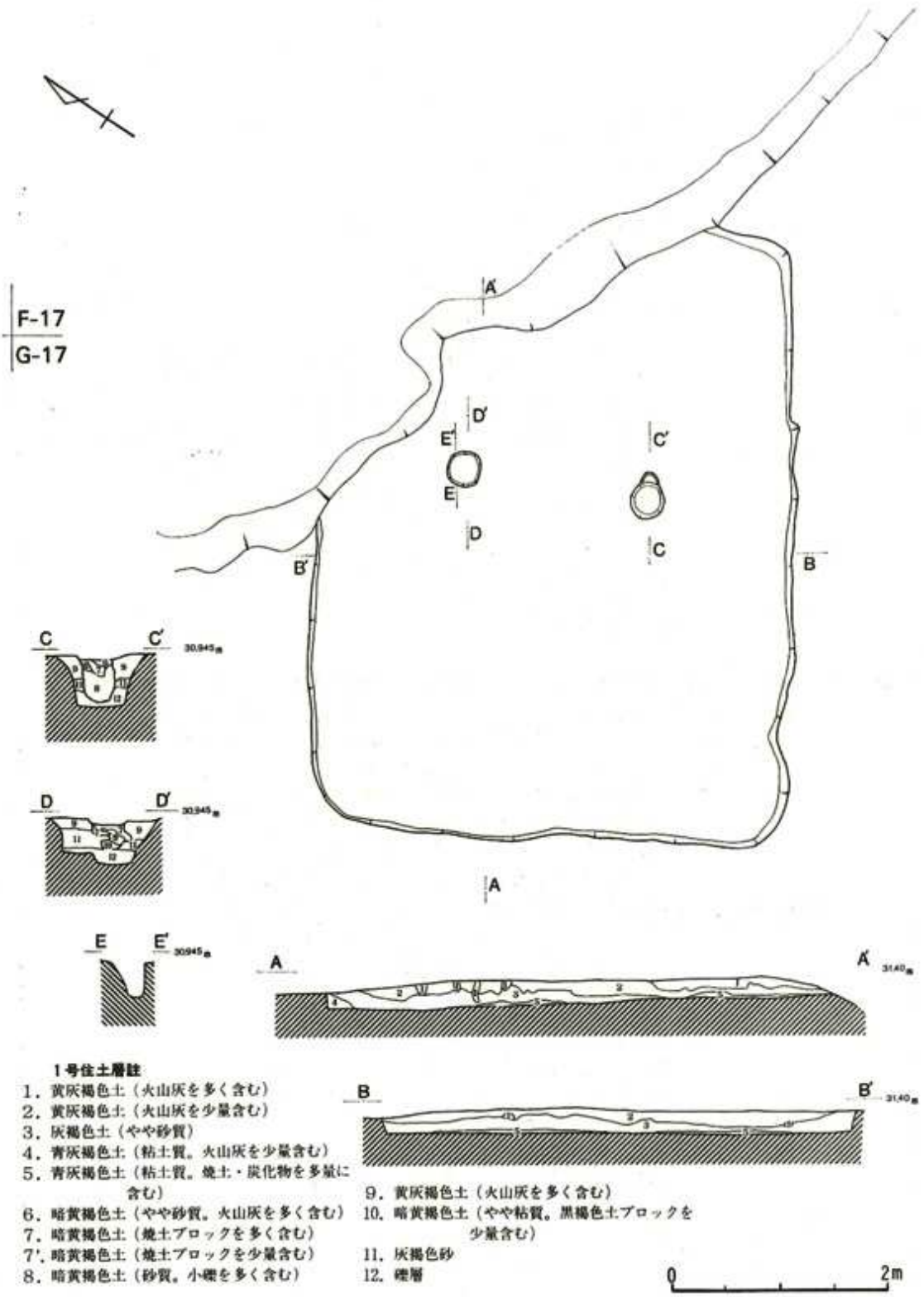


第11図　1号墳出土遺物(3)（左）鉄鏃・鞘金具など（右）直刀

1号墳出土土器観察表（第9図～第10図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
細頸瓶	1	口径 10.0 胴径 16.6 器高 24.5	口縁部内折し、口唇部はやや丸い。頸部はラッパ状に開き、球形の胴部に接合される。胴部はロクロ穴をやや薄い粘土板でふさぎ、ロクロ目に対して斜めに頸部を接合する。自然釉はロクロ穴と反対方向に流れ、濃緑色、アバタ状。色調灰褐色。胎土微細。黒色粒器面に目立つ。焼成堅緻。	口縁部～頸部ロクロナデ（ロクロ右回転）。胴部ロクロナデ後、ロクロ穴と反対側半面回転ヘラケズリ（いずれもロクロ左回転？）。	3/4残存
細頸瓶	2	口径 8.7 胴径 14.4 器高 21.05	口縁部は直立し、口唇部はわずかに突る。頸部から若干屈曲していて、口縁部直下には段がある。頸部はラッパ状に開き、中位に2本の沈線をもつ。胴部はロクロ穴とその反対側が若干つぶれる球形を呈し、ロクロ目と直角に頸部を接合する。ロクロ穴はやや厚手の粘土板でふさがれる。胴部と頸部の接合部および口縁部内面に自然釉アバタ状にかかり、緑褐色。色調灰白褐色。胎土微細。黒色粒器面に目立ち、細粒砂多。焼成堅緻。	口縁部～頸部ロクロナデ（ロクロ右回転）。胴部ロクロナデ後、ロクロ穴と反対側半面回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）。	4/5残存
細頸瓶	3	口径 (9.5) 胴径 (15.6) 器高 (22.1)	口縁部を欠く。頸部はラッパ状に開き、球形の胴部に接合される。胴部は焼きゆがみ激しく、過半を欠損する。ロクロ穴は薄い粘土板を貼ってふさぐようである。胴部はロクロ穴方向とその反対方向がわずかにつぶれるか？頸部の半分と胴部上半は自然釉厚くかかり、ロクロ目不明。緑褐色に発色。色調灰白褐色。胎土微細。焼成堅緻。	口縁部～頸部ロクロナデ（ロクロ回転方向不明）。胴部ロクロナデ（ロクロ右回転）。回転ヘラケズリの有無は残存部からは判断できず。	1/6程度残存
坏	4	口径 (8.7) 器高 (3.35)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部はやや突る。体部に浅い沈線が3本あり、その直下にゆるい段がある。体部から底部にかけて丸く、ロクロ整形の凹凸目立つ。底部平底風。色調青灰白色。胎土微細。細粒砂若干含む。焼成堅緻。	口縁部～体部上位ロクロナデ（ロクロ右回転）。体部下端～底部回転ヘラ切り離し後、回転ヘラケズリ（ロクロ右回転？）。底部内面強目のロクロ調整（ロクロ右回転）。渦巻状に稜線が目立つ。	3/5程度残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器坏	5	口径 (10.25) 器高 (2.9)	口縁部外傾して立ち，口唇部はやや突る。口縁部中位に沈線1本と稜あり、体部との境にも沈線2本と稜をもつ。体部丸く、平底風の底部にそのまま移行。器肉厚い。色調灰褐色。残存部の大半は黒斑部のため黒っぽい。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ、丁寧。	口縁部1/2残存
平瓶	6	胴径 20.2	口縁部上部を欠く。口縁部はやや大きく外に開く形態か？頸部は胴部上面にやや斜めに接合される。胴部上面はロクロ穴あり、薄い粘土板でふさがれた後、頸部径の1個分ずれた位置に接合部の穿孔をする。胴部上面はやや丸く、ゆるい肩をもって下部へ移行。下部は徐々につぼまり、底部との境でゆるく屈曲する。底部平底風で中央部ゆるく突出。色調青灰色。胎土微細。小石やや多。焼成堅緻。	頸部ロクロナデ（ロクロ右回転）。内面ロクロ目顕著。胴部外面カキ目、下端を除く胴部全体に認められる。胴部上面～肩部ははっきりしていて、下部はややかすれ気味。胴部下端回転ヘラケズリ（逆位でロクロ左回転？）底部の中心および周縁部も回転ヘラケズリか？胴部内面ロクロナデ（逆位でロクロ右回転）。	1/2程度残存
甕	7	口径 12.0 胴径 9.35 器高 14.85	口縁部に最大径もつ。口縁部は短く外傾して立ち、ゆるく外に屈曲する。口唇部は上に面をもち、あまり突らない。口縁部直下に段もち、浅い幅広の沈線一周。頸部はラッパ状に開き、やや上位に2本の沈線もつ。頸部下位は下にやや開き、屈曲して胴部に移行。胴部は肩部に、2本の沈線にはさまれた刺突文帯をもち、それにかかるように上向きの孔を穿つ。胴部の上面はわずかに傾斜し、肩部で屈曲する。肩部以下はやや丸く、底部までゆるやかにつぼまる。底部は平底風。栓状手捏土製品を内部にもつ。形態は上皿天瓶用分銅に似て、底面は凹み、胴部上面に円形の溝をもつ。色調灰色。胎土微細。細粒砂多。焼成堅緻。	口縁部～頸部ロクロナデ（ロクロ右回転）。頸部の絞り目は内面で顕著に残存、外面は痕跡がわずかに残る。胴部上面ロクロナデ（ロクロ右回転）。刺突文は、2～4本の櫛歯状工具の連続刺突によるもので、部分的に沈線に重複している。胴部の孔のまわりは粘土が剝落。穿孔時の剝落か？胴部側面～底面回転ヘラケズリ（逆位にしてロクロ右回転によるか）。	完形



1号住土層註

1．黄灰褐色土（火山灰を多く含む）
2．黄灰褐色土（火山灰を少量含む）
3．灰褐色土（やや砂質）
4．青灰褐色土（粘土質。火山灰を少量含む）
5．青灰褐色土（粘土質。焼土・炭化物を多量に含む）
6．暗黄褐色土（やや砂質。火山灰を多く含む）
7．暗黄褐色土（焼土ブロックを多く含む）
7'．暗黄褐色土（焼土ブロックを少量含む）
8．暗黄褐色土（砂質。小礫を多く含む）
9．黄灰褐色土（火山灰を多く含む）
10．暗黄褐色土（やや粘質。黒褐色土ブロックを少量含む）
11．灰褐色砂
12．礫層

第12図　1号住居跡平面図・断面図

1号墳出土の栓状土製品付き甕（第10図、図版1）

先に述べたように1号墳前庭部右脇のテラス上から須恵器甕形土器が出土した。この甕の中には上皿天瓶用の分銅に似た形の土製品が入っていることが、整理中に判明した。頸部から取り出すことが出来たので、甕本体の図・写真図版とともに掲載しておく。甕は注口を半分挿入して使用するところから半挿（はんぞう、はそう）だという説が『倭名抄』にあるらしい（小林行雄、水野清一編『図解考古学辞典』1959年）が、今まで竹管等が挿入された状態で出土したものはなく、ましてや、栓が出土したことはなおさら考え難かった。たまたま整理中に坂野和信氏にご教示いただき、堺市四ツ池遺跡出土の甕に木製栓とされる木製品が挿入されている事例を知った（『世界陶磁全集第2巻　日本古代　1979年　所収）。四ツ池遺跡の出土品は器高15.4㎝もある大型甕で5世紀後半期の製品のようであるため、直に比較することはできないが、これが、実際に栓として機能したならば、甕は液体を中に納めてから、それを短期間に使用するということに限定されず、保存の効果も考慮されねばならない。とすれば、醸造酒・水・薬品等の容器として理解する方が、水銀朱の製造等の用具という理解に比べて妥当性が高いとすることができるのではなかろうか。

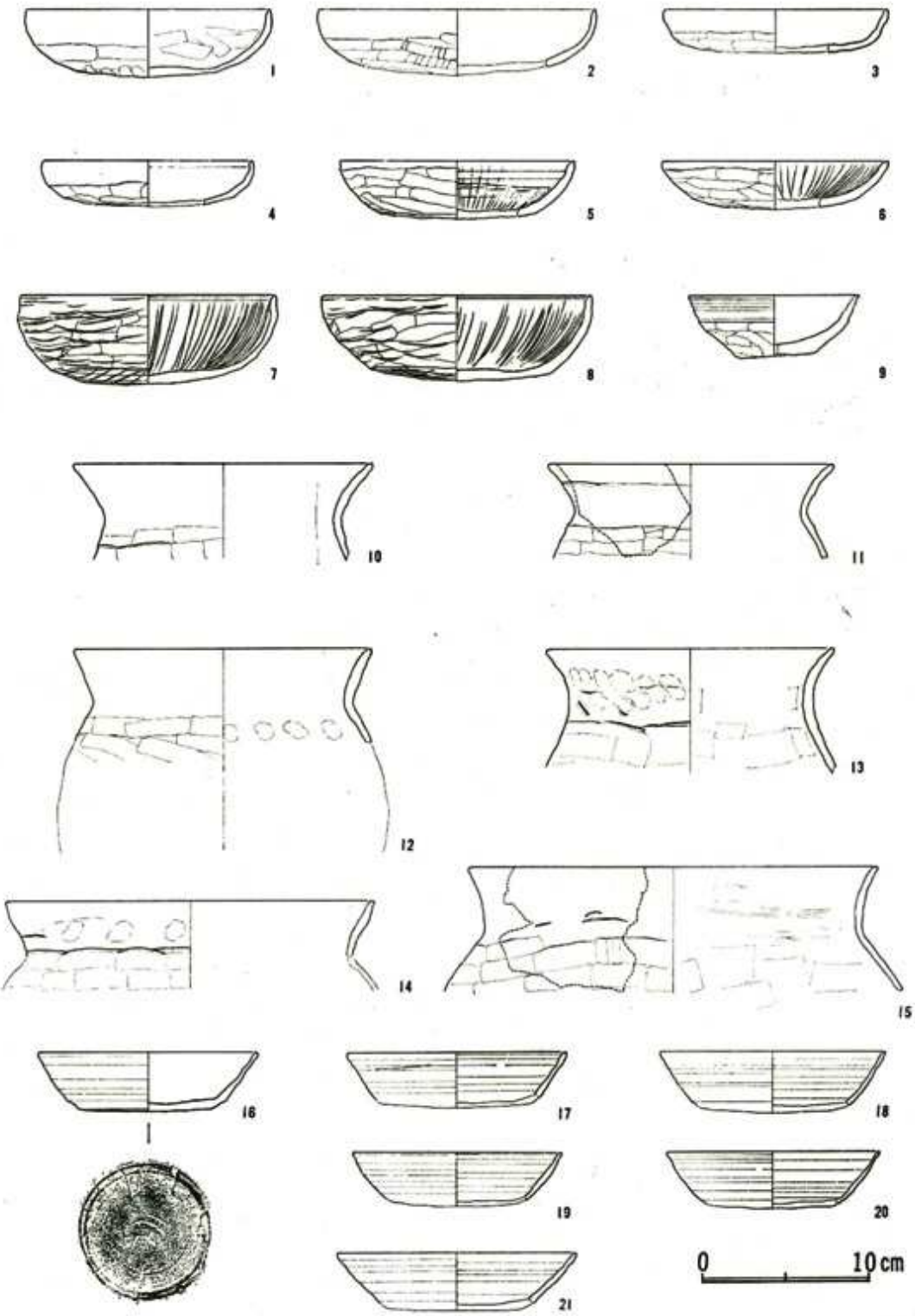
2.　住居跡

1号住居跡（第12図～第13図）

1号住居跡は確認された住居跡群中最も西寄りに確認されたもので、F—17区とG—17区にまたがっている。東壁を1号溝跡に切られ、全体の1/5弱程の部分を破壊されている。平面プランは隅丸長方形である。大きさは、東西約5.8m、南北約4.6mで、本遺跡中では最も大きい。主軸方向は、おおむね路線幅の方向に一致し、N—56.5°—Eである。当初、プランがなかなか確定せず、かなり表面を削り下げたため、確認面から床面まで、14～20㎝程しか残っていない。柱穴は2本で、南側のものは深さ34㎝、径30㎝、北側のものは深さ32㎝、径30㎝である。これ以外にも西壁寄りに柱穴らしい部分が4ヶ所あったが、たちわった結果、いずれも柱穴と判断することはできなかった。2本の柱穴は東壁から2.3～2.5m、西壁から3.1～3.4mの位置に並び、それぞれ、北壁から1.4m、南壁から1.4m離れた位置にある。

カマドは確認されていないが、東壁の中央部にあたる部分に近い床面付近の土が焼けていて、土器もややまとまって出る部分であったので、東壁中央部にあったものが、1号溝形成期に破壊されたと考えられる。

覆土は、灰褐色系統の粘質土が堆積し、上層には火山灰の混入が顕著である。また床面は貼り床されていたようであるが、柱穴のたちわり部分で見た限りでは、20㎝前後の厚さの粘質の淡褐色土が床面を形成し、この上に青灰色粘質上の薄い堆積が認められるのである。床面を形成する粘質土の下はすぐ砂層に移行してしまうので、砂層まで荒掘りされたのち、淡褐色粘質土を貼り、さらに青灰色粘質土で、床面の調整を行なったと考えてもよいであろう。1.5m程西北のG—18区は発掘区の関係で三角形に残った区域であるが、1号住の床面とほぼ同じぐらいのレベルまで下げて、土器を取り上げた。プランは明瞭になりえなかったので図示しなかったが、ここも住居跡があった地点として扱うこともできよう。



第13図　1号住居跡出土遺物

1号住居跡出土土器観察表（第13図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 14.5 器高 4.05	口縁部内湾気味に直立。口唇部は突る。体部は丸く、底部は平底風に仕上げられる。色調橙褐色。胎土細。黒色粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。一部ササラ状。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面やや雑なヘラナデ。底部内面丁寧なヘラナデ。	No. 864、1236 1/6残存
坏	2	口径 (16.5) 器高 (3.9)	1に同じ。色調淡橙褐色。胎土細で、やや砂っぽい。黒色細粒砂やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）、一部ササラ状。内面ヘラナデ丁寧。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面の一部には指頭圧痕あり。	No. 699、775 1/6残存
坏	3	口径 (13.4) 器高 (2.6)	口縁部外傾して立ち、口唇部はわずかに内側につまみ出される。体部との境にゆるい稜あり。色調淡橙褐色。胎土細。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）後ナデ。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 884 口縁部1/6～1/10 残存
坏	4	口径 (12.5) 器高 (2.6)	口縁部内湾気味に直立。口唇部内面に肥厚。体部は丸く、底部平底気味。色調淡褐色。胎土細。黒色粒・透明粒多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。内面指頭圧痕残る。	No. 361、547 口縁部1/5残存
坏	5	口径 (14.0) 器高 (3.4)	口縁部短く直立し、口唇部はわずかに外反気味。体部との境に稜あり。体部は丸く、底部との境にも稜をもつ。体部内面に凹線1本が一周する。底部平底風。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左→右）。口縁部ヨコナデ（右回転）。内面ヘラナデ後正放射状および横位の暗文。	No. 336 口縁部1/6残存
坏	6	口径 (13.4) 器高 (2.8)	体部内湾気味に外傾して立ち、口縁部は短く直立。口唇部は内面面取りされ、わずかに突る。底部は平底気味で、体部との境に稜をもつ。器肉は厚い。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左→右）。体部内面斜位ヘラナデ後、正放射状暗文。一部に交差・重複あり。口縁部ヨコナデ（右回転）。	No. 162 口縁部1/6残存
坏	7	口径 15.3 器高 5.25	口縁部内傾気味に立つ。口唇部内面に浅い沈線一周し、突る。体部との境にゆるい稜あり。体部は丸く、底部との境に稜。底部は平底風丸底。色調橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色微細	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）後横位の暗文。底面は6回以上のラセン状暗文。口縁部ヨコナデ（右回転）後、外面横位暗文。 内面ヘラナデ後斜放射状暗	No.422、1296、1301 ほぼ完

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			砂多く含む。焼成良・硬。	文。一部に交差・重複あり。	
坏	8	口径 16.2 器高 5.1	口縁部直立し、口唇部内面面取り。浅い沈線一周し、突る。体部との境にゆるい稜あり、体部は丸い。底部は平底風で、体部との境に稜をもつ。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）後暗文。体部は横位、底部は乱雑。口縁部ヨコナデ（右回転）後外面横位暗文。内面ヘラナデ後斜放射状暗文、一部交差・重複あり、やや雑。	No. 457 ほぼ完
坏	9	口径 (10.2) 器高 (3.7)	口縁部外傾して立ち、2段の段をもつ。口唇部はつまみ出される。体部は上端で丸く、下半はまっすぐつぼまる。底部は平底風だが、削り出しのためゆがむ。色調灰褐色、内面はうす黒い。胎土細。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左回転）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 892 1/4残存
甕	10	口径 (18.0)	口縁部「く」の字状を呈して外反。口唇部はつまみ出され、やや突る。胴部は若干張り出す。色調暗橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂など多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ（右回転）。頸部外面指頭圧痕残存。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左）、ヘラ痕顕著。頸・胴部内面ヘラナデ、一部ヘラ痕あり。	No. 1254 口縁部1/6残存
甕	11	口径 (17.1)	口縁部「く」の字状に外反。口唇部は丸く、口縁部中位にヘラ整形の弱い段あり。胴部はやや大きく張る。色調橙褐色。胎土やや細。黒色・白色・透明細粒砂多。焼成良。	口縁部～頸部強いヨコナデ（右回転）。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左）。内面ヘラナデ。口縁部外面中位にヘラ痕状の凹線が一周。	No. 829 口縁部1/6残存
甕	12	口径 (17.8)	口縁部やや傾斜して立ち、「く」の字状を呈する。器肉厚く、口唇部突り気味。胴部は小さく張る。色調暗橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色・透明細粒砂多。焼成良。	口縁部～頸部ヨコナデ（右回転）。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左）。内面ヘラナデ、指頭圧痕残存。	No. 252 口縁部1/6残存
甕	13	口径 (17.2)	口縁部外反し、口唇部は丸い。頸部は直立し、ゆるい「コ」の字状口縁となる。胴部の張りは大きくない。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ（左回転？）。頸部外面指頭整形後ナデ。巻き上げ痕・ヘラ痕あり。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左）、ヘラ痕顕著。内面ヘラナデ（左回転？）。	No. 240 口縁部1/4残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	14	口径 (22.1)	口縁部外傾し、中位で外側に肥厚する。口唇部は外側につまみ出され、丸い。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・白色細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ（左回転）、指頭圧痕・巻き上げ痕残存。頸部に胴部横位ヘラケズリによるヘラ痕残存。	No. 1223 口縁部1/6残存
甕	15	口径 (24.6)	口縁部やや外反し、口唇部はわずかにつまみ出され丸い。胴部は大きく張り出す。色調淡橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ（右回転）、内面は刷毛目状擦痕あり。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左？）、一部ササラ状。内面ヘラナデ。	No. 430 口縁部1/6残存
須恵器坏	16	口径 13.2 器高 (3.55)	体部は直線的に外傾し、立ち上がる。口縁部のつまみ出し強く、口唇部やや肥厚気味で丸い。底部平底で、体部下端との間は若干凹む。色調灰色。胎土微細、精選される。焼成堅緻。	左回転の巻き上げ後、ロクロ右回転の水挽き整形。底面中央2.5cm程残し、回転ヘラケズリ、周縁部は面取り（ロクロ右転）。	No. 435、436、1036、1038、1039、1042 3/4残存
須恵器坏	17	口径 (13.2) 器高 (3.3)	16と同じ形態。ただし底部欠。色調灰白色。胎土微細。白色針状物質含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形（ロクロ右回転）。	No. 780 口縁部1/6残存
須恵器坏	18	口径 (13.6) 器高 (3.65)	体部直線的に外傾して立ち、口縁部はつまみ出され、口唇部は突る。色調青灰色。胎土微細。白色針状物質含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形（ロクロ右回転）。	No. 220、394 口縁部1/6残存
須恵器坏	19	口径 (12.6) 器高 (3.2)	体部やや内湾気味に外傾して立ち、口縁部つまみ出し気味。口唇部は丸く、外反する。色調灰白色。胎土微細。白色針状物質少量、透明細粒砂少量含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形（ロクロ右回転）。	No. 309 口縁部1/6残存
須恵器坏	20	口径 (12.8) 器高 (3.4)	体部直線的に外傾して立ち、口縁部はつまみ出され、口唇部肥厚気味。器肉は薄い。色調淡青灰色。胎土微細。白色針状物質少量、白色・透明細粒砂含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形（ロクロ右回転）。	No. 139 G—17 No.943と接合。 口縁部1/6残存
須恵器坏	21	口径 (14.4) 器高 (3.5？)	体部直線的に大きく外傾し、口縁部弱くつまみ出され、口唇部突り気味。色調青灰色。胎土微細。白色針状物質少量含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形（ロクロ右回転）。	No. 164 口縁部1/6残存

1号住居跡はそれほど遺物が多くなく、完形品や半完形品は南壁際から東壁付近にかけて多く所在し、床面からはやや浮いた状態で出土している。実測図を掲載したものは、土師器坏9点、甕6点、須恵器坏6点で、底部調整技法を別図に7点紹介してある。G—18区も多量の土器が出土していて、土師器坏8点、甕3点、須恵器坏1点を図示してある。どちらもおおむね同じ時期の所産と考えられるが、各器種の形態から考えて、奈良時代半ばよりやや古い時期と考えられよう。

2・4・5・6号住居跡（第14図～第16図・第19図～第21図）

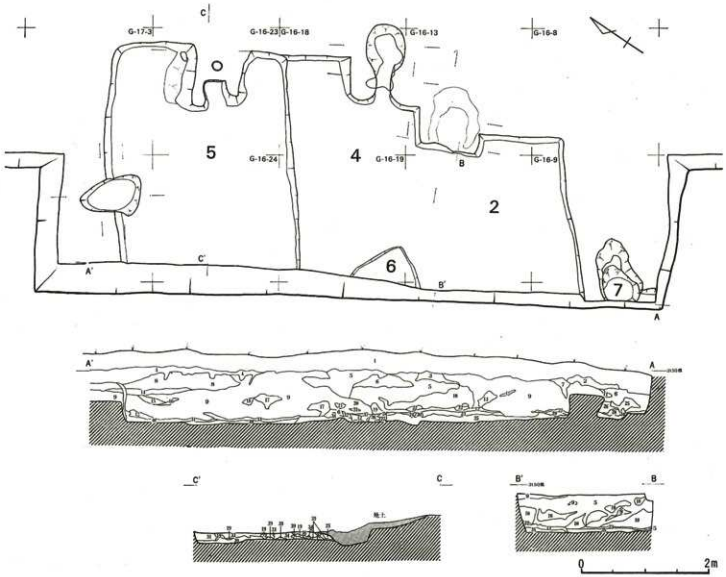
表記の4軒の住居跡は重複しており、カマドだけ確認された7号住居跡も切り合うと思われるので、計5軒あるいはそれ以上の重複関係をもつ。この住居跡群はほぼG—16区の中におさまるように検出された。4軒のうち壁面が3方向確認されたのは5号住居跡のみで、2・4号住居跡は東壁と南壁の一部を確認し、6号住居跡はカマド部分あるいはコーナー部分を確認したにすぎない。

この住居跡群は当初カマド3基が検出され、その後、西側に発掘区を拡張して調査した。掘り下げ始めた順序で住居跡番号をつけていったため、南側から2・4・5号の順となり、2・4号住居跡の床面下より検出した住居跡を6号住居跡とした。これらの住居跡群も1号住居跡と同様にプラン確認が困難で、すべての壁をたちわった上で、壁の位置を確定した。以下、各住居跡について述べてみたい。

5号住居跡は東・北・南壁が確認された。西壁は拡張区の壁面のさらに西側になるようである。平面プランは隅丸長方形である。南北約3mを測り、東西は約4m程になると推定できる。カマドは北壁と東壁に各1基ある（発掘区においては、路線の本庄方向に対して右、すなわち、北東方向を北扱いしていたので、東壁のカマドを北カマド、北壁のカマドを西カマドとして記述しておくことにする）。確認面から床面までの深さは約35cmで、カマドの掘り方はさらに10cm程下まで掘り込まれている。壁は西カマドの付近でややふくらみを持つほかはほぼ直線的である。柱穴はまったく確認されなかった。カマドが壁面にとりつく位置は、西カマドは壁に対してやや左寄り、北カマドはわずかに右寄りである。

4号住居跡は、東・南二つの壁面しか確認できなかったために、大きさの想定さえも困難であるが、西壁が確認されていないので、それが発掘区壁面より西にあるとすれば、東西の長さは3.6～3.8m程度とするのが妥当なところであろう。北壁は確認することができなかったが、覆土の土層観察からは5号住居跡の南壁付近に想定する以外には立ち上がる部分を認め難いので、やや角度は異なるが、5号住南壁付近と考えてみたい。そうすれば、約2.5m程度となる。平面プランは5号住居跡と同様に東西にやや長い隅丸長方形となる。4号住居跡は東壁にカマド1基がとりつく。掘り方は床面から6cm程掘りくぼめられているのみである。カマドの位置は東壁に対して右寄りである。

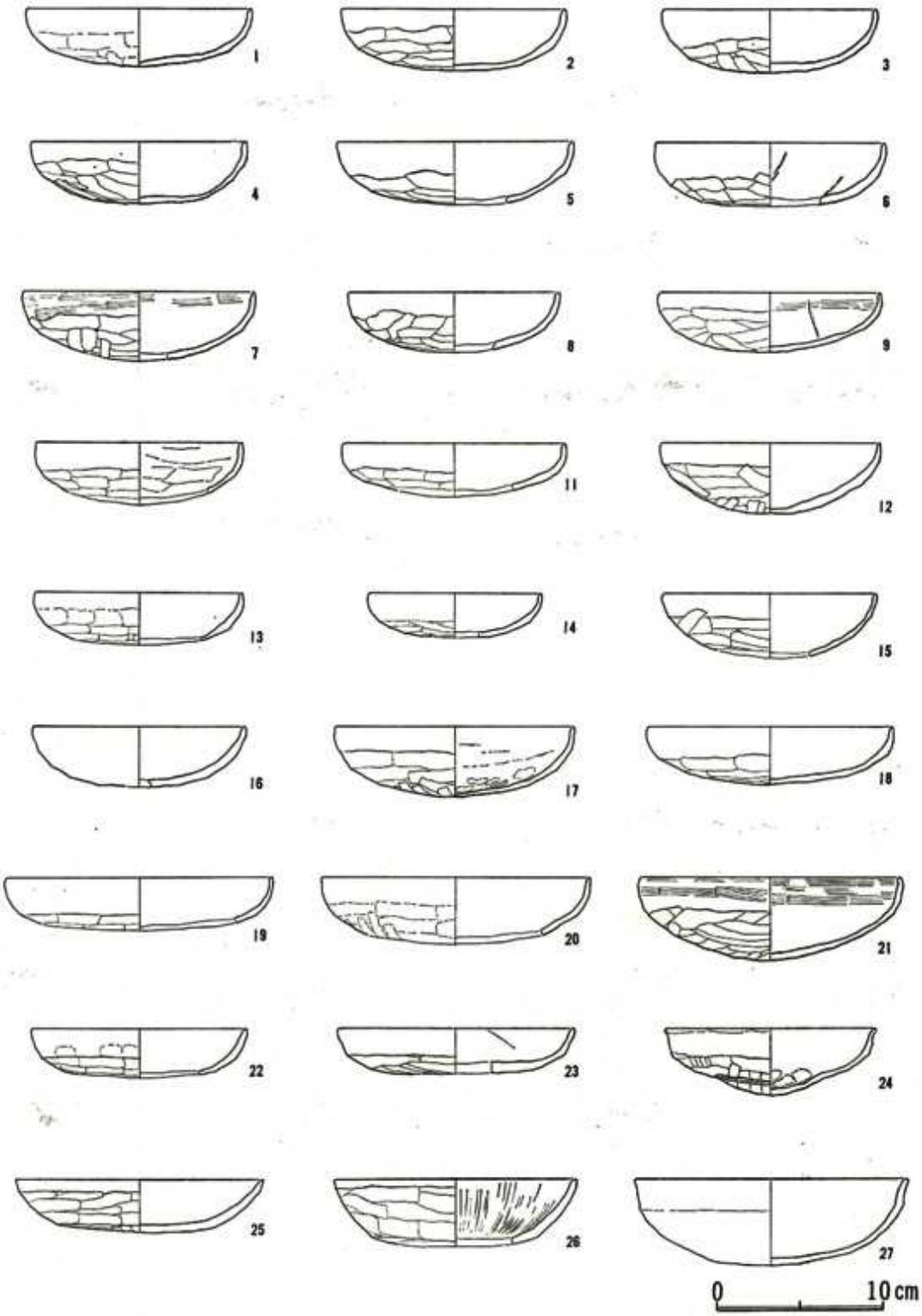
2号住居跡は、カマドが4号住居跡のそれに極めて近い位置に検出されたのであるが、そのために、北半分のプランはほとんどわからなかった。4号住居跡と5号住居跡の床面のレベル差は10cm以上違っていた。4号住居跡は確認面から床面まで約20cm程であったが、5号住居跡は35cm掘り込まれていた。しかるに、2号住居跡と4号住居跡の床面はほとんど同一レベルであったので、2・



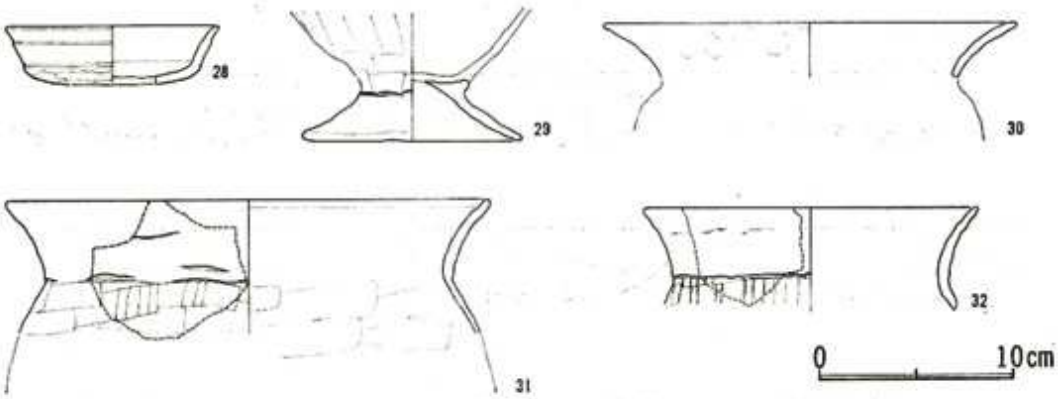
2・4・5・6・7号住土層註

1. 灰褐色土（再堆積、撹乱）
2. 灰茶褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 黒～暗褐色土（焼土・炭化物多量、やや粘質）
6. 茶褐色粘質土（焼土・炭化物少量）
7. 茶～暗褐色土（焼土・炭化物やや含む）
8. 茶褐色土（粘質焼焼土・炭化物少量）
9. 茶褐色土（やや砂質焼土・炭化物少量、火山灰を含む）
10. 褐色砂質土（焼土・炭化物を若干含み、部分的に粘質）
11. 暗～茶褐色土（焼土・炭化物ややあり）
12. 暗褐色土（粘質、焼土・炭化物多量）
13. 茶～暗褐色土（粘質、焼土・炭化物やや多量）
14. 明褐色土（粘質強混入物少量）
15. 茶～暗褐色砂質土（混入物少量）
16. 暗～茶褐色粘質土（焼土・炭化物少量）
17. 褐色粘質土（混入物少量）
18. 暗褐色粘質土
19. 茶褐色砂質土（焼土・炭化物はとんどなし）
20. 褐色砂質土（焼土・炭化物少量）
21. 茶褐色粘質土（焼土・炭化物やや多量）
22. 灰褐色砂質土
23. 灰褐色土（粘質、焼土・炭化物多量）
24. 灰褐色土（部分的に粘質、焼土・炭化物多量の暗褐色土をブロック状に含む）
25. 暗～茶褐色土（焼土・炭化物少量）
26. 暗～茶褐色土（焼土・炭化物やや多量）
27. 暗褐色土（焼土・炭化物多量）
28. 暗赤褐色粘質土（焼土多量）
29. 灰褐色粘質土
30. 灰色粘質土（焼土・炭化物多量）
31. 暗茶褐色土（半砂・半粘質、焼土・炭化物多量に含む）
32. 灰褐色粘質土（焼土・炭化物若干）
33. 暗褐色土（やや粘質、焼土・炭化物含む）
34. 暗褐色砂質土（焼土・炭化物少量）
35. 暗茶褐色砂質土（半砂半粘・砂質が強）
36. 茶褐色土（やや粘質、焼土・炭化物多量）
37. 灰褐色土（半砂半粘でやや粘性強化物ややず多く含む）
38. 暗～茶褐色砂質土
39. 茶褐色砂質土
40. 茶～暗褐色土

第14図　2・4・5・6・7号住居跡平面図および断面図



第15図　2号住居跡出土遺物(1)



第16図　2号住居跡出土遺物(2)

2号住居跡出土土器観察表（第15図～第16図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 13.5 器高 3.5	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は突る。体部・底部は丸く、スムーズにつながる。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。黒色・透明細粒砂多。焼成やや良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。稜不明瞭。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ、中央部指頭圧痕の残存か？凹部明瞭。	No. 52 1/2弱残存
坏	2	口径 13.5 器高 3.7	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は突り気味。体・底部丸く、口縁部からスムーズにつながる。色調橙褐色。胎土細。黒色粒多量、透明・白色粒少量含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 549、1061 ほぼ完形
坏	3	口径 12.8 器高 3.8	2と同様の形態。色調淡褐色。胎土細。黒色・白色粒多量。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）、体部上端ナデ消される。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 263、846、850、860、1427 1/2弱残存
坏	4	口径 12.9 器高 3.7	口縁部やや内湾気味に直立、体部は丸く、平底気味の底部までスムーズに移行。器肉は口縁部でやや厚く、体・底部の境は薄い。色調橙褐色。胎土やや細。黒色・透明・白色細粒砂やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）、一部ササラ状。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 928、930、1066 ほぼ完形
坏	5	口径 14.2 器高 (3.8)	1と同様の形態。色調橙褐色。胎土やや細、若干ザラつく。砂粒多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 496、1343 口縁部1/2弱残存
坏	6	口径 (13.8)	3とほぼ同様の形態。やや厚	体・底部外面ヘラケズリ（右	No. 1071

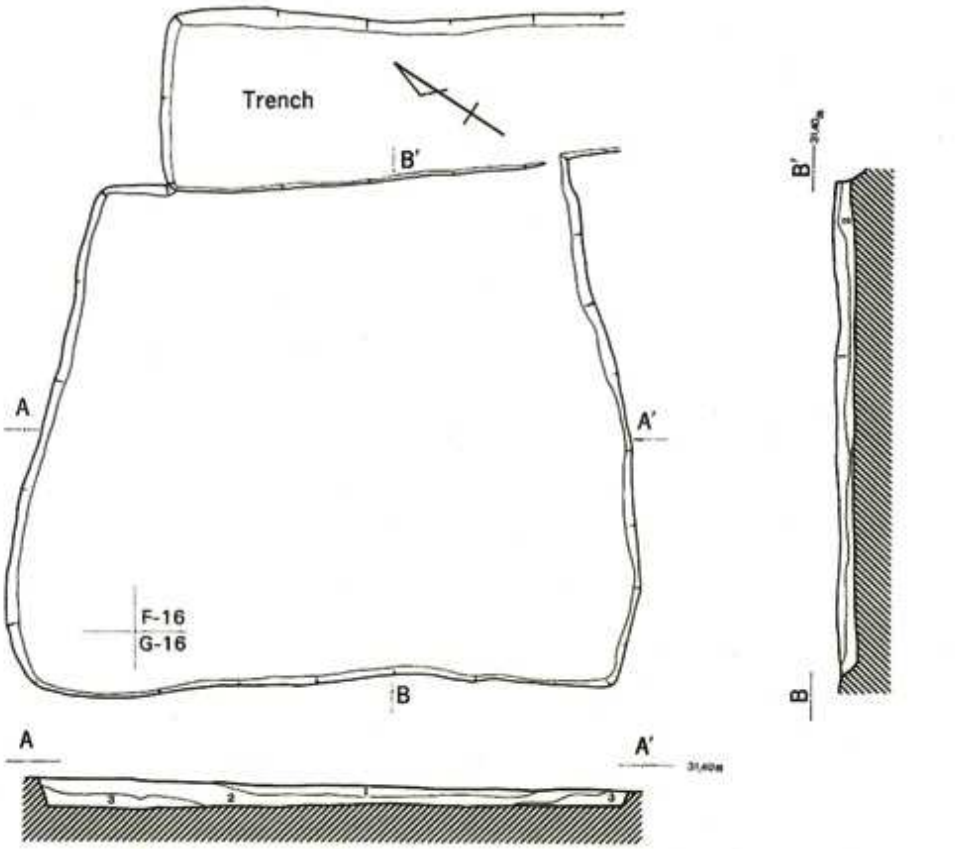
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 (3.8)	手。色調淡褐色。胎土やや細。黒色・透明砂粒多く含む。焼成良。	→左)。体部上端ナデ消し。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。一部ヘラ痕あり。	口縁部1/4残存
坏	7	口径 (14.0) 器高 (4.1)	1とほぼ同様の形態。色調淡橙褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)、刷毛目状擦痕顕著。底部内面ヘラナデ。	No. 1256 口縁部1/3残存
坏	8	口径 (12.8) 器高 (3.6)	1とほぼ同様の形態。やや小振りで、口縁部中位が肥厚気味。色調淡褐色。胎土細。黒色・白色細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 980 口縁部1/4残存
坏	9	口径 13.3 器高 3.6	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突り気味。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。やや扁平な感じ。色調橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色粒やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)、内面に刷毛目状擦痕あり。底部内面ヘラナデ、ヘラ痕残存。指頭圧痕状の凹部内面に点在。	No. 561、566、785、970 3/4残存
坏	10	口径 (12.4) 器高 (3.7)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突り気味。体・底部は丸く、口縁部からスムーズに移行。やや小振り。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂やや多。焼成やや良。	体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 565 口縁部1/6残存
坏	11	口径 (13.2) 器高 (3.2)	口縁部直立し、口唇部は突る。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。やや扁平。色調淡褐色。胎土細、ザラザラ。黒色・透明粒やや多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 548 口縁部1/4残存
坏	12	口径 (13.2) 器高 (4.2)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突り気味。体・底部は丸く、口縁部からスムーズに移行。器肉厚く、深い器形。色調淡褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 189 1/6残存
坏	13	口径 (12.4) 器高 (3.1)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突り気味。体部丸く、底部平底風。口縁部からスムーズに移行。厚手で扁平。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂	体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。体部上端はヘラケズリ後ナデ。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 177、543 口縁部1/3残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			多。焼成良。		
坏	14	口径 (10.4) 器高 (2.65)	口縁部内湾気味に直立。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。小振りの器形。色調淡褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。体部上端ナデ消される。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1302 口縁部1/6残存
坏	15	口径 (12.8) 器高 (3.9)	丸い椀状の器形。口縁部内湾気味に立ち、口唇部は丸い。体・底部は丸く、口縁部からスムーズに移行。色調淡橙褐色。胎土やや細、ザラつく。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1214 口縁部1/6残存
坏	16	口径 (12.7) 器高 (3.6)	15の形態に類似する。器肉は厚く、口唇部やや突り気味。色調橙褐色。胎土やや細。白色・透明粒多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリか？摩滅して不明。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1418 口縁部1/6残存
坏	17	口径 (14.4) 器高 (4.2)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部はやや丸い。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。白色粒多、透明・黒色粒少量。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。内面は粘土貼付痕や指頭圧痕状凹部が目立つ。	No.1025、1026、1/2残存
坏	18	口径 14.8 器高 3.5	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突り気味。体・底部は丸く、口縁部からスムーズに移行。大振りの器形で扁平な感じ。色調淡褐色。胎土細。黒色・白色細粒砂やや多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。内面中央部は指頭圧痕のため凹む。	No. 355、361、636、646、762、1187 ほぼ完形
坏	19	口径 (16.0) 器高 (3.1)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突る。体部は丸く、底部平底風。口縁部からスムーズに移行。大振りで扁平な器形。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左→右）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1334 口縁部1/6残存
坏	20	口径 (16.2) 器高 (4.0?)	口縁部やや内湾気味に直立し、口唇部は内側に肥厚気味。体部丸く、口縁部からスムーズに移行。大振りの器形。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1334 口縁部1/7残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	21	口径 15.8 器高 4.95	口縁部内湾気味にわずかに外傾して立ち、口唇部は内側につまみ出され、肥厚する。体・底部は丸く、口縁部からスムーズに移行する。深い器形で、突出気味の丸底。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色粒少量、白色粒多量。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部強いヨコナデ（右回転）。刷毛目状擦痕顕著。底部内面ヘラナデ。内面は指頭圧痕状凹部あり。底部外面には火ダスキ状の痕跡（黒地に橙褐色）もある。	No. 1090 2/3残存
坏	22	口径 (13.0) 器高 (2.9)	口縁部内湾気味で外傾して立つ。口唇部は突り気味。体部丸く、底部平底風。口縁部からスムーズに移行。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂などやや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 1070 口縁部1/7残存
坏	23	口径 (14.2) 器高 (2.7)	口縁部外傾して立ち、わずかに内湾気味。体部との境にゆるい稜あり。体部丸く、そのまま平底の底部に移行。底部は厚手。色調淡褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）、口縁部ヨコナデ（右回転）、一部ヘラ痕あり。底部内面ヘラナデ。	No. 849 1/10程度残存
坏	24	口径 (12.6) 器高 (4.0)	口縁部外傾して立ち、口唇部は外反し、つまみ出され、丸い。口縁部と体部の境は屈曲し、体部は丸い。底部は突出し、体部から屈曲する。色調淡褐色。胎土やや細。細粒砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）、一部ササラ状。口縁部ヨコナデ（右回転）。口唇部は断続的につまみ出している。底部内面ヘラナデ。突出部分の内面は指頭圧痕顕著。	No. 898、899 口縁部1/5残存
坏	25	口径 (14.8) 器高 (3.2)	口縁部短く、外傾して立ち、口唇部は突る。体部は丸く、底部は平底。口縁部と体部の境は稜ゆるく、底部との境はゆるく屈曲する。やや厚手。色調橙褐色。胎土やや細小石目立ち、透明・黒色・白色粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No.1029、1092、1346 1/3程度残存
坏	26	口径 (14.4) 器高 (4.0)	口縁部短く、外傾気味。口唇部は内面面取り風の整形で、突る。体部は丸く、底部との境でゆるく屈曲する。底部平底風。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多量。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左→右が卓越するが、錯綜する）。口縁部ヨコナデ（左回転）。体・底部内面斜位ヘラナデ後、正放射状暗文。	No. 127 口縁部1/4残存
坏	27	口径 (16.4) 器高 (5.2)	口縁部外湾気味に直立。口唇部は突り気味。体部との境にゆる	体・底部外面ヘラケズリ？摩滅して不明。口縁部ヨコナデ	No. 1377 2/3程度残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			い稜をもち、体・底部は丸く、深い。大振りの器形。色調淡褐色。胎土やや細、ザラザラ。透明・白色・黒色粒多量に含む。焼成良。	(右回転)。底部内面ヘラナデ?	
坏	28	口径 (11.0) 器高 (3.0)	口縁部外傾して立ち、口唇部は突り気味。口縁部中位に弱い段があり、体部との境には沈線一周し、内外面ともに稜をもつ。体部丸く、底部は浅い平底で、そのまま移行。色調淡褐色。胎土やや細、ザラザラ。細粒砂多量に含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。削られぬ部分あり。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 1318 口縁部1/6残存
甕	29	脚径 11.4	台付甕脚部。接合部は「く」の字形を呈して屈曲し、うすいリング状の粘土帯残して剝離。脚裾部は「ハ」の字状に大きく開き、端部は丸い。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色・透明・白色細粒砂やや多く含む。焼成良。	脚裾部ヨコナデ(左回転)。接合部ヘラケズリ(右→左)。	No. 1342 脚部のみ全周
甕	30	口径 (21.4)	口縁部大きく外反し、口唇部は突る。「く」の字状の口縁であろう。色調橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂多量に含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。口縁部中位外面には指頭圧痕残存。	No. 931 口縁部1/6残存
甕	31	口径 (25.1)	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部は内湾し、内面にゆるい沈線一周。「く」の字形に屈曲して、胴部に移行。胴部はやや張り出す。色調橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色細粒砂多量に含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。口縁部にヘラ痕点在。胴部上半横位ヘラケズリ(右→左)、一部ササラ状。胴部内面ヘラナデ(右→左)。	No. 17 口縁部1/6残存
甕	32	口径 (17.2)	口縁部ゆるく外反し、中位でゆるく屈曲。口唇部は突り気味。胴部はやや張る。色調淡橙褐色。胎土細、ザラつく。細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。頸部外面指頭整形後ナデか、粘土貼付痕と凹凸目立つ。胴部上半横位ヘラケズリ(右→左)、一部ササラ状。	No. 972 口縁部1/6残存

4号住居跡ともに重複部分の壁面を確認しえなかったのである。幸いにもカマドのソデの部分で、2つの住居跡の新旧関係がわかった。4号住居跡のカマドの右ソデ部分は、2号住居跡の東壁に切られていたのである(第21図参照)。したがって、2号住居跡の東壁はさらに北に伸びる。ここで



3号住土層註

1．青灰褐色土（火山灰を少量含み、粘性強）
2．灰褐色土（火山灰を少量含む）
3．明褐色土（やや粘質）

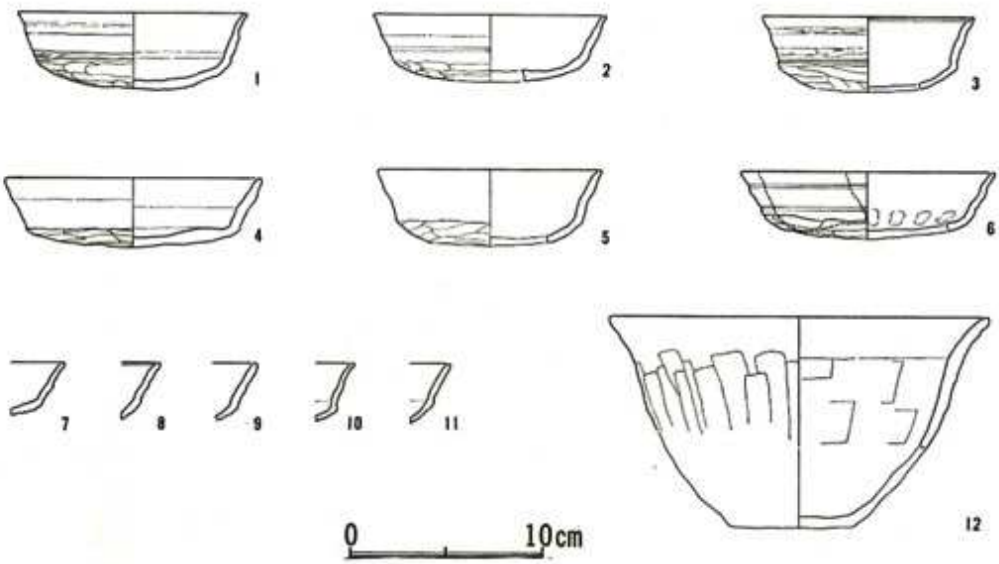
第17図　3号住居跡平面図・断面図

も土層観察に頼らざるをえないが、拡張区西壁に見える立ち上がりによる限り、4号住居跡カマドの掘り方の40cm程西に2号住居跡のコーナーを予想することができる。2号住居跡の推定された平面プラン・規模は、南北3.3～3.5m、東西3.5m前後の隅丸方形ということになる。南壁の西半分は若干掘り過ぎている可能性もあると思われる。

6号住居跡は拡張区西壁を精査した際に発見された。2・4号住居跡の貼り床に埋められていたもので、2・4号住居跡の床面より10cm程低いレベルで床面を検出した。当初カマドの可能性もあると考えて、南壁の土層観察を試みたが、カマドと考えるだけの確証はえられなかった。これをコーナーと考えれば、東壁と南壁が約1mずつ検出されたことになる。

カマドは2・4・5号住居跡で計4基確認されたわけだが、以下にその構造についてやや詳しく記述しておきたい。

4基中3基は東壁にあり、2号住居跡（以下2号住とする）のカマドと4号住居跡（以下4号住とする）のカマドは主軸方向がほぼ一致する（N—51°—E）。それに対して5号住居跡（以下5号



第18図　3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土土器観察表（第18図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 11.8 器高 3.95	口縁部外傾して立ち、中位に段、体部との境に1～2本の沈線と稜をもつ。口唇部は外反して、つまみ出し気味。体部は丸く、平底風底部に移行。体部内面上端にも稜あり。色調暗橙褐色。胎土やや細。細粒砂やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ（左回転）。内面は工具の擦痕が顕著で、底部も口縁部もナデの終点が明瞭。	No. 207、210 3/5程度残存
坏	2	口径 (12.0) 器高 (3.5)	口縁部外傾して立ち、中位にゆるい段、体部との境に沈線1本と稜をもつ。口唇部わずかにつまみ出し、体部丸く、平底風底部へ移行。色調橙褐色。胎土やや細。黒色・透明細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。底部上端は削られない。口縁部ヨコナデ（右回転？）。底部内面ヘラナデか？剝落して不明。	No. 195、196 口縁部1/3残存
坏	3	口径 (10.9) 器高 (3.9)	口縁部外傾して立ち、中位の段不明瞭。体部との境の沈線細く、稜も内外面ともゆるい。口唇部は突り、内面に沈線一周。体部丸く、平底風底部へ移行。色調淡褐色。胎土やや細。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（右回転）、ただし、口唇部直下と中位段直下の外面は、幅4mm程のヘラミガキ痕あり。底部内面ヘラナデ。	No. 155 口縁部1/4残存
坏	4	口径 (13.2) 器高 (3.6)	口縁部外傾して立ち、中位の段弱い。口唇部は突り気味。体部	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左	No. 97 1/4程度残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			との境に稜あり、屈曲して平底風の底部へ移行。器肉厚く、扁平な器形。色調暗橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	回転)。底部内面ヘラナデ。底部外面は雑なケズリのため、削り残しの粘土塊残る。	
坏	5	口径 (11.6) 器高 (3.9)	口縁部外傾して立つ。中位で屈曲してさらに外傾し、口唇部はわずかに外につまみ出される。体部との境にゆるい稜あり。体部丸く、平底風底部にそのまま移行。色調淡橙褐色。胎土やや細、砂っぽい。黒色細粒砂など多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 71 口縁部1/6残存
坏	6	口径 (13.1) 器高 (3.4?)	口縁部外傾して立つ。中位にゆるい段あり、やや上位に沈線あり。体部との境に沈線と稜をもつ。体部丸く、平底風底部にそのまま移行。色調暗橙褐色。胎土やや細。黒色・透明・白色粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。底部内面指頭圧痕顕著。	No. 87 口縁部1/12残存
坏	7		口縁部外傾して立つ。中位に段あり。口唇部はつまみ出し気味で丸い。体部との境に稜あり。体部は丸い。色調淡褐色。胎土細。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 167、199 小破片
坏	8		口縁部外傾して立ち、中位にゆるい段あり。口唇部はわずかにつまみ出され、内面に浅い沈線あり。体部との境に稜あり。体部は丸い。色調淡褐色(内面と口縁部外面丹塗)。胎土細。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 235 小破片
坏	9		口縁部外傾して立ち、口唇部は突り気味。中位の段弱く、体部と境の稜ゆるく、体部丸い。色調淡橙褐色。胎土細。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 214 小破片
坏	10		口縁部外傾して立ち、中位に段あり。口唇部は外につまみ出される。体部との境に稜あり。体部は丸い。色調暗橙褐色。胎土細。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	No. 170 小破片

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	11		口縁部外傾して立ち、口唇部は丸い。体部との境にゆるい稜あり。体部は丸い。色調橙褐色。胎土細。砂粒多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	№254 小破片
鉢	12	口径 19.6	口縁部外反し、口唇部は丸い。胴部との境はあまりくびれず、砲弾形の胴部を呈する模様。色調暗褐色。胎土粗、ザラつく。砂粒多。焼成やや良。	口縁部ヨコナデ（左回転）。胴部縦位・斜位ヘラケズリ（上→下？）。胴部内面ヘラナデ。器面の剝落ひどく整形痕の観察は困難。	№46、47 口縁部3/7残存

住とする）の北カマドの主軸はやや西に振れている（N—55.3°—E）。これは、5号住廃絶から4号住新築までの期間が、4号住廃絶から2号住新築までの期間よりも長いことを示すと考えたい。尚、先に述べておくべきだったが、5号住は出土した土器から考える限り、白鳳期末から奈良時代初期の時期を考えられ、2・4号住は奈良時代前半期の年代を与えることができる。

本題のカマド構造に入っていきたい。2号住のカマドはソデの末端があまりはっきりしなかったが、壁の内側約50cm程の長さで確認されている。両ソデとも幅30cm前後で、灰褐色粘質土を基質にした土で構築されている。煙道はそれほど長くなく、壁から60cm程の部分まで伸びている。焼土層と炭化物の集中する暗褐色土層は明瞭で、カマドがよく使用されていたことを示す。外形の幅は約1.1m程である。掘り方は縦68cm、横54cmで、床面から10cm程掘り込まれている。カマドの使用までに、掘り方は粘質の灰褐色土と灰色粘土で5cm程埋め込まれ、その上にたき木を置いて燃焼させたようである。

4号住のカマドは、やはりソデの末端がはっきりせず、右ソデは長さ約80cm、左ソデは約75cm程残存していたようである。ソデの幅は右があまりはっきりしないが、左は52cm程もあり、かなり横に広がっている。全体幅は約1.35m程と考えられよう。ソデは淡褐色粘質土で構築されているが、よく焼けた土がかなり入っている。煙道はやはり長くなく、壁面から外に60cm程出ているだけである。掘り方は小さく浅い。縦30cm、横50cm、深さ6cm程しか掘り込まれていない。土層断面を観察すると、炭化物層が顕著で、焼土層はむしろ中央部より周辺部やソデ部分に多い。あるいは、一度つぶれたカマドの土を再利用して作ったのではないかと考えたくなる堆積状況を示している。掘り方は褐色の砂質土で埋めているようであるが、炭化物層のレベルが高く、床面付近にはあまり焼土・炭化物が顕著でない。やはり、短期間の居住にしかよらないためであろうか。

5号住西カマドは、拡張区を設定してから検出したものである。カマドをたちわる前の検出状況も焼土がはっきりせず、やや黒っぽい焼土・炭化物のうすい広がりで判断せざるをえなかった。ソデははっきりしないが、壁面から約40～50cm内側まで伸びていて、ソデの外側の幅は70cm程になるようである。煙道は壁から外に70cm程出ていて、2・4号住のものに比べやや長い。ソデは淡灰褐色土で構築されているようである。掘り方は煙道部分から連続しているので、カマド全体の大きさに等しい。縦1.2m、横70cmの最大幅をもち、深さ13cm程掘り込まれる。ただし、壁面をあまりこわさずにカマドを構築しているので、壁の部分が段をもってしまう。

一方北カマドは、右ソデが壁面から90cm、左ソデが壁面から105cmほど出ている大きなカマドである。ソデ両側端部の幅も1.3mある。煙道もあまり外に出ず、壁面から36cm程である。掘り方は縦70cm、横66cmの楕円形で、床面からの掘り込みは10cm程である。土層の堆積は炭化物がかなり分厚く、焼土も燃焼部全面に広がり、西カマドに比べて大変よく使われていることがわかる。またこのカマドのソデは上層が淡褐色粘土、下層がやや砂質の褐色土で構築され、その周辺の土も床面より10cm程レベルが高い。カマドの構築に際してカマドの周辺の何らかの施設を作り出したのであろうか。

カマドの構築法から若干の共通項を示しておきたい。箇条書きに並べていくと、①煙道が長くない、②ソデ側端部の幅がやや広く、カマドの形態がやや平たくつぶれた感じになる、③煙道部分と焚口部分の掘り方が分離する、などである。これらは同時期のすべての地域に当てはまるものでないことは明らかである。なぜならば、福島・宮城・岩手などで調査される奈良・平安時代の集落跡は煙道が長く、関東でいう鬼高Ⅱ～Ⅲ期あたりの発達した煙道をもつ住居の形態とほぼ同じ形態になる住居が主流で、本遺跡のようなカマドをもつ住居はむしろ南関東に多いタイプと考えられないこともないと思う。今後、カマドの変遷を考える際に注意しておきたい。

最後に、遺物の出土位置などについて若干触れておきたい。

まず、5号住であるが、遺物のほとんどは北カマドの周辺に集中的に出土した。図示したのは、土師器坏3、皿1、甕7の計11個体である。4号住は、ほとんどの部分が、2号住の改築の際に2号住の掘り込みの中になってしまったので、特に遺物を限定できず、2号住の遺物の中に全部含ませてしまった。2号住は土器の出土量が最も多く、ポイント数で見たとしても1300点を越えている。しかし、やはり、カマドの周辺、南壁際、拡張区西壁付近で集中的に出土している。2・4・5号住ともに、何度か灰色粘土質土が覆土に流れこみ黒褐色を呈する粘質土と混じり合っている。黒褐色土には多量の土器が包含されているので、これが住居跡の覆土の基調になっていると考えたいがこれが何度が洪水があるたびに灰色粘土で攪乱されてしまったのではなかろうか。2号住の土器で図示したものは、土師器坏28点、甕4点である。また、4号住の土器としては、5号住出土の甕と接合した資料があるが、出土位置を追跡してみると、5号住カマド煙道口部分の近傍から4・5号住に半分ずつに割れて流れ込んでいった可能性があるということを付け加えておく。6号住には土器が伴わず、2・4号住とどれほどの時間差をもつのか不明である。

3号住居跡（第17図～第18図）

3号住居跡はF—16区にあり、8号住居跡を除く住居跡群中最も東側にあり、不整台形の形態を呈する。東西3.9m、南北は長辺約4.9m、短辺約3.6mの規模である。東壁は試掘トレンチ部分にあたったので、破損してしまったが、ほぼトレンチの西壁部分が壁の位置になるであろう。掘り込みは確認面からの深さ最高23cm、最低10cm程度でかなり浅い。柱穴状の黒い部分は8ヶ所あったが、たちわってみると、すべてが柱穴でなくなってしまった。無柱穴住居である。カマドも確認されなかったが、試掘の段階で破壊してしまったかもしれない。南壁のすぐ際には1号溝跡が迫っているが、こわされてはいないようである。覆土の上層は青灰色土を斑点状に含む灰褐色土、下層はやや砂質の灰褐色土がかなり平らに堆積している。薄く貼床されているようだが、不明瞭である。

出土遺物は900点ほどで、実測可能な土器は大変少なかった。図示したものは、土師器坏6点、同破片5点、鉢1点にすぎない。

7号住居跡（第22図）

7号住居跡は拡張区の南端に検出された住居跡で、カマドと東壁の一部のみが確認されている。

カマドの方向はN—42.5°—Eで5号住北カマドよりさらに西へ偏した方向になる。東壁はカマドの右側にしか確認されず、壁の方向もかなり西に傾くことが予想される。

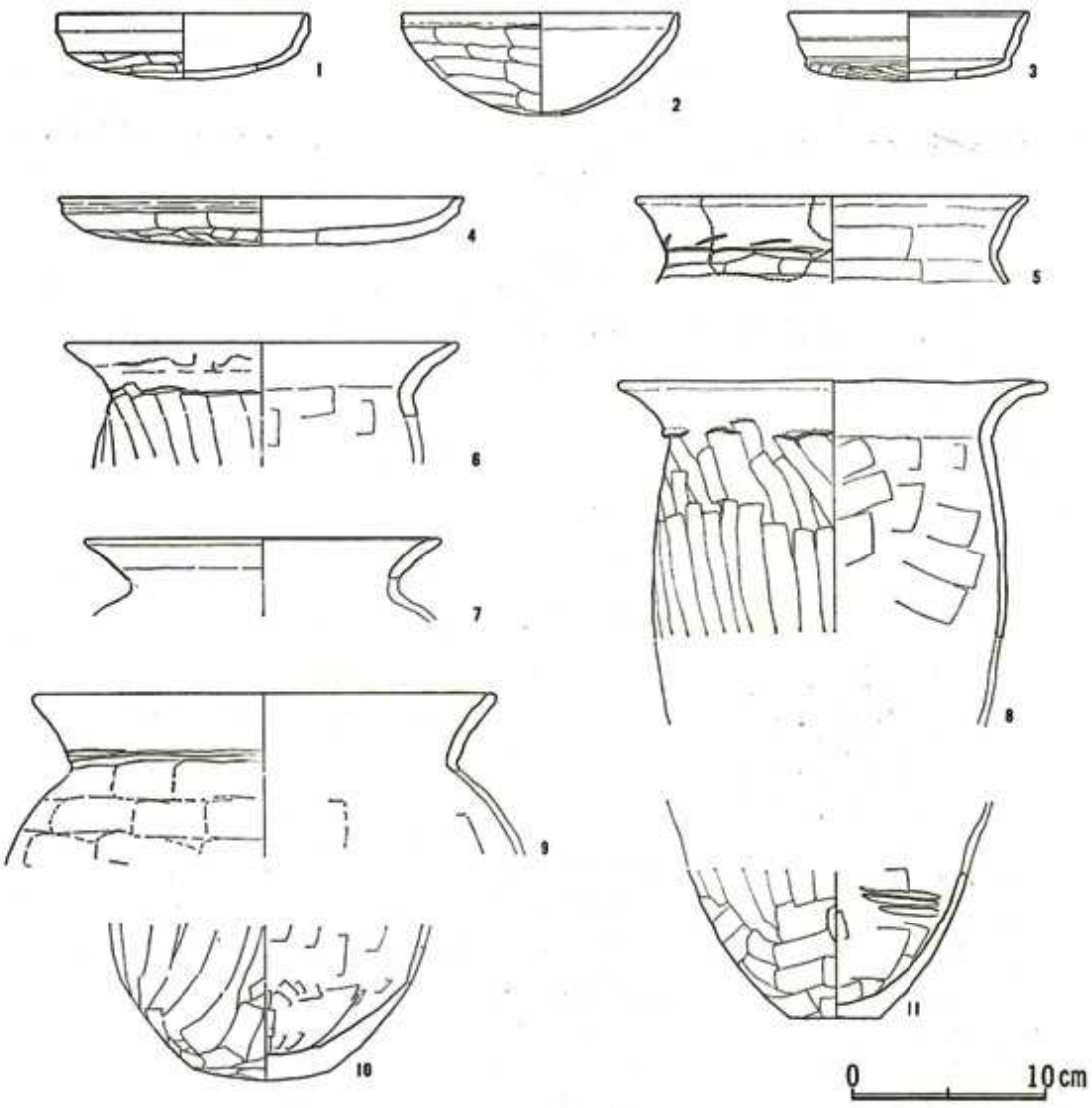
カマドのソデははっきりしなかったが、右ソデは幅30cmを越えているようである。左ソデは拡張区の土層断面が壁面に対して斜めであるため、幅員を確認することはできなかった。掘り方も一部拡張区の壁の中に入ってしまうが、全形の予想がつくほどである。縦70cm、横60cmで、煙道部分に突出部もつ不整楕円形である。ただし壁の位置から内側の部分は25cm程度しかなく、煙道を含めて壁外への掘り込みが長いことがわかる。

煙道は壁の外87cm程伸びて、本遺跡では8号住居跡のカマドとともに長く伸びるタイプである。煙道部と掘り方の間にはテラスがあり、ストレートにつながらない。これは他の住居跡でも同様の現象が見られるのだが、掘り方の掘削と煙道の掘削が一連の作業として連続していないために起ってくるのではないだろうか。7号住居跡は出土土器の様相が2・4号住居跡と近いので、2・4号住居跡の改築時に非常に近い時点で7号住居跡も建てられたと考えられるであろう。

そうすると、カマドの様相は、5号住西カマドのような、掘り方と煙道の連続するものから、5号住北カマドのような、掘り方と煙道のきれかかっているものや7号住カマドのように煙道と掘り方が接してはいるが、テラスや段をもつものを媒介して、2・4号住居跡のような煙道の伸びない、煙道と掘り方が接点を持たず、断続的に掘り込まれて形成されるカマドへ向かう、という志向性を見い出すことができる。かなり脱線してしまったが、本題にもどって7号住居跡の記述にもどろう。7号住居跡は確認面から床面まで約20cmの掘り込みをしている。床面から掘り方の底面までは

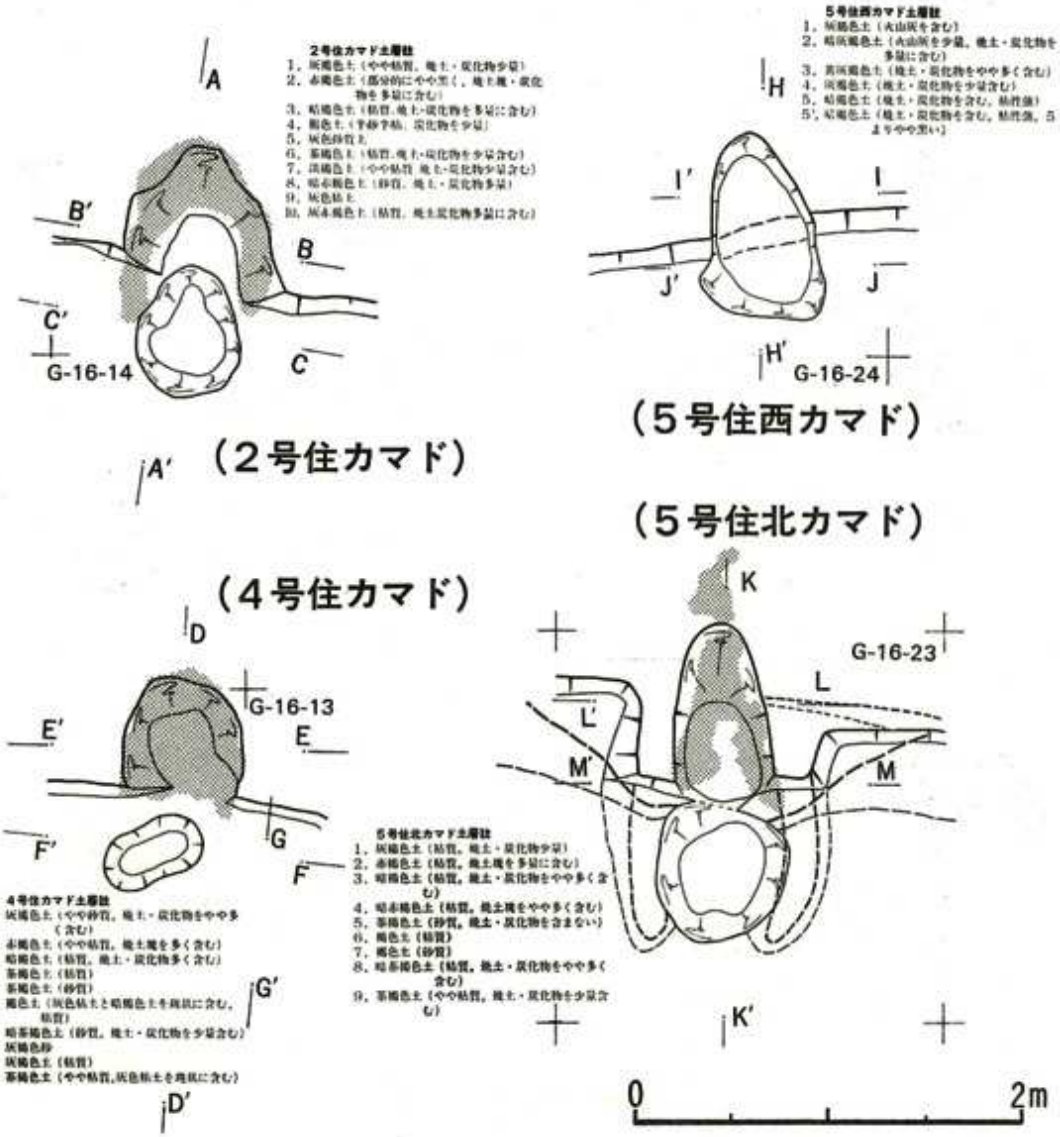
5号住居跡出土土器観察表（第19図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 (13.0) 器高 (3.4)	口縁部外傾して立ち、内湾気味。中位に稜あり。口唇部突り気味。体部との境の稜ゆるく、体部は丸い。そのまま底部に移行。色調淡橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。黒色・透明粒などやや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 516 口縁部1/6残存
坏	2	口径 (14.2) 器高 (5.3)	口縁部短く直立し、口唇部はやや外傾して突る。体部との境に稜あり。体部丸く、深い。そのまま丸底の底部へ移行、中央部は薄手。色調淡橙褐色。胎土やや細、砂っぽい。小石・細粒砂含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ、摩滅して方向不明、稜不明瞭。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	No. 678 口縁部1/3残存



第19図　5号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	3	口径　(12.4) 器高　(3.5)	口縁部外傾して立ち、中位にゆるい稜をもつ。口唇部は突り気味で内面に浅い沈線あり。体部との境に沈線と稜をもつ。体部丸く、底部平底風、そのまま移行。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（左→右）。口縁部ヨコナデ（右回転）。底部内面ヘラナデ。	№372, 550 1/10程度残存
皿	4	口径　(21.0) 器高　(2.6)	口縁部短く直立し、口唇部は大きく外反し、内側に傾斜した面もつ。体部との境に稜あり。体部丸く、底部平底で、そのまま移行。器肉厚く、扁平な器形。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。	№501 G—17№1195と接合 1/5程度残存

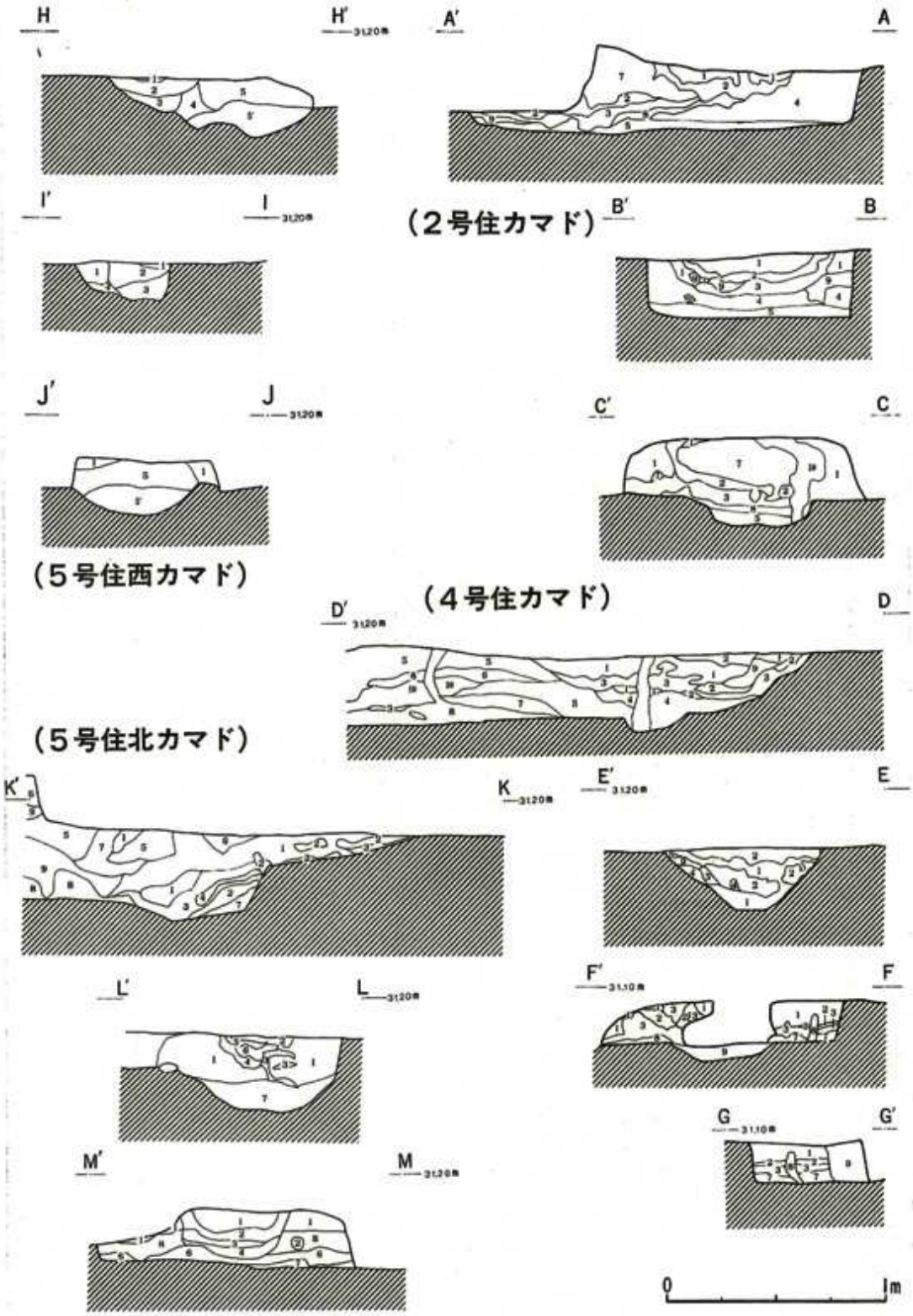


第20図　2・4・5号住居跡カマド平面図

やはり10cm程度の掘り込みが行なわれるだけである。カマドの土層断面を見る限りでは、炭化物を含む層はやや厚いが、焼土層の広がりはあまり大きくなく、2・4号住居跡のカマドに比べると、やや使用頻度が低かったか、期間がごく短かったと考えざるをえない。ここからも、5号住→7号住→2・4号住という比較的短期間の建替えを予想せざるをえない。既に数人の研究者に注意されているように、家地あるいは宅地の占有が固定化し、一定の単位集団の居住域が決まってくるという事実（註3）は厳然と存在するようである。

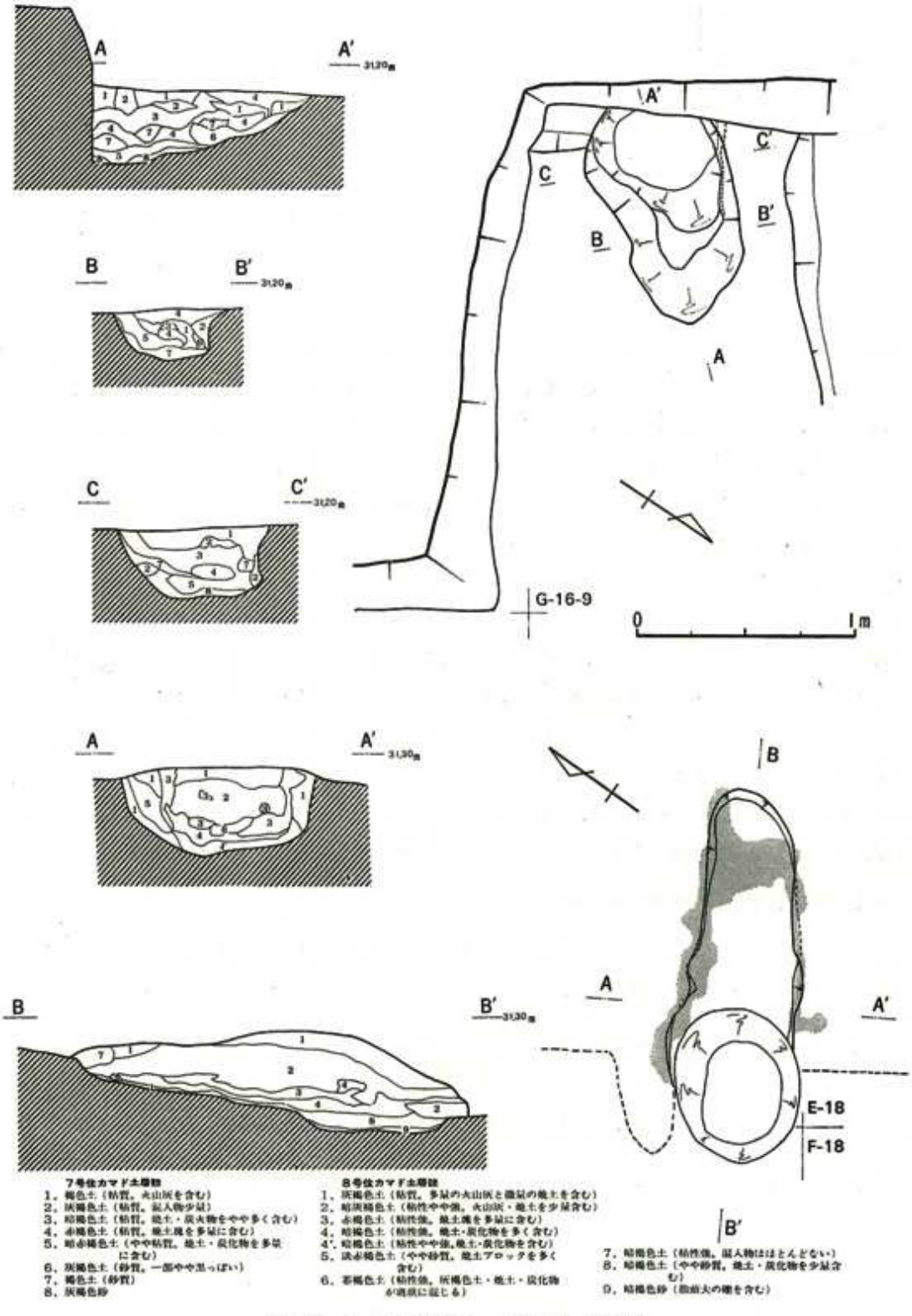
8号住居跡（第22図～第23図）

8号住居跡は、カマドのみ検出された。カマドはE—18区、E—19区、F—18区、F—19区の各グリッドを画する杭のすぐそば、E—19—5区に検出されたので、住居跡の掘り込みの大半はF—



第21図　2・4・5号住居跡カマド平面図

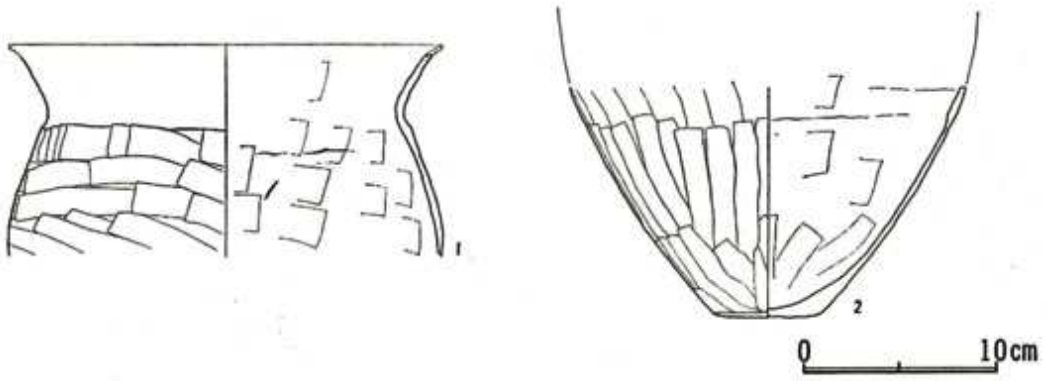
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			色調灰褐色。胎土やや細、ザラつく。黒色・白色細粒砂多量含む。焼成良。		
甕	5	口径 (20.2)	口縁部「く」の字形を呈して、外傾して立ち、上位で外に屈曲し、口唇部はつまみ出され、外に肥厚気味。胴部は小さく張る。色調橙褐色。胎土やや細。黒色・白色・透明細粒砂若干含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。頸部～胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。頸部にはヘラ痕目立つ。胴部内面ヘラナデ。	覆土、番号なし。 口縁部1/6残存。
甕	6	口径 (20.4)	口縁部大きく外反し、中位で外に屈曲。口唇部は丸い。胴部は直立気味で、張りは小さい。器肉厚い。色調橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色細粒砂多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。口縁部中位には粘土貼付痕残存。胴部外面縦位乃至斜位ヘラケズリ(上→下)。頸部にはヘラ痕目立つ。胴部内面ヘラナデ。	No. 394 口縁部 1/12 残存
甕	7	口径 (18.4)	口縁部大きく外反し、口唇部は丸く、内面に浅い沈線あり。器肉厚い。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。砂粒多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。	No. 178 口縁部1/6残存
甕	8	口径 22.1	口縁部は大きく外反し、口唇部は部分的に水平に寝て、丸い。頸部のくびれ弱く、胴部は直立し、若干張る。色調淡橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。内面にヘラ痕あり。胴部外面縦位乃至斜位ヘラケズリ(上→下)。頸部にヘラ痕多く、粘土塊がそのまま残る。胴部内面ヘラナデ。	No. 67、397、399、669。4住No. 11、12、13、14、18と接合。 口縁部1/3残存
甕	9	口径 (23.9)	口縁部「く」の字状を呈し、弱く外反して立つ。口唇部は丸く、内面に凹部あり。頸部はくびれ、胴部大きく張る模様。色調淡褐色。胎土やや細。黒色粗粒砂、白色・透明砂粒など多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。頸部にはヘラ痕顕著。胴部外面上半横位ヘラケズリか？	No. 49 口縁部1/6残存
甕？	10	底径 (7.0)	底部のみ。底面分厚く、平底風丸底を呈す。胴部との境で稜を有し、大きく外傾して立ち上がる。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・透明粒多。焼成良。	底部外面ヘラケズリ。胴部外面斜位ヘラケズリ(上→下？)。胴部内面ヘラナデ(左回転)。	No. 278 1/10程度残存
甕	11	底径 (4.6)	長甕の底部。胴部中位からゆるやかにつぼまる器形。胴部下端はやや丸味もつ。色調淡褐色。胎土細。黒色・透明・白色細粒砂多量に含む。焼成良。	胴部中位縦位ヘラケズリ(上→下)。胴部下位横位ヘラケズリ(左→右)。胴部内面ヘラナデ(右→左)。3条の深いヘラ痕状の条線入る部分あり。	No. 586、651、652、657 1/15程度残存



7号住カマド土層説
1．褐色土（粘質。火山灰を含む）
2．灰褐色土（粘質。混入物少量）
3．暗褐色土（粘質。地土・炭火物をやや多く含む）
4．赤褐色土（粘質。地土塊を多量に含む）
5．暗赤褐色土（やや粘質。地土・炭化物を多量に含む）
6．灰褐色土（砂質。一部やや黒っぽい）
7．褐色土（砂質）
8．灰褐色砂

8号住カマド土層説
1．灰褐色土（粘質。多量の火山灰と微量の地土を含む）
2．暗灰褐色土（粘性やや強。火山灰・地土を少量含む）
3．赤褐色土（粘性強。地土塊を多量に含む）
4．暗褐色土（粘性強。地土・炭化物を多く含む）
4'．暗褐色土（粘性やや強。地土・炭化物を含む）
5．淡赤褐色土（やや砂質。地土ブロックを多く含む）
6．茶褐色土（粘性強。灰褐色土・地土・炭化物が混状に混じる）
7．暗褐色土（粘性強。混入物はほとんどない）
8．暗褐色土（やや砂質。地土・炭化物を少量含む）
9．暗褐色砂（焼成土の塊を含む）

第22図　7・8号住居跡カマド平面図・断面図



第23図　8号住居跡出土遺物

18区～19区にあったと思われる。調査の終盤において確認されたため、住居跡の平面プランを確認する余裕はなかった。当初、1号溝跡確認のためのトレンチに、甕形土器のやや大きい破片がいくつかかかったが、レベルや土層断面から住居跡に伴なうものでなく、1号溝形成時の再堆積による出土品と考えたため、住居跡の存在を考え及ばなかった。8号住居跡は1号溝を挟んで、1～7号住居跡までの住居跡群と相対する位置にある。1号溝の東側の立ち上がりまで直線距離で6m程あるので、他にも住居跡の所在した可能性は大きい。沖積低地や微高地の場合、原地形の復元が困難な場合が多いと思うが、E—18～19区、F—18～19区のあたりはやや住居の掘り込み面、つまり旧地表面が、F—16～17区、G—16～18区よりもわずかに低かったために、土器の検出量が少なく、遺構の存在を見逃してしまったと考えられる。今回の遺構検出の失敗を反省すると共に、他の多くの発掘調査に従事する人達に本遺跡のテツを踏まないように切望したい。

8号住居跡のカマドは煙道が長く、本遺跡のカマドの中では7号住の形態に近い。ソデは不明瞭であったため、煙道・掘り方・土層断面などを中心にして記述したい。まず、煙道であるが、壁外部分の長さは、約120cmであり、煙道の掘り方の幅は最大53cmで、40cm前後の幅をとる。掘り方は煙道部から住居跡内部の掘り方まで直結していて縦70cm、横58cm、床面からの深さ17cmを測り、楕

8号住居跡出土土器観察表（第23図）

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径　(22.4)	口縁部外傾し、「く」の字状を呈する。口唇部は外につまみ出されるか？　頸部はくびれ、胴部はやや張り出す。色調暗橙褐色。胎土細。黒色・白色・透明細粒砂多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)、一部ササラ状。胴部内面ヘラナデ（右→左？)、上位に粘土紐貼付痕あり。	№16、18、42、56 口縁部1/4残存
甕	2	底径　(5.8)	胴下半部。胴部は中位から徐々につぼまり底部に移行。底部はやや小さい。内面に肥厚し、突帯状になる部分あり。色調暗橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色細粒砂多量に含む。焼成良。	胴部外面下半縦位乃至斜位ヘラケズリ（下→上)。胴部外面下端斜位ヘラケズリ（上→下)。底部外面ヘラケズリ。胴部内面下半横位ヘラナデ。胴部内面下端斜位ヘラナデ。	№7、30、38、45、46、58、64 1/12程度残存。

円形を呈する。出土した土器はほとんどが甕であり、大半がカマド掘り方の左半分に寄って、やや散在した状態で確認された。図示したのは、このうち、口縁部から胴部上半まで接合したもの1点と胴下半部のみのもの1点だけであり、他にも、3個体分ぐらいの量の甕の破片があるが、大きく接合しなかった。

カマドの構築は淡褐色粘質土により行なわれている。焼土・炭化物層の広がりを見る限りでは、よく使われたカマドで、掘り方も暗褐色土で埋められ、しっかりした作りとなっている。

出土した土器は2・4号住と共通するものが多いが、鬼高式土器に見るような厚手の口縁部をもつ甕はない。奈良時代の半ばをやや下る時期かあるいはそれより若干古い段階であろう。

3. 溝 跡

1号溝跡（第24図～第25図）

1号溝跡はF—16区からG—18区にかけて掘削されたもので、立ち上がり部分の幅員は最大11.3mもあり、溝跡というより小河川に近い。西側の立ち上がり部の下には、広いテラスがあり、東側にも部分的に存在する。テラスの落ち込み部分の幅では5m弱となり、これが古く掘られた一次的な用水路と考えられる。遺跡の南東端で大きく落ち込んでしまうが、その落ち込み部分が、荒川旧河道中の大きな支流とするならば、この溝は掘削された後、たびたび洪水を引き起し、ついには、集落跡廃絶のやむなきに至ったのであろう。溝の深さは1.3m前後で、用水目的の大溝としては、かなり規模の大きなものである。方向は南東から北西に向って流れ、発掘区外に大きく伸びるようである。当初は、北西から南東に流れる「悪水掘」かとも思ったが、溝から川への出口にややまっすぐ土手状の土の高まりが伸びること、溝底部のレベルが、逆に北西にいくに従って低くなることから考えると、むしろ、南東方向から川の水を引く用水と判断すべきであろう。

溝底部付近には1号住居跡や3号住居跡から落下した土器が若干見受けられ、住居跡群廃絶後、それほど間を置かずに掘られたとすることもできる。ただし、完形の土器を伴なう部分はまったくなく、8世紀代の年代で考えることを否定する材料はまだ数多い。8世紀代の住居群をこわしてしまっているので、何故に集落の一部を無理に動かしてまで、溝の掘削をするのか、理解に苦しむのである。また、テラス部分からの落ち方は急激で現在県内各地で検出されつつある古墳時代～奈良時代の溝状遺構にこのような形態を認められないからである。しかし、覆土上層の厚い青灰色粘土の堆積はこの溝が長期間沼地化した状態にあって形成されたものと判断されるので、近世以降に年代が下る可能性もまずないと思う。私見では、8世紀前半～中葉に、住居跡群の主要な部分ができており、その頃はまだ溝の掘削期に当っていない。むしろ、後述する2号溝・石列とそれに伴うであろう建物群の形成に伴ない、灌漑用水利用のためと、水上交通路の確保のために、奈良時代後半期～平安時代初期、暦年代にして770～820年ぐらいに掘削されているのではないかと推定しておきたい。

県内の研究者に注目されている、児玉郡の久城前遺跡（註4）—諏訪遺跡（註5）の大溝は出土する多くの土器から7世紀前半からほぼ7世紀いっぱいにその年代を求められている。現在、児玉工業団地内遺跡の発掘で、この大溝が途切れずにほぼまっすぐにつながっていることが明らかにな

りつつあり、この部分だけで総延長600 mが調査の対象になっていることから今後ますます検討の必要性が重くなってくるようである。この溝も掘立柱建物を含む奈良時代の大きな集落跡の北限にあたり、この溝より北に住居跡は所在しないようである。この事実より、8世紀代もこの大溝は生きていて、官衙クラスの遺構の検出が期待されるエステー化学工場裏（将監塚遺跡）との有機的関連性をもたせて考えるのが順当ではないかと思う。

さて、1号溝跡にもどるが、覆土からガラス玉、西岸のF—16区から滑石製小玉を出土するなど、玉造遺跡との関連を暗示する出土品がある。すでに記述したように、本遺跡の東方の別府微高地上には湯殿神社祭祀遺跡があり、西別府廃寺のような古代寺院もある。本遺跡の最大の謎である1号溝跡は、実はこのような歴史的世界の結節点として重要な位置づけがなされる遺構なのである。

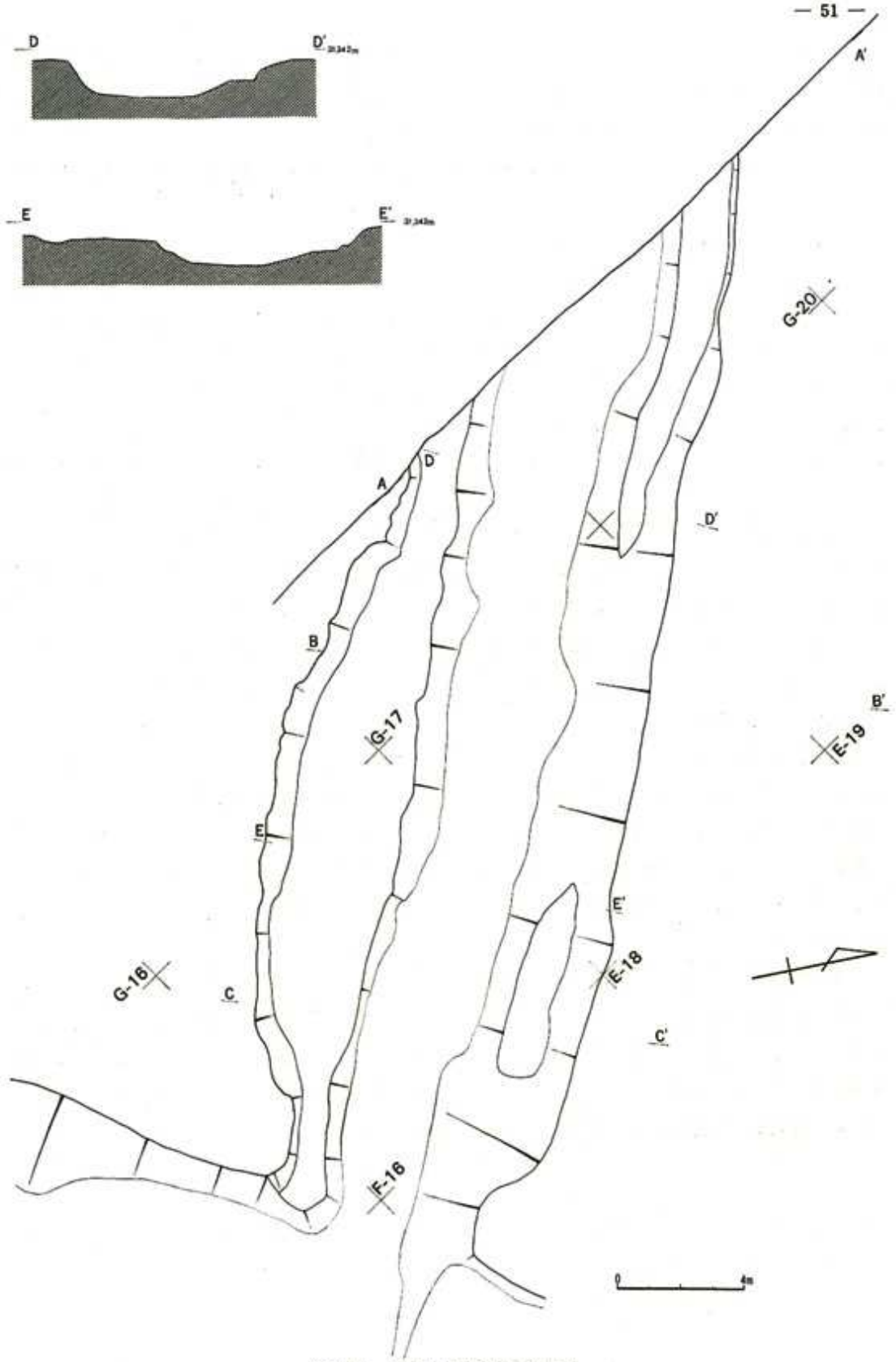
2号溝跡および石列（第26図～第27図）

2号溝跡は古墳の背後のC—24～25区を中心にした一帯にあり、途中で90°以上の角度で屈曲するが、末端は発掘区の壁面より外になる。

東西溝・石列は長さ9 m程で、コーナー部分が最も石の並びが密である。発掘区北東壁まで1 m程の間隙があるが、溝は連続するようである。南北溝は29.7m程の長さがあるが、石列は東西溝よりかなりまばらである。古墳の石材とほぼ同様の石材が使われているように見受けられるが、あるいは、近傍の古墳を破壊して石材集めをしたのかも知れない。方向は東西溝がS—82.75°—E、南北溝がN—7.25°—Wである。石列は意図的に並べたにしては大きさが不揃いで、一定の方向性ある配列の工夫を施さず、置き方の密度も一定しない。これは、石列が意図的に並べられたかもしれないにしても、石を並べようとする配慮があまりなされなくてもよい遺構であったためであろう。発掘区内では、礎石や柱穴列が確認できなかったが、後述する平瓦の出土からして、瓦葺の建物が発掘区外に存在した可能性は十分であろう。

2号溝跡の掘り方は断面で見る限りでは一定でなく、幅員0.7～1.5m程のU字溝と判断することはできる。また、石列を構成する円礫群も、密に重なっていない上に、溝の直上に乗ってしまっていて、溝の内側の立ち上がり部を保護する位置にあったとは思えない。石列の元来の位置は溝で区画される部分のやや内寄り(方向でいうと東寄り)にまとまって置かれていたものと思われ、それらが最終的に溝内に流れ込んだか、投棄されたかして、溝覆土上に動いてしまったと考えたい。さらに土層観察の結果わかることは、水流のあった結果形成される土壌の堆積が認められないことと、溝は基盤と思われる砂礫層まで掘り込まれていることである。確認面からの深さは、A断面67㎝、B断面58㎝、C断面67㎝、D断面59㎝である。この溝は空堀であり、建物群の境界を画するものであるという以外には、用水等の役割を果しえなかったと見たい。

最後に、溝に区画された瓦葺建物の性格を考えておこう。瓦葺の建物は官衙・寺院・豪族の邸宅などに用いられることはいうまでもない。一般集落内に掘立柱建物が伴なう例が増加しつつあるが、瓦葺の建物が一般集落に伴なうことはほとんどない。ましてや、溝で区画され、円礫で基壇などの何らかの施設を構築するとなると、集落と別の建物群を想定せざるをえず、有力者の邸宅・郷倉やそれ以外の正倉などの建物群ぐらいはあったとしてもおかしくないということになる。前述の



第24図　1号溝跡平面図・断面図

1号溝の掘削が集落形成期よりやや遅れているのは明らかなので、2号溝に区画された建物群と同時期になるとも考えられる。住居跡群からは、奈良時代半ば以前の土器しか出土していないため、平安期に下ると思われる瓦の時期とは半世紀程の時間差を考えうる。この間に、何らかの政治的・社会的変動がこの地域に起って、一般集落から「荘園村落」的な集落に変貌したのではないだろうか。

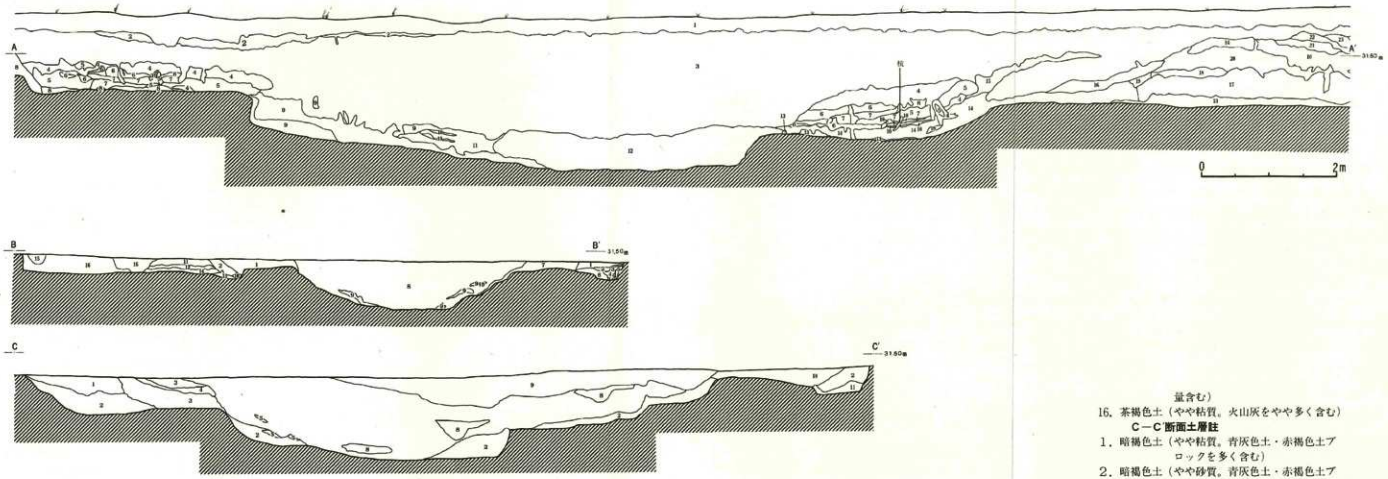
2号溝跡出土遺物（第27図）

2号溝跡の石列の間に散在した平瓦3枚を図示した。1はコーナーの部分で、全体の約1/6の破片である。凹面は斜めにヘラケズリされて、布目や模骨等の痕跡は残っていない。凸面は幅2㎜程の縄目の叩き目痕をもつ。縄目の筋はきれいに通らず、やや目が伸びている感じである。縄目原体はR $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ の縄を使用か。斜めの亀裂が多く、粗い砂が集中的に付着する部分もある。小口は凸面から内側に傾斜し、側面端部は直角に切断され、小口面も側面もヘラケズリで調整される。凹面の側面端部はわずかに面取りされるようである。1枚造りか。色調灰褐色。胎土細。透明細粒砂多。焼成堅緻。

2は、両側面、両小口ともに失っている。新しい割れ口が一方向ある。凹面は斜めにヘラケズリされているようである。一本沈線があるが、ヘラケズリの際生じたものであろうか。凸面は縄目の叩き目痕をもつ。幅2.5㎜程で縦に筋がよく通っている。ただし凸面一面に粗い砂粒が付着し、面もやや摩滅しているので、細部の観察は困難である。1に比べ、やや厚手で、黒っぽく焼けている部分もある。色調灰褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂など多。焼成堅緻。大きさから見てやはり全体の1/6程の破片であろう。

3は、側面端部が残っている。約1/7程の破片であろうか。凹面はヘラケズリされ、一本斜めの沈線が走る。凸面は縄目の叩き目痕で、筋は斜めに通っている。縄目の幅は2.5㎜程で、2と同様に一面に粗い砂粒が付着し、縄目の中につまっているので、細部の観察は困難であるが、原体はR $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ の縄を使うようである。側面端部は凸面に対して外傾斜に切断され、面はヘラケズリで調整されている。1枚造りである。色調灰褐色で、1・2より灰色に近い。胎土細。黒色・透明細粒砂など多量に含む。焼成堅緻。

いずれの瓦も欠損面がよく摩滅していて、かなり動いてから、2号溝に落ちこんでいるようである。瓦の絶対量の僅少なことより、2号溝のすぐそばに瓦葺の建物があったとは速断できないが、少なくとも平安期あたりに考えてよい瓦だと思われるので、発掘区外にもっと瓦の集中する遺構を予想するのもあながち不当とは思われない。ここでは、溝の性格を明らかにしえないわけであるが何らかの建物群の境界を画する溝となる可能性を留保しておきたい。



A－A'断面土層註

1. 耕作土
2. 暗褐色土（弱粘質。火山灰を多量に含む）
3. 茶褐色土（粘性強。青灰色粘土ブロックを多く含む。下部は砂質）
4. 暗褐色土（やや砂質。青灰色粘土ブロック少量含む。鉄分による赤褐色土ラミナが点在）
5. 暗褐色土（やや砂質。鉄分の赤褐色土ラミナが顕著で赤味がかる）
6. 暗褐色砂（やや青味を帯びる）
7. 暗青灰色砂（6との間に鉄分沈澱層がうすくはさまる）
8. 暗褐色土（粘性強。黒っぽい感じ。小礫を少量含む）
8'. 暗褐色土（やや粘質。砂ブロック・小礫をわずかに含む）
9. 暗褐色土（粘性強。砂ブロック・小礫を多少含む）
9'. 暗褐色土（やや粘質。砂ブロック・小礫を多量に含む）
10. 暗灰色砂
11. 淡褐色土（粘性強。砂ブロック・小礫を含む）
12. 淡褐色土（粘性強。小礫を少量含む）
13. 褐色砂
14. 淡褐色土（粘質。砂ブロック・小礫を少量含み、鉄分が多い）
15. 茶褐色土（粘質。青灰色粘土ブロックを含む。3層より明るい）
16. 黒褐色土（やや粘質。小礫を少量含む）
17. 褐色細粒砂
18. 褐色土（半砂半粘質。火山灰を微量含む）
19. 灰褐色粘土
20. 暗褐色土（やや粘質。火山灰を微量含む）
21. 暗褐色土（やや粘質。小礫を少量含む）
22. 淡褐色土（粘性強。淡褐色・青灰色粘土ブロック）
23. 褐色土（粘性やや強。淡褐色粘土ブロックを少量含む）

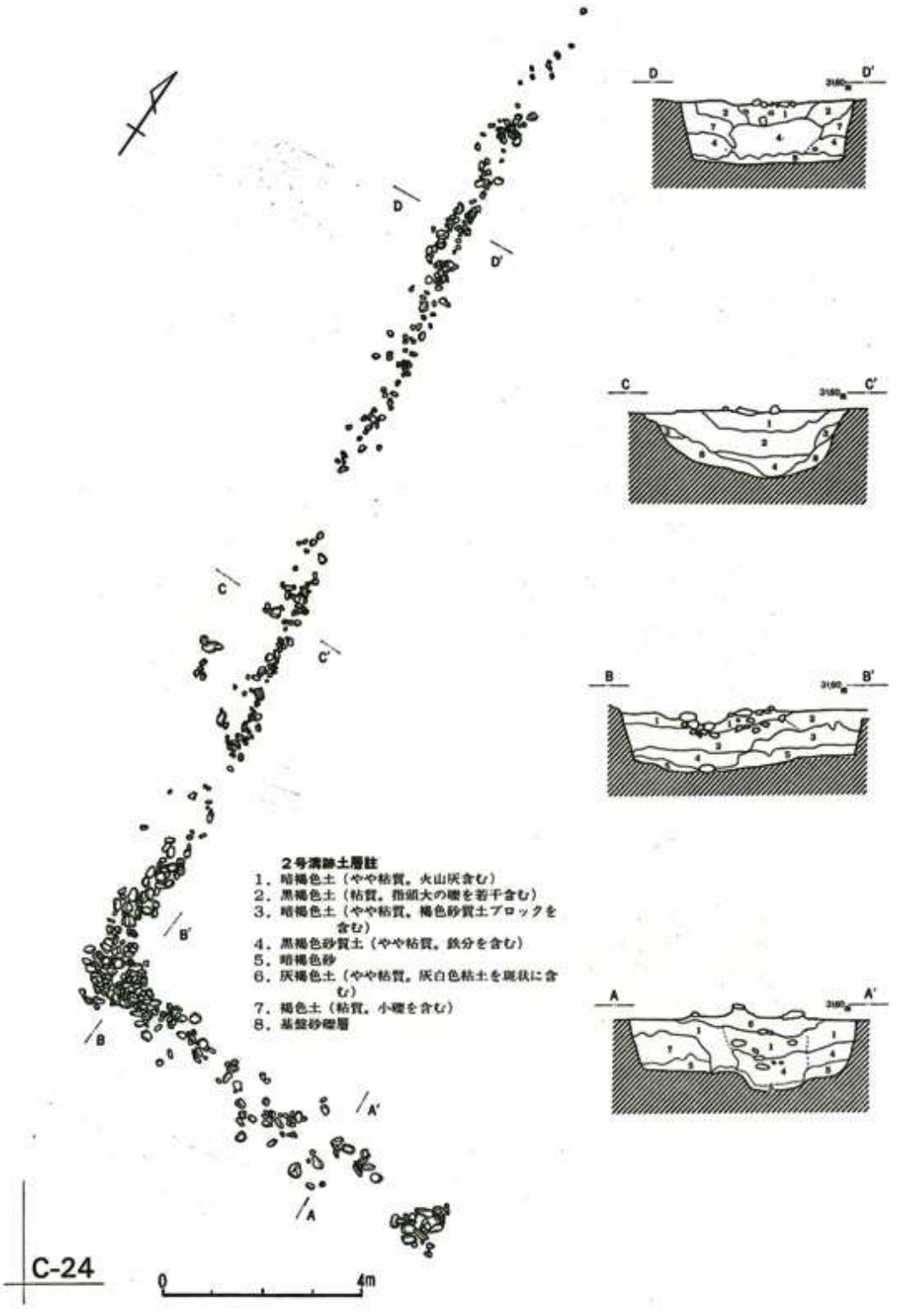
B－B'断面土層註

1. 暗褐色土（やや粘質。青灰色粘土・鉄分をブロック状に多量含む）
2. 黒褐色土（粘質。火山灰を微量に含む）
3. 暗褐色土（やや粘質。黒褐色土をブロック状に含む）
4. 青灰色土（やや粘質。赤褐色土を含む）
5. 暗褐色土（やや粘質。火山灰を微量に含む）
6. 暗褐色砂（青灰色粘土ブロックを含む）
7. 暗褐色土（やや粘質。青灰色粘土・鉄分をブロック状に含む。基質は1層より粗）
8. 茶褐色土（粘性強。青灰色粘土ブロックを多く含む。下部は砂質）
9. 茶褐色砂
10. 暗褐色砂（青灰色土・赤褐色土を含む）
11. 茶褐色土（やや粘質。火山灰を含む）
12. 褐色土（やや粘質）
13. 暗褐色砂（基盤砂層）
14. 茶褐色土（やや粘質。火山灰は含まない）
15. 黒褐色土（粘質。青灰色土・赤褐色土ブロックを多く含み、火山灰・小礫を少量含む）
16. 茶褐色土（やや粘質。火山灰をやや多く含む）

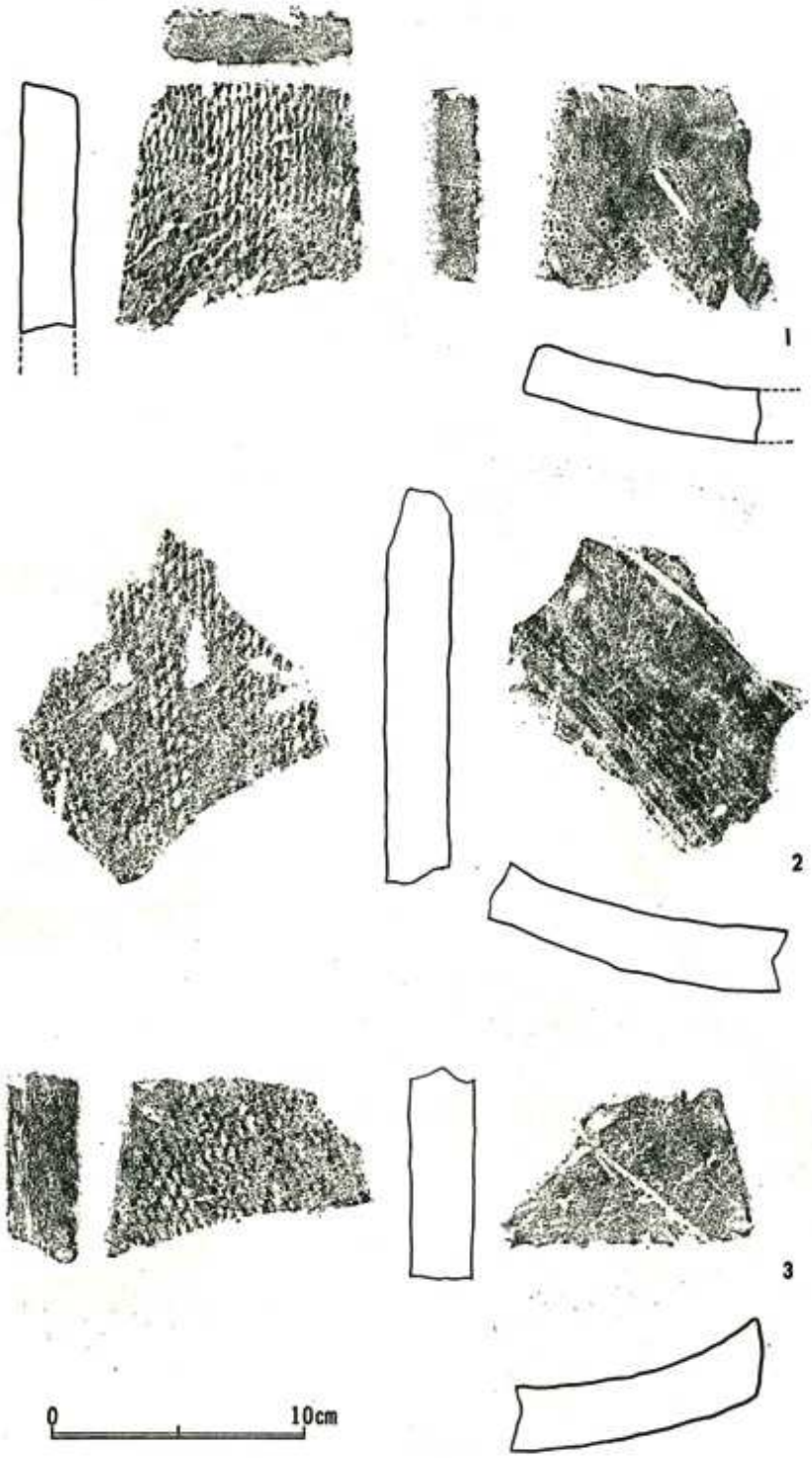
C－C'断面土層註

1. 暗褐色土（やや粘質。青灰色土・赤褐色土ブロックを多く含む）
2. 暗褐色土（やや砂質。青灰色土・赤褐色土ブロックを多く含む）
3. 茶褐色土（粘性強。赤褐色土・青灰色土を大量に含む）
4. 暗褐色砂（連続する砂ブロック）
5. 砂ブロック
6. 茶褐色土（やや粘質。赤褐色土・青灰色土をやや多く含む）
7. 暗褐色土（やや粘質。火山灰を多量に含む土のブロックが混じる）
8. 青灰色土（粘性強。赤褐色土の大きなブロックを多く含む）
9. 暗褐色土（やや粘質。青灰色土ブロックを少量含む）
10. 暗褐色土（やや砂質。青灰色土・赤褐色土ブロックを少量、小礫を少量含む）
11. 暗赤褐色砂質土（青灰色土を多く含み、鉄分の酸化が激しく、黒っぽい）

第25図　1号溝跡土層断面図



第26図　2号溝跡および石列平面図・断面図（スケールは平面図のみ。断面図の縮尺は平面図の2倍）



第27図　2溝および石列出土遺物（平瓦）

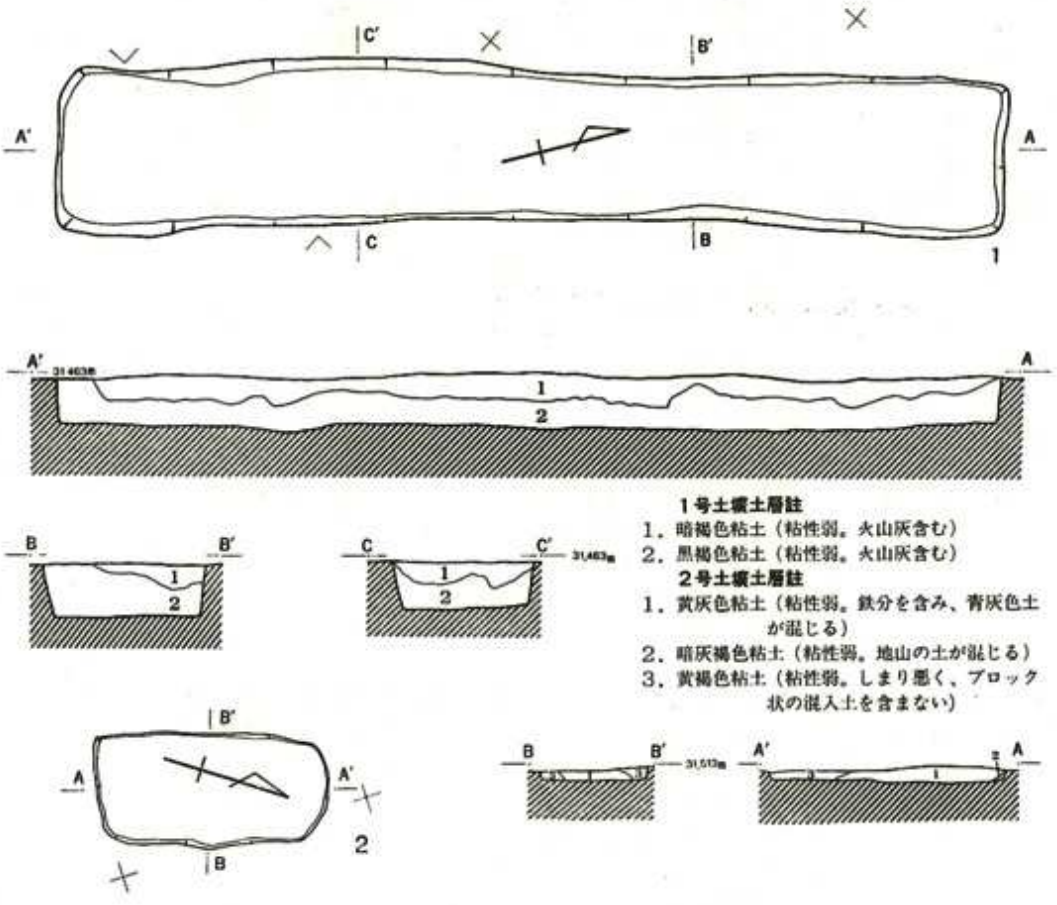
4. 土 壙

1号土壙（第28図）

1号土壙はC—21区にあり、発掘区東北壁面まで約2mぐらいの距離がある。主軸方向はN—14.75°—Eである。長さ約7.3m、最大幅1.28mを測る大型の土壙で、平面プランは長方形である。掘り込みは垂直に近く、まっすぐ掘り込まれ、底面は平担で、箱形に掘り込まれる。深さは40cm前後である。覆土は暗褐色粘質土で、短期で埋没したらしい。遺物はほとんどなく、時期・性格不明である。

2号土壙（第28図）

2号土壙は、1号墳背後のD—26区にあり、主軸方向N—15.5°—W、長さ1.83m、幅0.88m、深さは確認面から7～12cmを測る。平面プランは不整楕円形で、掘り込みはまっすぐなされていて、底面はほぼ平担である。1号土壙の部分は地山が灰褐色であったが、2号土壙の地山は黒褐色土であり、覆土は逆に灰白色粘質土であった。やはり、遺物はなく、時期・性格ともに不明である。



第28図　1号土壙・2号土壙平面図・断面図

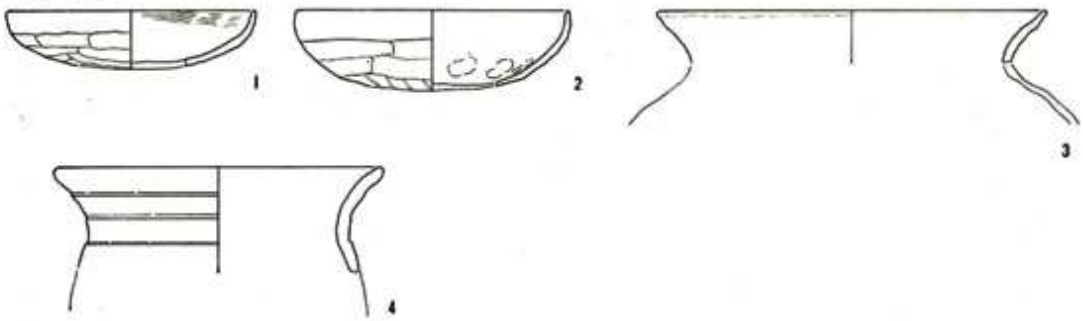
5. その他の出土遺物

グリッド出土土器（第29図～第31図）

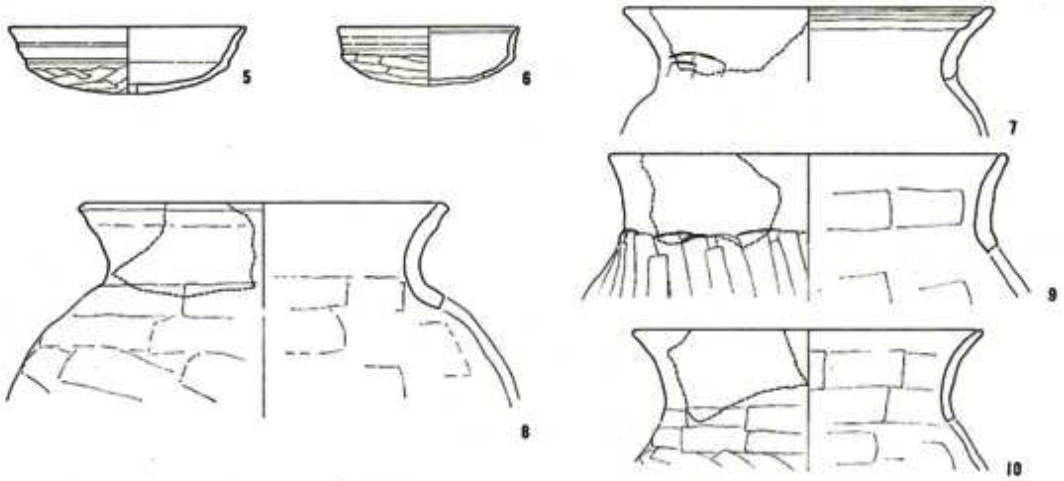
以下にグリッド出土土器の観察表と実測図を示す。竪穴住居跡を確認したのが、かなり遅れたために、本来住居跡の覆土上層部の土器として取り扱わねばならないものもある。そこでグリッドのナンバー（G—16、G—17など）を示しておくので、住居跡に付随する土器と対照していただきたい。C—18区、D—18区、C—17区の境にある土器溜りの出土品も一括しておく。

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 (12.9) 器高 (3.0)	口縁部外傾して立ち、内湾気味。口唇部は丸い。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。色調淡橙褐色。胎土細。黒色・透明細粒砂多量に含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左？）、摩滅して稜不明瞭。口縁部ヨコナデ（左回転）、内面には刷毛目状擦痕目立つ。底部内面ヘラナデ。	G—16 №390 口縁部1/6残存
坏	2	口径 (14.0) 器高 (4.1)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部突る。体・底部丸く、口縁部からスムーズに移行。色調淡褐色。胎土細ザラザラ。黒色・透明粒多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転）。底部内面ヘラナデ。内面には指頭圧痕顕著。	G—16 №642 口縁部1/6残存
甕	3	口径 (19.8)	口縁部大きく外反し、上位でやや内湾気味に曲げられる。口唇部は丸い。「く」の字状口縁の甕か。色調橙褐色。胎土細、ややザラつく。透明・黒色細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ（右回転）。	G—16 №363 口縁部1/5残存
甕	4	口径 (17.0)	口縁部外反して立ち、中位に2つの段をもつ。口唇部は丸い。頸部は直立し、胴部へは段をもって移行。胴部は小さく張る。色調淡褐色。胎土やや細、ザラつく。黒色・透明・白色粒多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ？　胴部外面横位ヘラケズリ？　胴部内面ヘラナデ？　摩滅して詳細不明。	G—16 №655 口縁部 1/12 残存
坏	5	口径 (12.2) 器高 (3.4)	口縁部外傾して立ち、口唇部外反気味でやや突る。口縁部中位および体部上端に段をもち、それぞれ沈線を伴う。体・底部丸く、やや扁平。色調橙褐色。胎土細。透明・黒色・白色細粒砂多量。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（やや錯綜、左→右が優勢）。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	G—17№1137 1/6程度残存

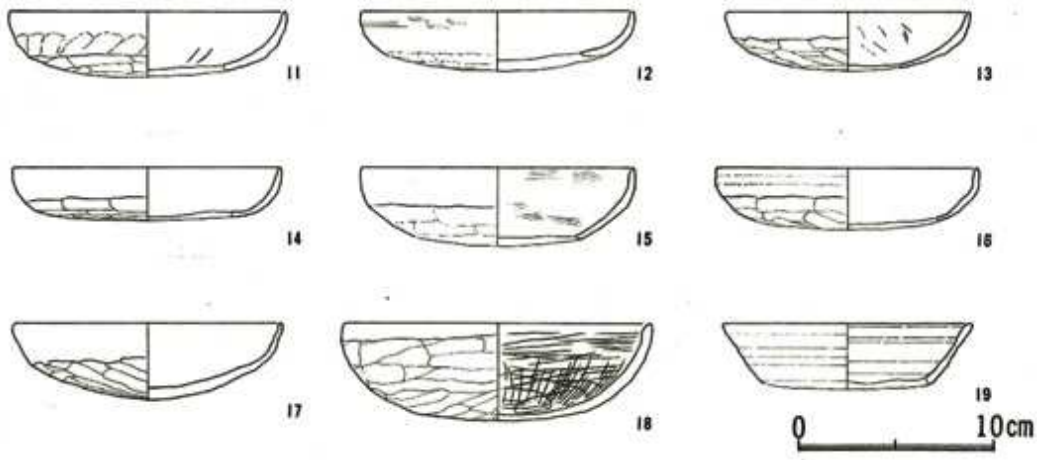
G-16



G-17

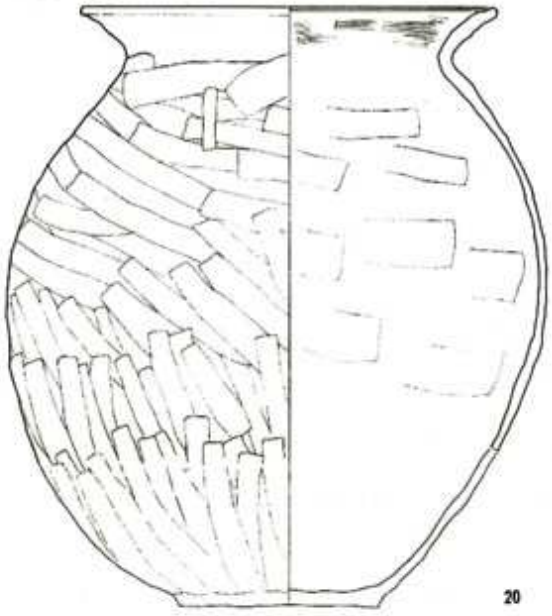


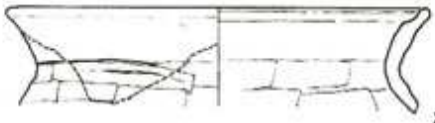
G-18



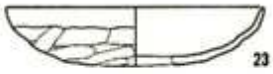
第29図　グリッド出土遺物(1)

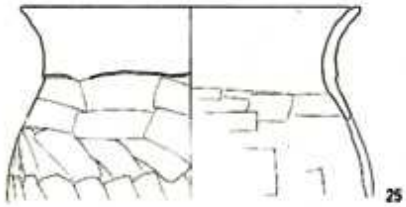
G-18

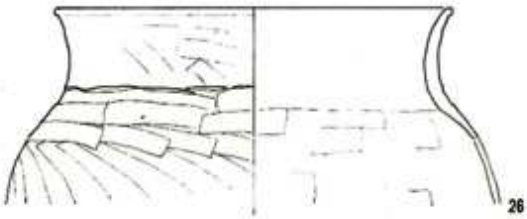


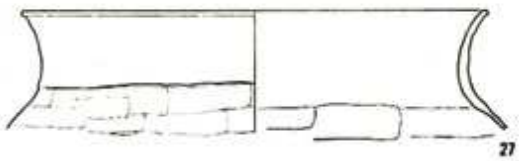


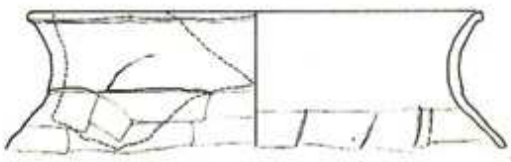
C-18·D-18





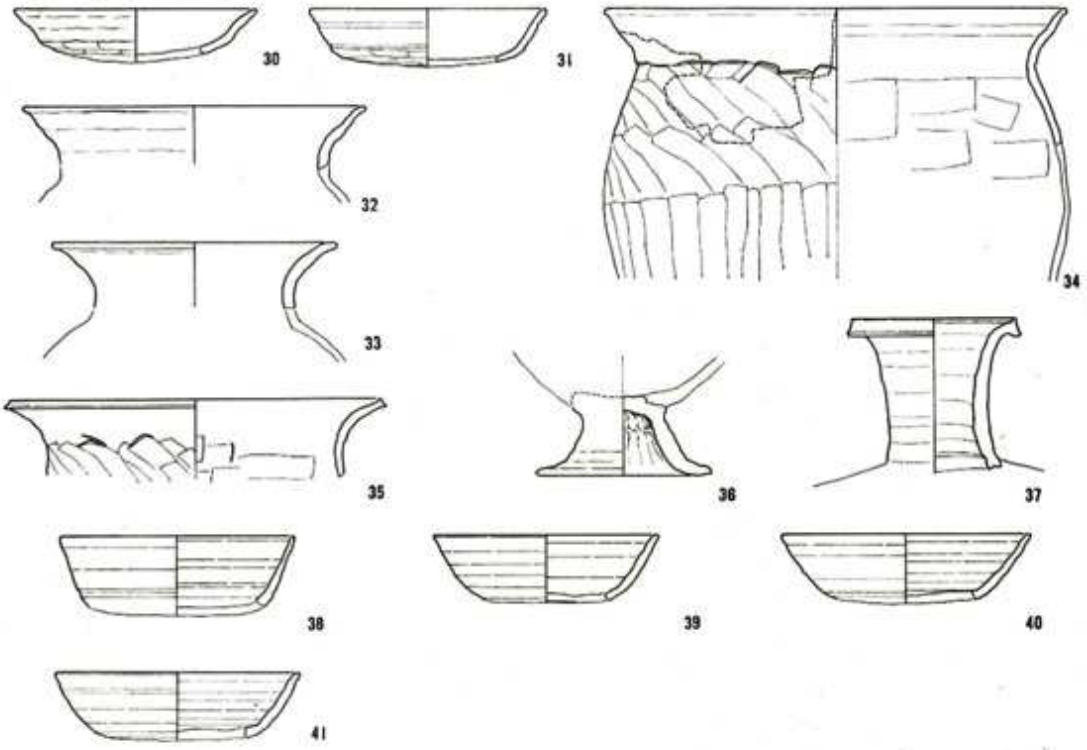




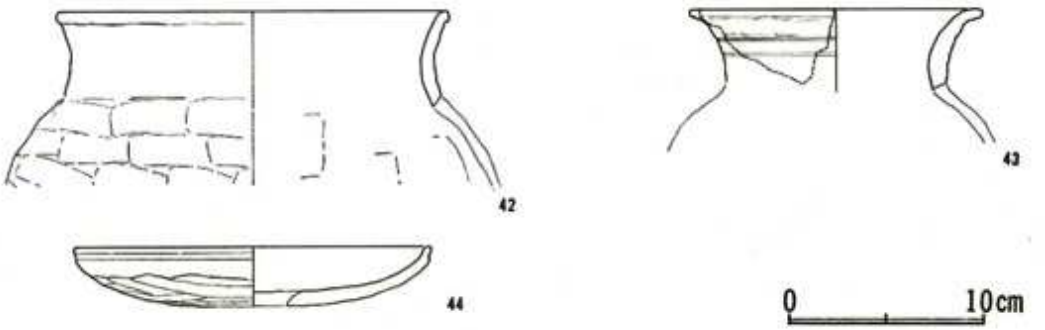


第30図　グリッド出土遺物 (2)

その他のグリッド



表土



第31図　グリッド出土遺物 (3)

器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	6	口径 (9.3) 器高 (3.0)	口縁部外反気味に直立し、口唇部は突り気味。内面には沈線あり。体部との境にゆるい稜あり。体部丸く、丸底の底部にそのまま移行。小振りの器形。色調橙褐色。内面全体と口縁部外面丹塗。胎土細。小石、細粒砂少量。焼成良、硬。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。口縁部ヨコナデ（左回転。底部内面ヘラナデ。	G—17 №571 № 784 口縁部1/6残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	7	口径 (18.9)	口縁部やや大きく外反。口唇部は丸く、内面に幅の広い凹線2条あり。頸部は短く直立する。器肉厚い。色調淡橙褐色。胎土やや細。小石、黒色・透明粒多量。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。頸部外面ヘラケズリか？ ヘラ痕目立つ。頸部内面ヘラナデ。	G—17 №587 口縁部1/6残存
甕	8	口径 (19.0)	口縁部外反して立ち、上位にゆるい段あり。口唇部は外側に面をもち、内外に小さく肥厚する。頸部は丸く湾曲し、胴部へ移行。胴部は大きく張り出す。器肉厚い。色調茶褐色。胎土やや細、ザラザラ。透明・白色・黒色細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ（右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左？)。胴部内面ヘラナデ。	G—17 №12 口縁部1/12残存
甕	9	口径 (20.4)	口縁部外反気味に立ち、口唇部は丸い。ゆるく屈曲して頸部に移行。頸部は直立気味で、ゆるく屈曲して小さく張る胴部へ移行。器肉厚い。色調淡褐色。胎土やや細。黒色・透明・白色細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ（左回転)。胴部外面縦位ヘラケズリ（上→下)。胴部内面ヘラナデ(右→左)。	G—17№1057 口縁部1/6残存
甕	10	口径 (18.0)	口縁部外反し、口唇部は丸い。ゆるく屈曲して、弱く外傾する頸部へ移行。胴部との境もゆるく屈曲し、胴部は小さく張り出す。色調淡橙褐色。胎土やや細、ザラつく。黒色細粒砂など多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ（右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ（右→左)。胴部内面ヘラナデ。	G—17 №959 口縁部1/6残存
坏	11	口径 (14.2) 器高 (3.3)	口縁部外傾して立ち、内湾気味。口唇部はやや突る。体部との境は稜はっきりせず、ゆるく屈曲して丸い体・底部へ移行。やや浅い器形か。色調暗橙褐色。胎土やや細。透明・黒色細粒砂多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左)。口縁部ヨコナデ（右回転)。口縁部外面下端は斜位ヘラケズリ後ナデか？ 底部内面ヘラナデ。ヘラ痕散在。	G—18 №575 口縁部1/6残存
坏	12	口径 (14.0) 器高 (3.0？)	口縁部内湾気味に直立。口唇部は突る。体部丸く、口縁部からスムーズに移行。底部を欠く。色調橙褐色。胎土細。細粒砂多。焼成良。	体部外面ヘラナデ。底部外面はヘラケズリか？欠失して不明。口縁部ヨコナデ(右回転)。外面に刷毛目状擦痕あり。体部内面ヘラナデ。	G—18 №597 口縁部1/6残存
坏	13	口径 (12.5) 器高 (3.0)	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は突る。体・底部丸	体・底部外面ヘラケズリ（右→左)。口縁部ヨコナデ(左回	G—18 №686 口縁部1/6残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			く、口縁部からスムーズに移行。やや小振りの器形。色調淡橙褐色。胎土細、ややザラつく。黒色・透明細粒砂多量に含む。焼成良。	転)。底部内面ヘラナデ。内面は細かいヘラ痕顕著。	
坏	14	口径 (13.8) 器高 (2.7)	口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は突る。体部丸く、底部平底風。口縁部からスムーズに移行。色調橙褐色。胎土細。黒色細粒砂などやや多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。体部上端ナデ消される。口縁部ヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデ。	G—18 №438 口縁部1/6残存
坏	15	口径 (14.0) 器高 (4.0)	口縁部内湾気味に直立し、口唇部は突る。体部は丸く、口縁部からスムーズに移行。底部を欠く。色調橙褐色。胎土細、ややザラつく。透明・黒色細砂多。焼成良。	体部外面ヘラケズリ(右→左?)、摩滅して稜不明瞭。口縁部ヨコナデ(右回転)。内面に刷毛目状擦痕あり。体部内面ヘラナデ。	G—18 №98 口縁部1/7残存
坏	16	口径 (13.3) 器高 (3.2)	口縁部短く直立し、口唇部は突る。体部との境で屈曲し、体部はやや直線的。底部との境もやや屈曲し底部は丸い。色調淡橙褐色。胎土細、ややザラつき。黒色細粒砂少量含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(左回転)。体部内面ヨコナデ。	G—18 №498 口縁部1/6残存
坏	17	口径 13.7 器高 3.9	口縁部外傾して立ち、口唇部は内湾して内側に肥厚する。体部丸く、口縁部との境で弱く屈曲する。体部は中位で内側に屈折し、突出気味の丸底の底部に移行。色調淡褐色。胎土細。黒色細粒砂少量含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部強いヨコナデ(左回転)。底部内面ヘラナデやや粗い。内面ヘラケズリ状の整形痕縦横に残る。	G—18 №687 7/10程度残存
坏	18	口径 (15.8) 器高 (5.0)	口縁部短く直立。口唇部は突り気味で、内側に面をもつ。体・底部丸く深く、口縁部からスムーズに移行。器肉厚手。色調橙褐色。胎土細。白色細粒砂多。焼成良、硬。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)。体・底部内面正放射状暗文、横位暗文。底部内面にはラセン状暗文風の痕跡もある。	G—18 №98 1/4程度残存
須恵器坏	19	口径 (12.9) 器高 (3.4)	体部は直線的に外傾して立ち、口縁部直下でややくびれる。口縁部内面は肥厚し、口唇部は丸い。底部を欠く。色調淡青灰褐色。胎土微細。白色針状物質少量、微粒砂少量含む。焼成堅緻。	左回転巻き上げ後、ロクロ水挽き整形(ロクロ右回転)。	G—18 №376 口縁部1/7残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	20	口径 21.4	口縁部大きく外反し、口唇部はつまみ出し気味で丸い。内面に幅広い沈線一周。頸部「く」の字状に屈曲し、胴部はやや大きく張り出し、丸い。胴部中位に最大径。口縁部から胴部上位は器肉厚い。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。白色の小石と、黒色・白色細粒砂多く含む。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)、内面には刷毛目状擦痕顕著。胴部外面上半横位乃至斜位ヘラケズリ(左→右)。下半部は斜位乃至縦位ヘラケズリ(上→下)、重複多。胴部内面ヘラナデ(右→左)。	G—18 №555、315、413、556 口縁部3/5、全体の4/5残存
甕	21	口径 (21.8)	口縁部外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味で丸い。内面に幅広い凹線一周。頸部「く」の字状に屈曲し、胴部やや大きく張る。器肉厚い。色調淡褐色。胎土やや細ザラつく。黒色・白色細粒砂多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。頸部にはヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ(右→左?)	G—18 №558 口縁部1/4残存
甕	22	口径 (19.9)	口縁部外反して立ち、口唇部はやや細まる。頸部短く直立気味。色調淡橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色・透明細粒砂多量。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。	G—18 №148 口縁部1/6残存
坏	23	口径 (13.2) 器高 (3.0)	口縁部外傾して立ち、内湾気味。口唇部やや突る。一度内側に軽く屈曲して体部に移行。体部丸く、底部平底気味。色調橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色・透明細粒砂などやや多く含む。焼成良。	口縁部下半、体・底部外面ヘラケズリ(左→右)。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	C—18 №366、371 口縁部1/8残存
坏	24	口径 (13.2) 器高 (5.0)	口縁部から体部は外傾して立ち、内湾気味。口唇部は内側に面をもち、やや突る。体部下端丸く、ゆるく屈曲し、上げ底風平底の底部に移行。色調淡褐色。胎土細。黒色・透明粒多量。焼成良。	口縁部から体部外面ロクロ水挽き整形(ロクロ左回転)。底部回転糸切り離しか? 残存部小さく不明。内面黒色研磨。	D—18 №10 口縁部1/6残存
甕	25	口径 (17.4)	口縁部ゆるく外反し、口唇部は突り気味。頸部は直立し、口縁部との境はゆるく曲がる。胴部との境はゆるく屈曲し、胴部の張りは小さい。口縁部器肉やや厚い。色調淡橙褐色。胎土細、ザラつく。黒色・透明・白色細粒	口縁部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。頸部はヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ。頸部との境に指頭圧痕による凹凸目立つ。	C—17 №118 口縁部1/6残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			砂多。焼成良。		
甕	26	口径 (20.4)	口縁部ゆるく外反して立ち、口唇部は外につまみ出され、丸い。頸部は直立気味でゆるく外湾し、わずかに屈曲して胴部に移行。胴部はやや大きく張る。口縁部から頸部は器肉やや厚い。色調橙褐色。胎土細、ザラザラ。白色細粒砂多、黒色粒は少量。焼成良。	口縁部から頸部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。口縁部の一部ヘラケズリの痕跡あり。頸部はヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ。	C—17 №24 口縁部1/6残存
甕	27	口径 (24.0)	形態は26とほぼ同様。ただし、口縁部はやや薄い。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。黒色・透明細粒砂多量に含む。焼成良。	口縁部から頸部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。頸部のヘラ痕ややゆるい。胴部内面ヘラナデ。	C—17 №215、344 口縁部1/6残存
甕	28	口径 (23.4)	形態は26とほぼ同様。口唇部直下に断続的なヘラ状工具の整形痕がある。色調橙褐色。胎土やや細、ザラつく。細粒砂やや多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半横位ヘラケズリ(右→左)。頸部ヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ(右→左)。ヘラ痕やや多。	D—18 №291 口縁部1/6残存
甕	29	口径 (16.0)	口縁部外傾し、口唇部は丸い。わずかに内湾気味。頸部は短く直立し、口縁部、胴部との境でそれぞれゆるし屈曲し、ゆるい「コ」の字状を呈する。頸部と胴部の間は段をもつ。胴部は小さく張る。色調橙褐色。胎土やや細。白色・黒色・透明細粒砂やや多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(右回転)。頸部との境に粘土紐貼付痕あり。胴部外面上半横位ヘラケズリ、摩滅して方向不明。頸部下端にヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ。	C—18 №290 口縁部1/6残存
坏	30	口径 (12.5) 器高 (2.7)	口縁部大きく外反し、口唇部は突る。口縁部中位でゆるく屈曲する。体部との境にゆるい稜あり、体・底部は丸く浅い。色調橙褐色。胎土細。黒色細粒砂やや多。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ。	E—17 №101 口縁部1/6残存
坏	31	口径 (12.2) 器高 (3.0)	口縁部外傾して立ち、口唇部丸い。口縁部中位、体部との境に段あり、沈線を伴う。体部丸く、底部平底気味。色調橙褐色。胎土やや細、ザラザラ。黒色細粒砂など含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ(右→左)。口縁部ヨコナデ(右回転)。内面剝落し、不明。	F—16 №104 口縁部1/7残存

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	32	口径 (17.6)	口縁部は大きく外反し、2ヶ所でゆるく屈曲する。口唇部はつまみ出され、丸い。頸部との境で屈曲し、頸部は直立する。色調赤褐色。胎土細。細粒砂多量。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。口唇部のつまみ出しの調整痕部分的にやや強目。	E—19 No. 23 口縁部 1/10 残存
甕	33	口径 (14.6)	口縁部は大きく外反し、口唇部はつまみ出され、丸く、窄る。頸部との境でゆるく曲がり、頸部は直立する。やや厚手の器肉。胴部を欠く。色調淡褐色。胎土やや細。白色粒多。焼成良。	口縁部ヨコナデ(左回転)。	D—23 No. 17 口縁部 1/12 残存
甕	34	口径 (23.7)	口縁部は外反し、中位でゆるく屈曲し、口唇部はつまみ出され、丸い。頸部は短く直立し、ゆるく屈曲して胴部に移行。胴部は小さく張る。色調橙褐色。胎土細。細粒砂やや多く含む。焼成良。	口縁部から頸部ヨコナデ(右回転)。胴部外面上半斜位ヘラケズリ(右下→左上)。頸部と胴部の境にヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ。	E—19 No. 5、24、19、21、22。甕32は同一個体の可能性あり。口縁部1/4残存
甕	35	口径 (19.6)	口縁部大きく外反し、口唇部は外側に面をもち、端部は上下に張り出し、鋭く仕上げられる。胴部との境はゆるく屈曲し、胴部は直立。色調灰褐色。胎土細。透明・黒色・白色細粒砂やや多。焼成良、硬。	口縁部ヨコナデ(左回転)。胴部外面上半斜位ヘラケズリ(右下→左上)。頸部にヘラ痕顕著。胴部内面ヘラナデ(右→左)。	F—16 No. 31 口縁部1/6残存
甕	36	底径 (9.05)	台付甕脚部。短く「ハ」の字状に開き、裾部は大きく外反。端部はつまみ出し気味。脚台部下端に粘土紐接合部のナデによる弱い屈曲あり。色調淡橙褐色。胎土やや細。黒色細粒砂などやや多。焼成良。	裾部から脚部下端ヨコナデ(左回転)。脚部下位指頭整形。脚部上位ヘラケズリ後ナデ。脚部内面指頭ナデ・天井部指頭圧痕顕著。	C—24 No. 8 脚部2/3残存
須恵器長頸壺	37	口径 8.9	頸部と口縁部のみ。口縁部は強く外反。口唇部は外面に面をもち肥厚し、端部は上下に張り出し、やや鋭く仕上げられる。内面に浅い沈線一周。頸部は口縁部に向って徐々に開き、接合部よりやや上位で最も細い、接合部もやや開き、強くつままれ、端部は下に突き出す。色調黒灰色。頸部外面は自然釉のためか	口縁部ロクロ水挽き整形(ロクロ右回転)。内面はやや強めで、凹面が顕著。	F—25 No. 1 口縁部頸部完全体の1/6程度か?

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			黒く変色。胎土微細。白色粒多量。焼成堅緻。		
須恵器坏	38	口径 (12.0) 器高 (4.1?)	体部外傾して直線的に立ち上がり、口縁部はつまみ出しによる弱い屈曲部をもつ。口唇部は突り気味。体部の下位にゆるい沈線をもって底部に移行。底部は平底気味か？ あるいは「ハ」の字状蓋形土器かもしれない。色調灰色。胎土微細。黒色・白色細粒砂含む。焼成堅緻。	口縁部から体部内外面ロクロ水挽き整形(ロクロ右回転)。	D－23 №13 口縁部1/7残存
須恵器坏	39	口径 (11.6) 器高 (3.5)	体部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は外反気味で、やや突る。底部を欠くが、上底風平底か？ やや厚手。色調青灰白色。胎土微細。透明・白色粒、小石含む。焼成堅緻なれど、やや甘い感じ。	口縁部から体部粘土紐左回転巻き上げ後、ロクロナデ（ロクロ右回転)。内面やや荒く、外面やや丁寧。体部下端回転ヘラケズリ（左→右。逆位の場合、ロクロ左回転)。	F－17 №266、269 口縁部1/4残存
須恵器坏	40	口径 (12.9) 器高 (3.6)	体部外傾し、直線的に立ち、口唇部はわずかに外反し、丸い。体部はゆるく屈曲して平底の底部へ移行。底部を欠く。色調灰白色。胎土微細。透明・黒色細粒砂などやや多く含む。焼成堅緻、やや甘い。	口縁部から体部粘土紐左回転巻き上げ後、ロクロナデ（ロクロ右回転)。口縁部には巻き上げの痕跡残る。内面ナデ丁寧。外面のナデ荒く、粘土のダマ状盛り上がり顕著。	F－17 №405 口縁部1/4残存
須恵器坏	41	口径 (12.6) 器高 (3.5)	体部内湾気味に外傾して立ち、口唇部は外反し、突る。体部下端はゆるく屈曲し、平底の底部へ移行。色調青灰色。胎土微細。白色粒多、透明・黒色粒少。白色針状物質ごくわずか。焼成堅緻。	口縁部から体部粘土紐左回転巻き上げ後、ロクロナデ（ロクロ右回転)。内外面ともやや丁寧、ロクロ目やや不明瞭。	G－22 №3 1/8程度残存
甕	42	口径 (20.1)	形態は26とほぼ同様。口唇部外面に顕著に肥厚。色調赤褐色。胎土やや細、ザラつく。透明・黒色細粒砂やや多。焼成良。	口縁部から頸部ヨコナデ（右回転)。	表土 口縁部1/6残存
甕	43	口径 (15.1)	口縁部外反し、中位に2本の沈線一周。口唇部は一層大きく外反し、窪る。器肉厚い。色調暗橙褐色。胎土細。黒色・透明・白色細粒砂多。焼成良。	口縁部から頸部ヨコナデ（左回転)。	表土 口縁部1/6残存

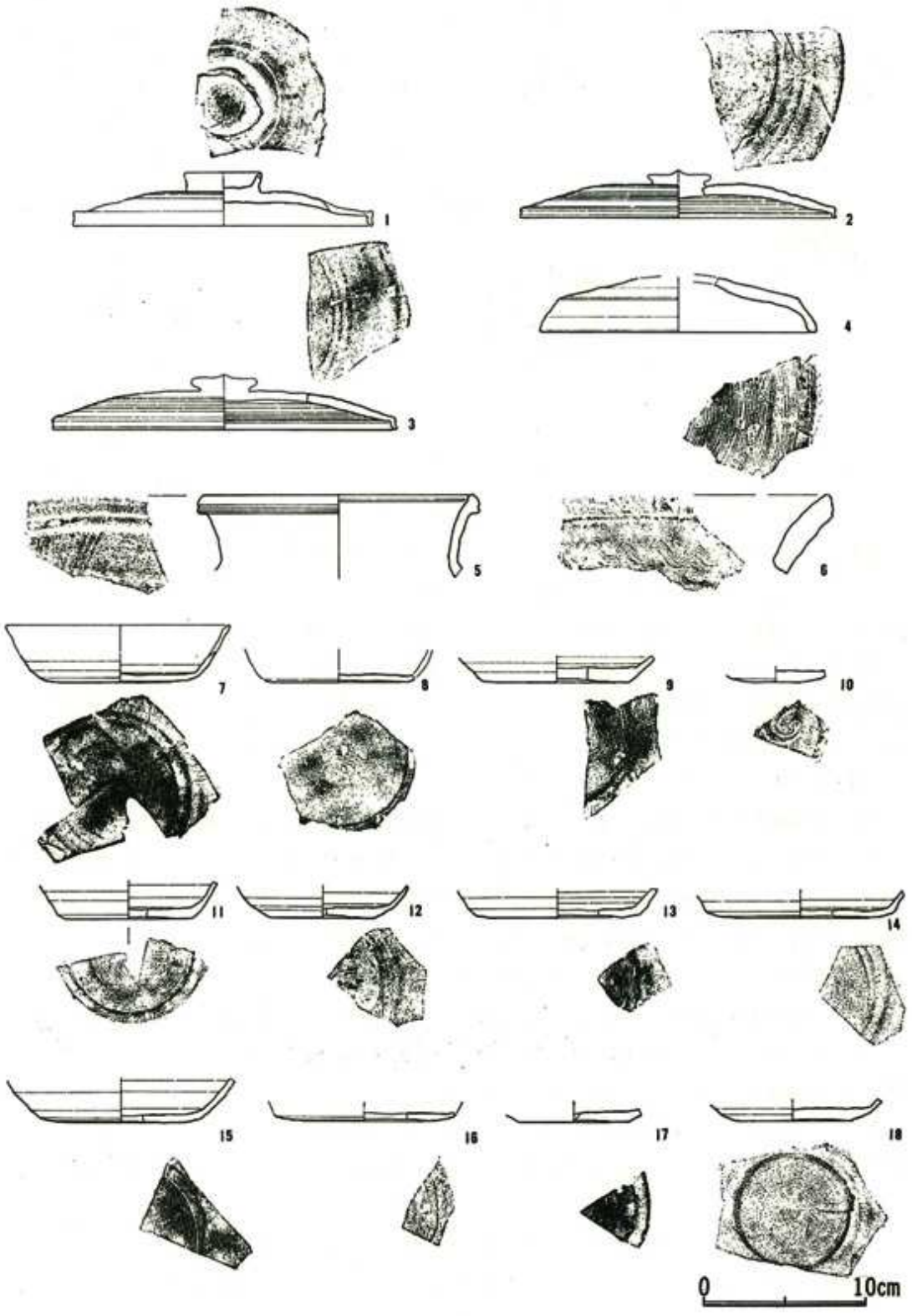
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
皿	44	口径 (18.4) 器高 (3.0)	口縁部短く、外傾して立つ。口唇部は平らな面をもつ。体部との境に稜もち、体部丸く、底部にそのまま移行。底部平底。やや扁平な器形。色調灰褐色。黒色・透明細砂多く含む。焼成良。	体・底部外面ヘラケズリ（右→左）。体部上端はケズリの後ナデか？ケズリの痕跡残らず、口縁部ヨコナデ(右回転)。底部内面ヘラナデ、平滑・同心円状。	表土 口縁部1/6残存

その他の須恵器（第32図～第34図）

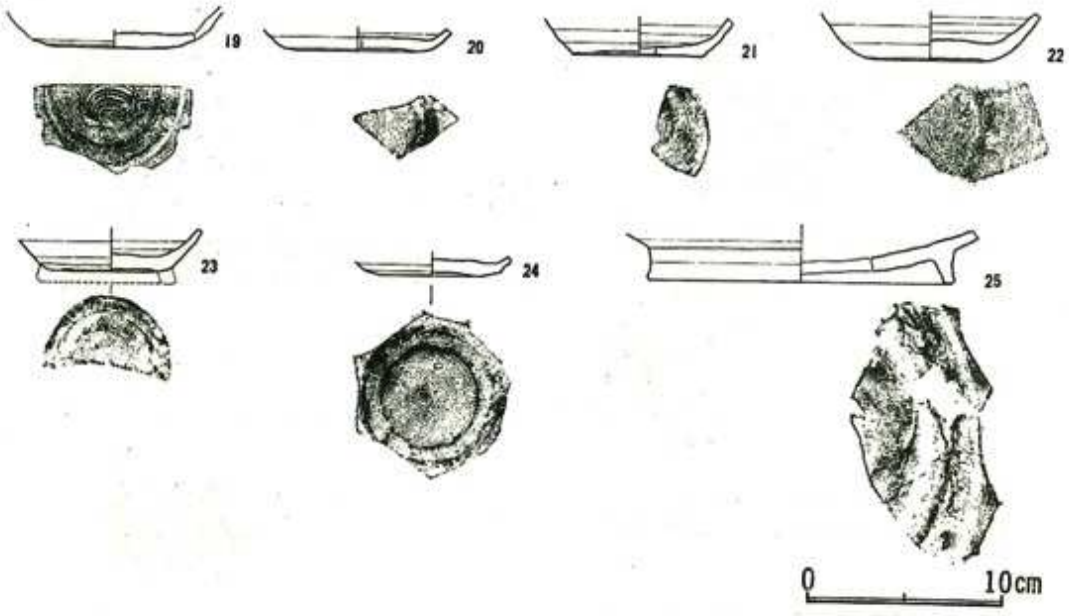
住居跡・グリッド出土の須恵器のうち、拓影図の必要なものを各住居跡・グリッド出土土器の実測図と分離して、ここに掲載する。以下簡単に土器の特徴を示しておきたい。

第32図1～3は蓋形土器で、1はリング状、2・3はつぶれた擬宝珠状及至ボタン状の鈕を有するもので、1は口縁部を欠き、2・3は鈕を欠損する。それぞれ天井部にロクロ右回転の回転ヘラケズリ痕を有し、中央から約1/2の部分まで達している。1の鈕はわずかに外傾して立ち、端部は突るようである。天井部～体部はゆるやかに下方に湾曲する。1の内面は自然釉がかかる。2・3は口縁部直立し、中位に凹面もつ。天井部は平らで、屈曲して体部～口縁部に移行。1・3は白色針状物質多く含み、2は少量。4は内面にカキ目調整痕もつ異形の蓋で、天井部～口縁部はロクロクナデ（ロクロ右回転）である。5・6は甕口縁部で、5は頸部に刷毛目状条痕もち、6は口縁部に1本単位、頸部に5本単位の櫛描波状文をもつ。5には白色針状物質を少量含む。7～13は1号住居跡出土の坏底部である。7は底部切り離し後、全面回転ヘラケズリ、8～13は回転糸切離し後、周縁部ヘラケズリであり、8は底径の半分以上がケズられている。10・13は周縁部を斜めに削るが、それ以外は平らに削っている。底部の断面形態や体部の立ち上がり方が一様でなく、時間差をもつようである。7・13は白っぽく焼かれ、それ以外のものはすべて白色針状物質を含む。14・15は2号住居跡、16は3号住居跡出土である。14は回転ヘラケズリで平らに削る。15は周縁部がやや斜め、内側が平らになる回転ヘラケズリ。16は平らに削られる回転ヘラケズリ。15・16は白色針状物質を含む。18は底部中央部ごくわずかに糸切り痕残し、回転ヘラケズリ。19は底部中央部に底径の1/3程糸切り痕残し、回転ヘラケズリ施す。18・19ともに白色針状物質を含む。20・22は底部糸切り離し未調整。21・24は底部糸切り離し後、周縁部回転ヘラケズリ。23は貼付高台が欠落し、底部は糸切り離し後高台貼付けのために一部ナデられる。25は高台付の甕の底部で、底面回転ヘラケズリ。高台は貼付高台であるが、ヘラケズリが施される。18・19・21・24には白色針状物質が含まれる。出土位置は1・3・6・21・24・25が表土、2がC—18区，4・5が1号住居跡、18・19はG—17区、20はD—24区、22はE—22区、23はE—21区である。

第34図は甕胴部破片の拓影図である。1～7は1号墳周辺の表土排除中の出土品で、外面平行叩き目、内面同心円状当て道具痕が施される。叩き板は柾目板の目と直角の方向に刻みを入れたもの、当て道具は、中央が凹み、ややゆるい沈線を同心円状に刻んだものを使用したらしい。1のように接合部に当て道具痕がスタンプされ。分割整形を裏付けるものや、内面にヘラナデを加え、部分的に当て道具を消すものもある。8・9は1号墳石列に混って出土したものだが、確実に伴うとは言えない。双方とも外面は浅い平行叩き目、内面は当て道具痕をきれいにナデ消す。1～7に対して



第32図　須恵器実測図および拓影図(1)



第33図　須恵器実測図および拓影 (2)

器肉薄い。白色針状物質わずかに含む。10・11は1号住居跡から出土。外面は自然釉・粘土塊が付着する。外面は柾目板に直交する刻みを入れる叩き板による平行叩き目、内面同心円当て道具痕。器肉薄い小型甕の破片か。12〜16は表土出土。14・16は1〜7に叩き目・胎土・焼成・器肉の厚さなどが類似する。15は8・9に類似する。12は外面浅い平行叩き目であまり明瞭でない。内面は同心円当て道具痕浅く不明瞭、ナデ消されているか。13は外面浅い平行叩き目不明瞭、内面は同心円当て道具痕、重複激しく、一部消失。

土錘（第35図・第36図）

土錘は住居跡内外から28点出土している。以下に個体別の観察の結果を列記しておく。

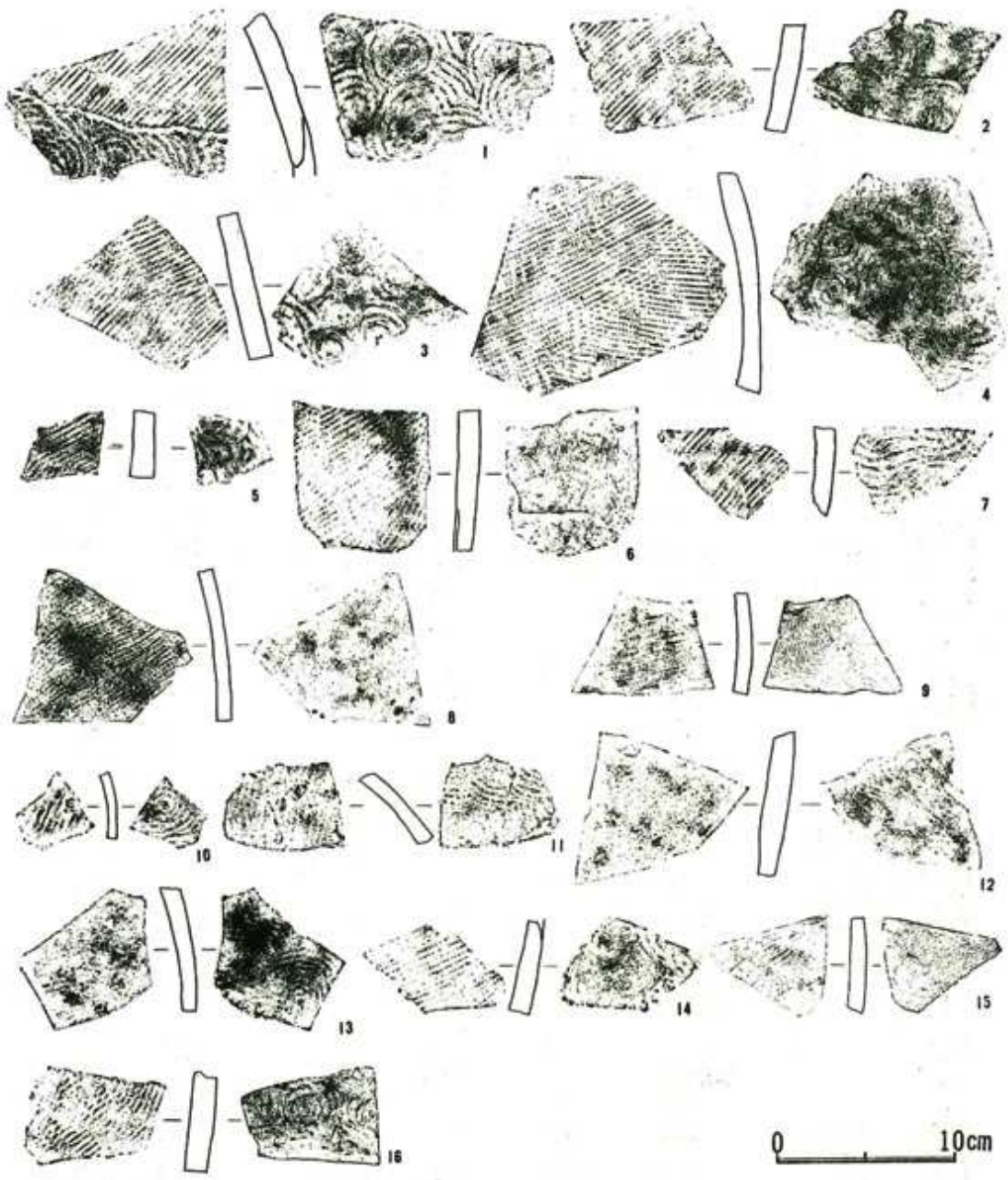
1（第35図1。以下番号は第35図・第36図における図の番号と一致するので、敢えて記さないことにする）は、一方の端部を欠失し、現在長4.9cmを測る。中位がやや太り、最大径1.75cmである。断面はやや歪んだ円形で、孔も径4mmの円形でほぼまっすぐ通っている。表面は工具でナデられ、胎土細、細粒砂多く含む。焼成良。暗褐色。E—17区。№ 238。

2は、一方の端部をわずかに切損し、現存長6.8cm。中位が太り、最大径1.85cm。断面楕円形。孔はまっすぐ通り、径約7mmで、端部はやや細い。表面はナデ。胎土細、透明細粒砂など砂粒多。焼成良。淡橙褐色、黒斑あり、C—18区№ 244。

3は、一方の端部から中位付近まで大きく欠失する。現存長4.9cm。中位やや太り、最大径1.8cm断面円形に近い。孔まっすぐ通り、径約5mm。表面ナデ。胎土細。透明細粒砂など砂粒やや多。焼成良。暗橙褐色。2号住№ 1324。

4は、一方の端部から中位まで欠失。現存長3.45cm。中位ゆるやかに太り、最大径1.55cm。断面楕円形。孔はわずかに曲って、径5.5mm。表面ナデ。胎土やや粗。砂粒やや多。焼成良。橙褐色。1号住№ 178。

5は、一方の端部を中位付近まで欠失。現存長3.35cm。中位ゆるやかに太り、最大径1.6cm。断

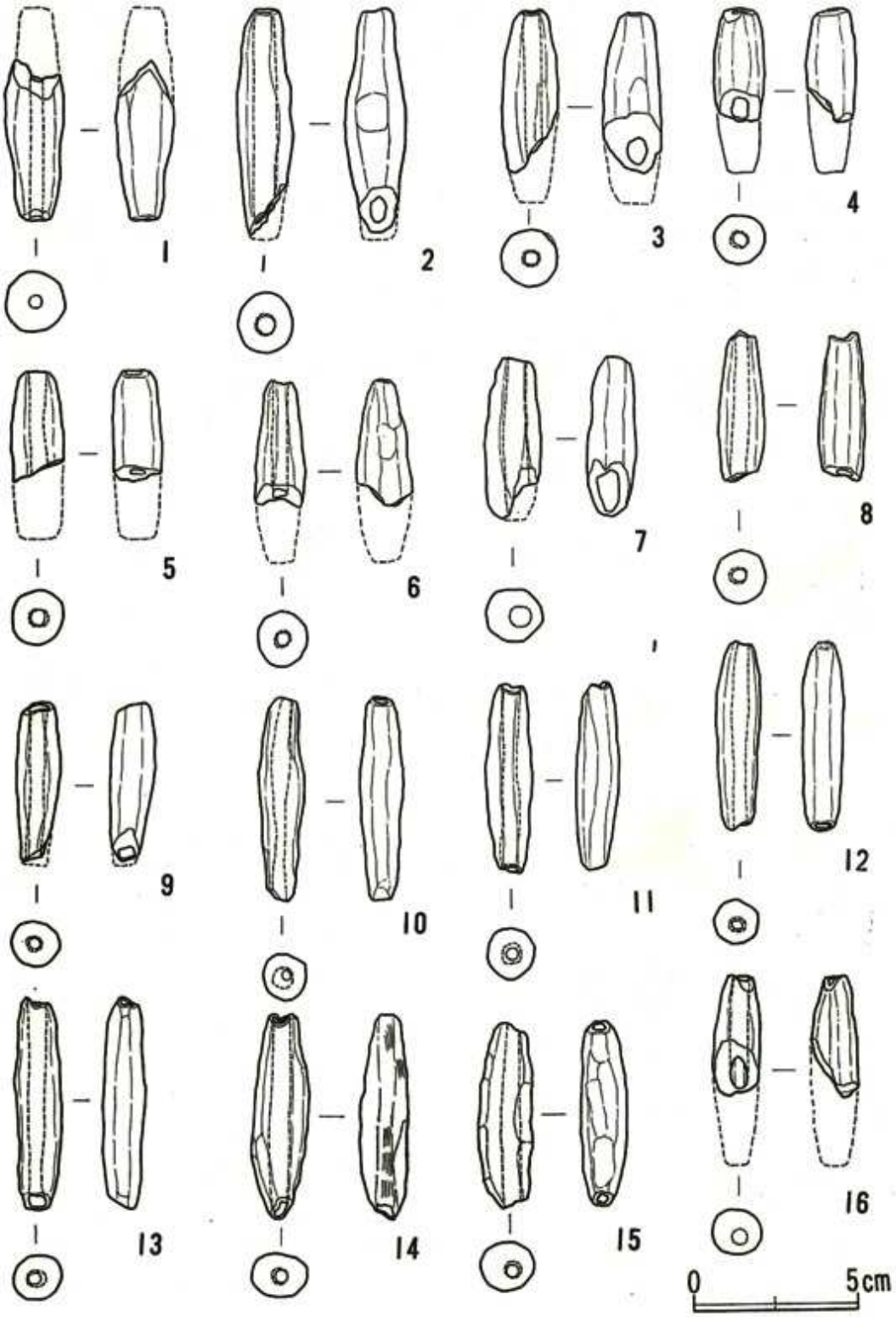


第34図　須恵器拓影図 (3)

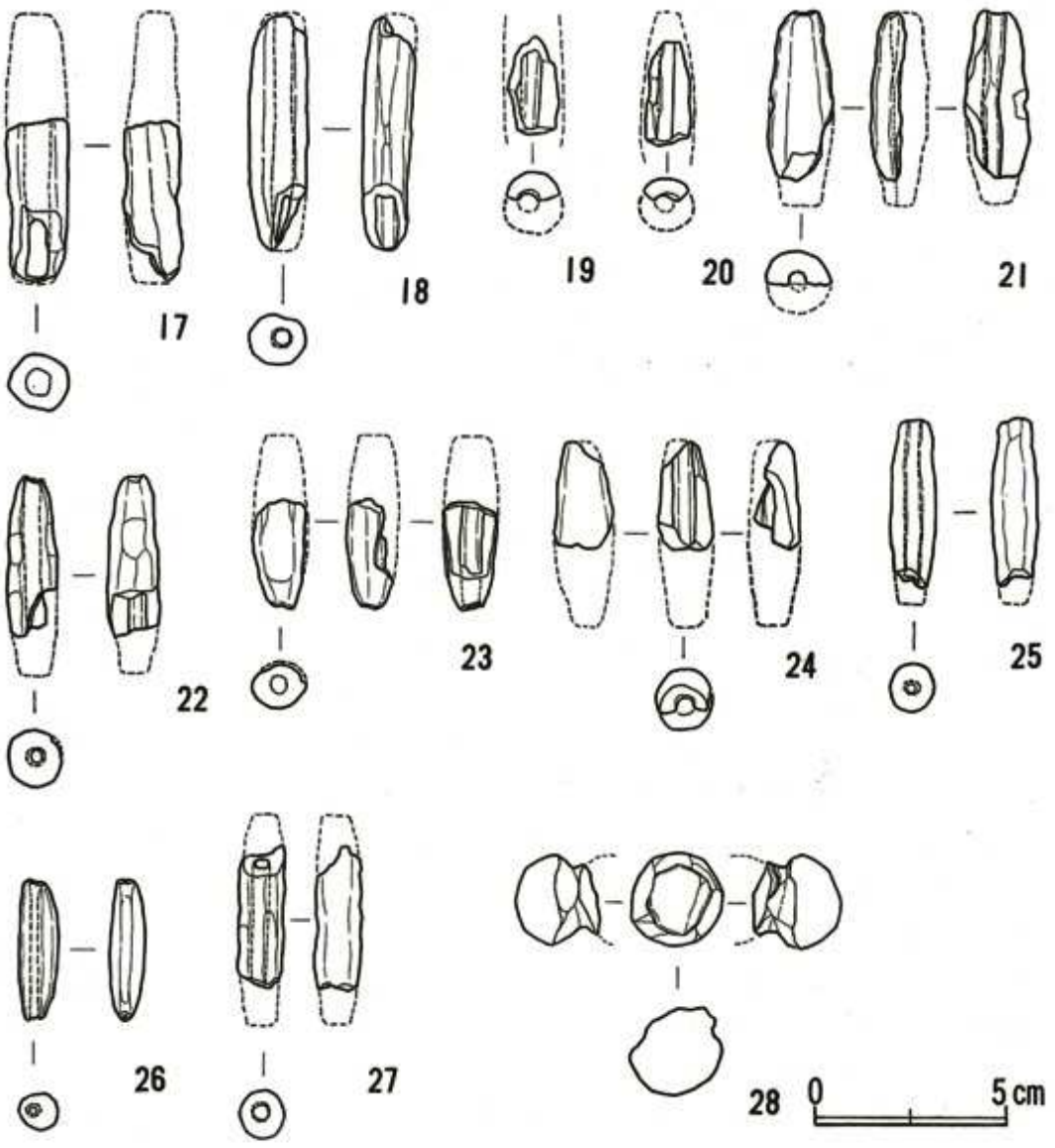
面楕円形。孔は中位で一部細まり、径5㎜。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。暗橙褐色、黒斑あり。3号住№ 8。

6は、一方の端部から中位付近まで欠失。現存長3.85㎝。端部細く、中位大きく太る。最大径1.7㎝。断面略卵形。孔はほぼまっすぐ通り、径約5㎜。表面ナデ。胎土細。透明粒・黒色粒など多。焼成良。暗橙褐色。2号住№ 695。

7は、一方の端部を大きく切損し、現存長4.9㎝。中位ゆるやかに太り、最大径1.7㎝。断面略卵



第35図　土錘実測図 (1)

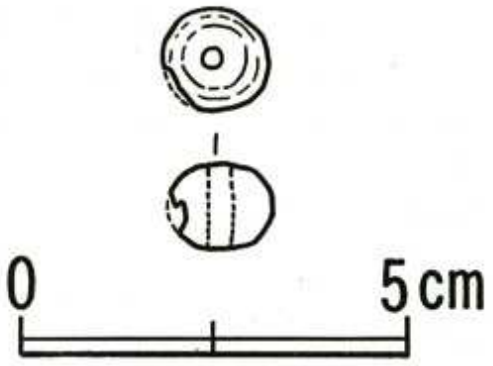


第36図　土錘実測図 (2)

形。小さな凹凸顕著。孔はやや曲り、径7.5㎜。表面ナデ。胎土細、粉っぽい。砂粒やや多。焼成良。淡橙褐色。C－26区 №25。

8、一方の端部を中位付近まで欠失か。現存長4.55㎝。端部やや細く、中位ゆるやかに太る。最大径1.45㎝。断面楕円形。孔はややよれて通り、径5.2㎜。表面ナデ。胎土やや粗。砂粒多。焼成良。淡褐色、黒斑あり。3号住№144。

9、一方の端部をやや小さく欠失。現存長4.8



第37図ガラス玉実測図

cm。切損した端部はやや細く、徐々に太り、反対側の端部はあまり細まらず、斜めに仕上げられる。最大径1.35cm。断面楕円形。孔はややよれていて、径も一定していない。最大径5mm。表面ナデか。胎土やや粗。砂粒、小石やや多。焼成良。赤褐色、黒斑部あり。1号住№1373。

10、完形。全長6.15cm。両端部やや細く、丸く仕上げられる。中位やや太り、屈曲部あり、最大径1.4cm。断面楕円形、一部突出する。孔はよれていて、径一定せず、最大径6mm。表面ナデ。一部平担面もつ。胎土細。細粒砂多。焼成良。赤褐色。3号住 №112。

11、完形。全長5.7cm。両端やや細く、丸い。中位やや太く、ゆるい屈曲部もって端部へ移行。最大径1.45cm。断面円形に近い。孔はややまっすぐ通るが、径が一定せず、最大径6mm。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。赤褐色。5号住 №620。

12、完形。全長5.7cm。両端やや丸く、最大径部分は一方にやや寄り、反対側端部から徐々に太り、銃弾形に類似する。最大径1.4cm。断面円形に近いが、ゆるい角をもつ。孔はまっすぐ通り、径は一定せず、最大径5mm。表面ナデ。胎土やや細。砂粒、小石やや多。焼成良。赤褐色。表土。

13、完形。全長6.4cm。両端斜めに仕上げられ、やや丸い。端部から中位までゆるやかに太り、一部屈曲あり。最大径1.4cm。断面楕円形。孔はまっすぐ通り、片側端部に向って径細まる。最大径5.7mm。表面ナデ。胎土やや細。細粒砂多。焼成良。赤褐色。5号住 №587。

14、完形。全長6.2cm。両端やや細く、ゆるく屈曲して、中位に移行。最大径1.7cm。ややつぶれ、断面楕円形。孔はほぼまっすぐ通り、最大径6.5mm。表面ナデ。一部浅い刷毛目状擦痕あり。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。暗赤褐色。G—16区 №306。

15、完形。全長5.6cm。両端やや細く、片側に湾曲するように整形され、反対側は指頭圧痕顕著。最大径1.65cm。断面楕円形。孔はやや曲って通り、最大径5.5mm。表面ナデ。胎土細。細粒砂多。焼成良。赤褐色。表土。

16、一方の端部から中位まで、全体の6割を欠失。現存長3.65cm。端部やや細く、中位に向かって徐々に太る。最大径1.45cm。断面楕円形。孔はやや曲って通り、最大径6mm。表面ナデ。胎土細。細粒砂ややあり。焼成良。暗赤褐色。表土。

17、一方の端部から中位までを欠失し、残存する端部も大きく割れる。ただし、残存面からは再利用を思わせる。現存長4.2cm。端部やや丸く、太さはあまり変わらない。最大径1.6cm。断面隅丸長方形に近い。孔は径大きく、ややまっすぐ通る。最大径6.8mm。表面ヘラケズリ後ナデか。胎土細。砂粒やや多。焼成良。淡褐色。第1試掘坑。

18、両端をやや大きく切損。現存長6.1cm。端部やや丸く、太さはあまり変わらないが、一方の側面はわずかに湾曲する。最大径1.52cm。断面楕円形でややつぶれた感じ。孔はややまっすぐ通るが、径は一定でない。最大径5.7mm。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。橙褐色。ただし黒斑部の面積の方が広い。表土。

19、小破片。現存長2.55cm。形状は不明だが、両端が細り、中位に向かって徐々に太る形態か。径は1.5cm程で、断面円形に近い。孔径5.5mmで、ややよれる。表面ナデ。胎土やや細。細粒砂多。焼成良。淡褐色。1号住 №1217。

20、小破片。現存長2.7cm。やや端部に近い破片で、端部が細り、中位に向って徐々に太る形態。

断面円形に近く、径1.4㎝、孔径5㎜程か。孔はややまっすぐ通る。表面ナデ。胎土細。細粒砂少量。焼成良。淡褐色。1号住 №.680。

21、全体の1/4程の破片。端部やや丸く、細く、中位に向かって徐々に太る。現存長4.4㎝。最大径1.7㎝。孔はややよれて通り、最大径5㎜。表面ヘラケズリ後ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。黒色。残存部はすべて黒斑部か。1号住 №.731。

22、一方の端部から中位付近まで欠失。端部やや丸く、細く、中位に向かって徐々に太る。やや凹凸あり。現存長4.15㎝。最大径1.35㎝。断面円形に近い。孔はややよれて通り、最大径4.7㎜。表面ナデ。胎土細。砂粒多少含む。焼成良。淡褐色。一部赤色の部分あり、丹塗か。1号住№.1056。

23、1/4強が残る破片。現存長2.85㎝。端部やや丸く。細く、中位に向かって徐々に太る。最大径1.45㎝程か。断面楕円形。孔はほぼまっすぐ通り最大径6㎜。表面ナデ。胎土細。砂粒やや多。焼成良。淡橙褐色。7号住。

24、1/4弱の破片。現存長2.8㎝、端部やや丸く、細く、中位まで徐々に太る。やや直線的。最大径1.55㎝。断面円形に近い。孔はまっすぐ通り、最大径5.7㎜。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。橙褐色、あるいは丹塗か。2号住 №.386。

25、一方の端部小さく欠失。両端はややつまみ出され、中位に向って小さく湾曲してふくらむ。最大径1.2㎝。断面円形に近い。孔はややよれて通る。最大径4㎜。表面ナデ。胎土細。細粒砂多。焼成良。赤褐色。黒斑あり。D—18区 №.452。

26、完形。非常に細身の形態。全長3.65㎝。端部やや細く、片側面はやや大きく湾曲して太る。最大径1.05㎝。断面卵形。孔はまっすぐ通り、径2㎜程。一方の端部は孔が広がっている。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。淡褐色。黒斑部あり。D—20区 №.42。

27、両端を欠失する。中位は太らず、指頭圧痕状の凹凸目立つ。最大径1.2㎝。断面円形に近い。孔はまっすぐ通り、最大径4.5㎜。表面ナデ。胎土細。細粒砂やや多。焼成良。淡褐色。丹塗。2号住 №.1360。

28、分銅状の形態。1/2残存。現存長2.2㎝。最大径2.4㎝。松茸状を呈する体部が両側に突き出し、ナデ整形。中間部は四方からヘラで削られ、抉り込まれている。胎土細。砂粒多量に含む。焼成良。淡褐色。一部赤い部分あり。G—18区 №.495。

ガラス玉（第37図）

1号溝覆土出土。径約1.35㎝、幅約1.15㎝。孔径3㎜。孔はまっすぐ通る。表面は白と水色の線が縞状に流れ、ややザラつく。数ヶ所小穴があいている。帯状に剝離し、断面は水色のガラス質になっている。ガラスを糸状に伸ばし、径2～3㎜の棒に巻きつけ、表面を平らに仕上げる、というような製法を思わせる。1号溝は住居跡群を破壊している上、大半が発掘区外にあるので、この玉が本来はいかなる遺構に付随するものであったかは明確にしえない。

自然遺物（図版22）

自然遺物は骨2点、モモの種子の炭化物2点を写真図を掲載したが、これ以外にも1号墳石室奥壁付近にごく小さく、部位の不明な骨片が出土している。

まず、骨について見てみよう。上はC—18区・D—18区・C—17区の土器溜りに付随して出土し

たもので、何の骨かも、部位も不明であるが、厚みが薄く、幅も小さいことから、それほど大きな動物の骨ではないと判断できよう。

下は2号溝・石列の中から出土したもので、大変もろくなっていた上、細かく破損していたので、やはり、動物・部位は判断しがたい。あるいは、牛・馬の類の骨・歯の一部であろうか。

モモの種子は双方とも3号住から出土したもので、大きさは左が長さ1.9cm、幅1.2cm、右が長さ1.7cm、幅1,0cmである。双方とも半面は失なわれ、きれいに炭化し、表面のしわも損われていない。これ以外にも、保存状態の悪いモモの種子がグリッドから出土している。

V　結語

以上、時には冗慢に、時には筆足らずになりながらも、新ケ谷戸遺跡の調査の概要を記述することができたが、調査時点や現在考えていることを本章で、簡単にまとめておきたい。

本遺跡においては、各種の注目される遺構・遺物の検出を見たが、遺構については、個別の事実記載の中に考察を織り込んでしまったので、遺物の問題を中心に扱っておこう。

まず、1号墳の遺物の問題である。1号墳からは須恵器6点（フラスコ型細頸瓶3、栓状土製品付き甑1、平瓶1、坏身1）と土師器坏1点、および副葬品として直刀2本、鉄鏃片2点、工具片2点、鞘金具の断片1点が出土している。ここでは特に土器に注目しておきたい。土器はすべて石室外の出土品で、墓前祭に伴なう供献土器であろう。本文に述べたように、前庭部外部の墳丘テラス上の左右に平瓶・甑が置かれていて、前庭部内外に散乱する他の土器とは別の扱いをされていた。これは、墓前祭のプロセスにおける土器の置かれ方を示すか、別の時期（追葬期）に前庭部前方で土器が破砕されたかを示すと思われる。前者とするならば、土器の示す時期はほぼ一致していることになり、後者ならば、土器の様相は（特に甑・平瓶とそれ以外の間において）若干の相違を持っていることになる。しかし、追葬が10数年間にすべて終了したと仮定すれば、土器の型式差は認めえないことになる。ごく常識的に見ていけば、坏身と甑は古く、フラスコ型細頸瓶が新しい様相を示す土器と考えられ、土師器坏と平瓶の帰属する時期もその両相の幅の中で考えねばならない。前者が陶邑TK 209型式（註6）に近いもので、後者が7世紀前半代のやや新しい段階と考えるのが、従来の通説的理解であり、現状では筆者もこれに異を唱えるつもりもない。しかし、TK 209型式を6世紀末～7世紀初頭とすると、約50年近い時間差をこの中で考えねばならないことになるが、土器の出土状態・土器の様相などから見る限りでは、それほどの時間差があるとは考えにくいのである。

フラスコ型細頸瓶は，東海地方で豊富な出土例が知られ，関東で出土するものも，大方東海産として扱われてきた。しかし，北武蔵産と思われるフラスコ型細頸瓶の資料も紹介され(註7)，必ずしも，東海からの搬入品ばかりでないことが検討されてきている。そこで改めて，本遺跡のフラスコ型細頸瓶も検討しておきたい。1号墳出土例は3点であるが，いずれも焼成や色調が微妙に異なり，すべて窯が異なる可能性もある。第9図1・2は口縁部を内側に直角に折り曲げるのみのものと、口縁部直下に軽い段をつけるものという違いがあり、色調も異なるが、自然釉の発色や範囲、器面調整（特にヘラケズリの範囲、胎土や焼成のあり方など）が類似する。一方、3は口縁部と胴下半部が欠けているので、こうした細かな様相は判断できないが、胴部の形態はややつぶれた球形で、ほぼ球形に調整される前二者と異なり、提瓶的な作りを意識した寄居町三ケ山の出土品と類似する特徴をもつ。さらに、三ケ山例との類似点は自然釉が濃緑色に発色し、頸部～胴部の大半にかかり、厚めにかかる点にも見出される。また、部分的に空気が入ってふくらんだり、粘土に亀裂を生じてしまっている箇所もある。色調も1・2は灰白褐色に近いが、3はやや青味がかり、ネズミ色に近い。これらの点から1・2は東海地方産（特に遠江から三河を中心とする地域）の製品であ

り、3は北武蔵産の製品であることを推定することができよう。

他の器形について考えてみたい。甕は頸部が強く絞られ細頸になっていて、口縁部の段も明確で肩部も弱く張る。ほぼ近い形態と思われるものは、東松山市下唐子の青塚古墳(註8)、吉見町かぶと塚古墳（註9）の出土例がある。これらは7世紀初頭以前と考えられている上に、フラスコ型細頸瓶を伴出しない。また、フラスコ型細頸瓶と共伴する甕は桶川市西台7号墳（註10）の例があるが、ここで出土している甕は口縁部の開きが、本遺跡例に比べて強く、口唇部が急に外反することも相異する点である。尚、西台7号墳例に近いものは鴻巣市宮登古墳（註11）の出土例がある。むしろ西台例・宮登例を新しくし、本遺跡例を青塚例・かぶと塚例に並べるか、やや新しいとすることもできるのではなかろうか。陶邑古窯址群では、第3型式第1段階までは甕の出土が知られる（註12）が形態や調整のあり方を見る限り、これらの例は陶邑の技術的系譜の外にあり、東日本の主体性の所産となることは疑うべくもないであろう(註12)。次に。平瓶であるが、これも形態的には異例に属す上に、カキ目が天井部から胴部上半まで施される。成形技法や器形のあり方から見れば、この土器は提瓶に作られるべきだったものが、制作中のミスで平瓶にせざるをえなくなったか、あるいは、提瓶の需要が減ってきたので、故意に提瓶と平瓶の中間にあたる土器を作ったようである。いずれにしても、このような平瓶は類例に乏しく、今後詳しく検討することにしたい。坏は小型化のいちじるしいもので、口縁部が直立する、蓋の逆転した形態のものである。陶邑TK217型式あるいは第Ⅲ型式第1段階に相当する器形であるが、体部に沈線3本を入れるなどはこの土器の個性である。土師器坏は年代の限定がむずかしいが、むしろ逆に、TK217型式併行期と考えるべきであろう。以上検討した結果、時間差を持たないとすると、TK217型式併行期をとらねばならないであろうから、7世紀第1四半期後半～第2四半期という年代にあてられよう。

ここで被葬者の想定をまじえて、これらの土器の出土した意義を検討しておきたい。1号墳はすでに記したように2段築成の円墳であったようであり、規模や葺石を持つことなどを考慮すると三ヶ尻のやねや塚古墳（註14）と比肩すべき古墳であると考えられると思う。しかし、やねや塚は豊富な副葬品をもち、円筒埴輪列が一周し、須恵器も伴なうが、新ヶ谷戸1号墳より若干古い時期の所産であろう。やねや塚は群集墳の中にあるが、新ヶ谷戸1号墳はむしろ孤立した状態にある。新ヶ谷戸の方が、より新興村落首長というにふさわしい位置づけをできる。しかも、この被葬者は少数の須恵器しか所持することのできなかった一般的な群集墳被葬者層と異なり、東海や北武蔵の窯業生産地と広く交渉をもち、多数の須恵器を入手し、惜しげもなく墓前祭に使用したのである。

次に集落跡出土の土器について考えてみよう。5軒の重複の認められる住居群もあるが、土器の遺存は住居ごとにかなりの較差があり、系譜や器種交替を明らかにできる資料は少ない。グリッド出土品を考慮したとしても、甕については、口縁を分厚く作り、胴の張る丸甕の方がむしろ多く、器壁を薄い粘土板で作り、輪積みしていく「く」の字状口縁の長胴甕（註15）はやや少なかった。重複する5軒の住居の中では5号住が最も古いことは本文で述べたとおりであるが、この5号住と3号住からは口縁部が外傾して、口縁部中位と体部境とに段をもつ坏が主体となる土器群が出土している。3号住は鬼高式土器からのつながりを思わせる鉢形土器も出ている。これらは、住居跡群中の土器の中では最も古く、7世紀後半～8世紀初頭の土器群であろう。4号住に一部の破片が流

れ込んだ5号住の長胴甕も荒いヘラケズリを施す鬼高終末期的な土器である。これに続いて1号住およびG—18区出土の土器群があるが、どちらにも器高の深く口径の大きな坏で、内面に斜放射状暗文、外面に横位の暗文を施す土器があり、ややゆるい「く」の字状口縁を呈する長胴甕をもつ一群がある。この土器群の主体となる坏は口縁が内湾気味に直立し、稜を持たずに丸底の底部へ移行する器形であり、児玉郡の土器の変遷（註16）を参考にするならば、3・5号住との間に、口縁部が内折し、口径の大きな丸底の坏や、口縁部が短く直立する坏が存在せねばならないが、こうした資料が欠けている。あるいは、この段階の土器は熊谷・妻沼周辺では登場せず、3・5号住のような形態のものが残存してくるのではなかろうか。稜をもつ坏が8世紀代まで残ることは、福島以北の様相を見れば明らかであるし、栃木県南河内町薬師寺南遺跡（註17）においても明らかに残存している。そこで、当地方においては、下野地域と同様に8世紀前半代のある時点まで鬼高的様相をもつ土器が残り、8世紀中様前後から稜を持たない坏と薄手の長胴甕が確立するという変遷をたどった可能性があることを指摘しうるのである。2号住の土器も、薄手の「く」の字状口縁長胴甕と口縁部が内湾気味に直立する坏とを主体とする土器群で、1号住と大きな隔たりを感じない。1号住からは完形に近い須恵器坏が1点出土しているが、これは、底面を平面よりはわずかに凸面気味に回転ヘラケズリし、中央に小さく回転糸切りの痕跡を残す特徴をもつ。この他、底面を全面回転ヘラケズリしてしまうものや、糸切り痕は残すが、底面はほぼ水平に調整していくものが多い。これらは白色針状物質を含むものが多いので、大半は南比企窯跡群の製品と考えられると思う。しかし、胎土や焼成を見る限りでは、他の数ヶ所からの搬入品を含むようであり、前内出窯跡（註18）の製品はかえって少ないように見える。前内出より古いとすると、判明している窯の少ない時期に上がってくる可能性もあるが、南多摩の百草・和田1号窯や御殿山9号窯（註19）よりは新しい段階にあると見たい。そうすると8世紀第2四半期～第3四半期のあたりの年代で見ていけそうである。

集落跡の下限は高台坏や内面黒色処理のロクロ土師器の存在などから、9世紀後半～10世紀初頭ぐらいまで下るようである。従って、約200年前後が集落の継続期間となり、8世紀第2四半期～第3四半期が集落のピークになる時期で、土器の変革も児玉に数十年遅れをとるようである。本遺跡の暗文を持つ大型坏は、奈良の坂田寺の池SG100の土器（註19）の系譜にあるようであるが、約100年の隔たりがある。児玉地方では暗文の出現も早く、北武蔵的な土器に相当量暗文を普及させるが、この辺にも両地方の社会変動のあり方の相違が看取されるのである。

註1　胴張り石室の毛野型・武蔵型の提唱は金井塚良一氏によるものであり、本稿でも従っておく。
金井塚良一『吉見百穴横穴墓群の研究』1975年　校倉書房　など

註2　鈴木徳雄「長沖古墳群（第4次）の調査」『第12回遺跡発掘調査報告会要旨』1979年　埼玉考古学会

註3　都出比呂志「集落と地域圏——ムラとムラとの交流——」『図説日本文化の歴史』第1巻　1979年　小学館
山田猛「七世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』111号　1981年　考古学研究会

註4　宮崎朝雄他『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　中堀・耕安地・久城前』1978年　埼玉県教育委員会

註5　増田逸郎他『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　下田・諏訪』　1979年　埼玉県教育委員会

註6　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年　平安学園考古学クラブ

註7　高橋一夫「寄居町三ケ山出土のフラスコ形須恵器」『埼玉考古』17号　1978年　埼玉考古学会

註8　金井塚良一・小峰啓太郎『青塚古墳』1964年　東松山市教育委員会

註9　註1に同じ

註10　塩野　博『西台遺跡の発掘調査』1970年　桶川市教育委員会

註11　金井塚良一『宮登古墳の発掘』1959年　鴻巣市教育委員会

註12　中村　浩『陶邑Ⅰ』1976年　大阪文化財センター

註13　高橋一夫氏が北武蔵における須恵器生産の地域色の問題を体系的に論じられている。
高橋一夫『羽尾窯跡発掘調査報告書』1980年　滑川村教育委員会

註14　小久保徹「三ケ尻林遺跡(上越新幹線熊谷1号)の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』1980年　埼玉考古学会

註15　このタイプの甕から「コ」の字状口縁の甕への技法的変遷については、鈴木徳雄・赤熊浩一両氏が岡部町白山遺跡の調査報告書において詳細に検討される予定である。

註16　玉口時雄他『シンポジウム盤状坏——奈良時代土器の諸相』1981　相武古代研究会・東洋大学未来考古学研究会　の河野喜映氏発言部分116ページ

註17　橋本澄朗・川原由典・梁木誠『薬師寺南遺跡』1979年　栃木県教育委員会

註18　高橋一夫『前内出窯址発掘調査報告書』1974年　埼玉県遺跡調査会

註19　服部敬史・福田健司「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号　1979年　神奈川考古同人会
服部敬史・福田健司「南多摩窯址群による須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号　1981年　神奈川考古同人服会

註20　西　弘海他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978年　奈良国立文化財研究所